



5124
104



始



574-104



井上 昂 著

支那漫遊記

大正
12.5.23
内交



靜觀

松陰



大正癸亥夏

長生題





善
郎

國
之

之

大正癸亥夏

長生題



序

五千年の歴史を有し廣袤四百餘州を數ふる支那老國の一葦帶水を以て境を接しながら日本人は餘り支那大陸の事情を知らぬ。

日本は東洋の先進國に威張つて見ても夫は茲半世紀程以來のことで、過去幾世紀の永き歴史に於て、佛教といひ儒教といひ諸般の文物制度悉く先進の支那より傳へ來つたのである。所謂東洋文明が過去の日本を作り來つたのみならず、現代に於ても猶宗教、文學、教育、思想、風俗、民情等有ゆる方面に支那文明の感化が潜在せるを認むるのである。

斯くの如く地理的關係や歴史的因縁を考へ來るに、日本人は今少しく支那に就て研究に諒解と親善の實を擧げ、隣邦唇齒の關係を強くせねばなるまいと思はる。

西歐文化を謳ふて學究や視察や漫遊に洋行する人々は年々に増加するが、お隣の支那に

旅行して視察や漫遊を試むる人は割合に少ない。

近頃新聞社が支那觀光團を募集してゐるが、之は實に此の意味に於て良き試みである。年々歳々花見遊山などに時を金を價すよりも支那を見て來る事は價値に於ても趣味に於ても遙に有意義の事であらう。

或は支那は日本のような花や山は少ないかも知れぬが、他山の石や土産物は澤山ある。よし持つて歸るものは少なくとも海を渡つてふりかへつて日本見物が出來たら夫が何よりの土産であらう。家の中に居ては家の外觀は見へない如く、日本に居ては日本の外觀は見られない。

天産無限の寶庫たる世界第一の原料國と稱せられ、四億の人口を有する大消費地たる支那大陸は、日本の商工貿易の消長、日本民族の經濟的立國の上に、極めて重大なる關係を有するのである。政治家や外交家が日支親善にベストを盡すことが肝要なるに共に一般の

日本人殊に商工業が親しく支那の國土を踏み民情を知り支那人と個人的に相交る事が一層大切なる事であらう。

戦争に負けた露西亞人や支那人をロスヶやチャンコロと輕蔑して彼等を何時も下手に見る事は甚だよくない。ここで、劍の戦争に強くても平和の戦争にはいつも負けてゐる日本人は實に禍なるかなといひたくなる。

此度商用と漫遊を兼ねて支那、滿洲を走り廻つてこんな事を深く考へさせられた。初めての支那旅行だから夫丈け凡ての見聞が可なり強い印象となり、又非常に愉快に感ぜられた。同時に又觀方の違つた事や考へ方の淺薄な事も多い事かと思ふが夫は固より赤毛布のここだから赤面しても當り前と觀念してゐる。

旅程約四十日間行きしまゝ觀ぜしまゝの走り書きの紀行日記、多忙のまゝに文體修辭を整へる時間もない。只愉快なりし旅行の記念として一本に編したのであるが幸に支那滿洲

に初めて旅行する人々に多少の手引となり、又何かの参考ともならば、それこそ僕我の功名の甚しきものであらう。

阪神間 蘆屋にて

大正十二年四月

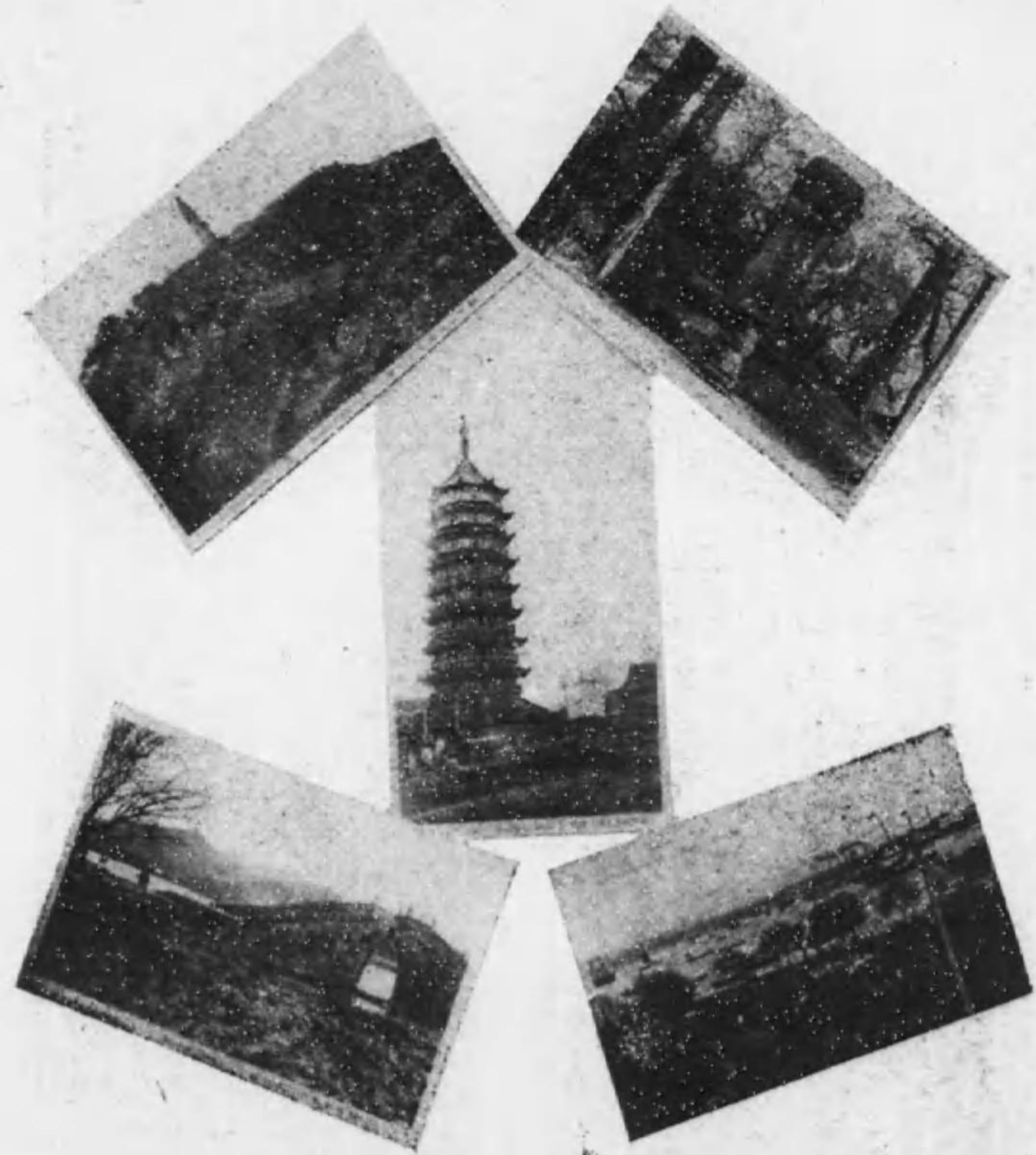
著者識す



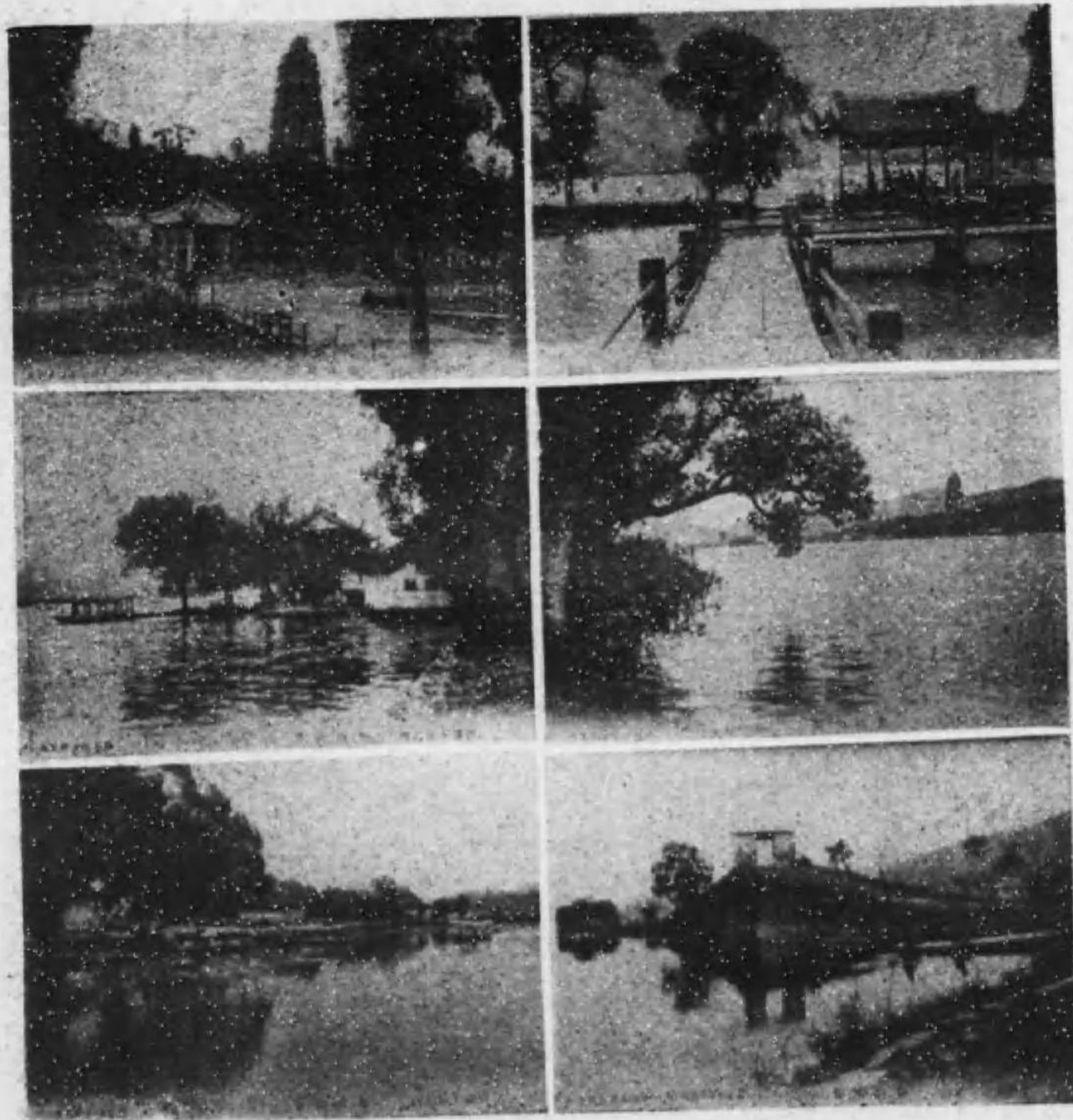
著者 (支那海) (テ)



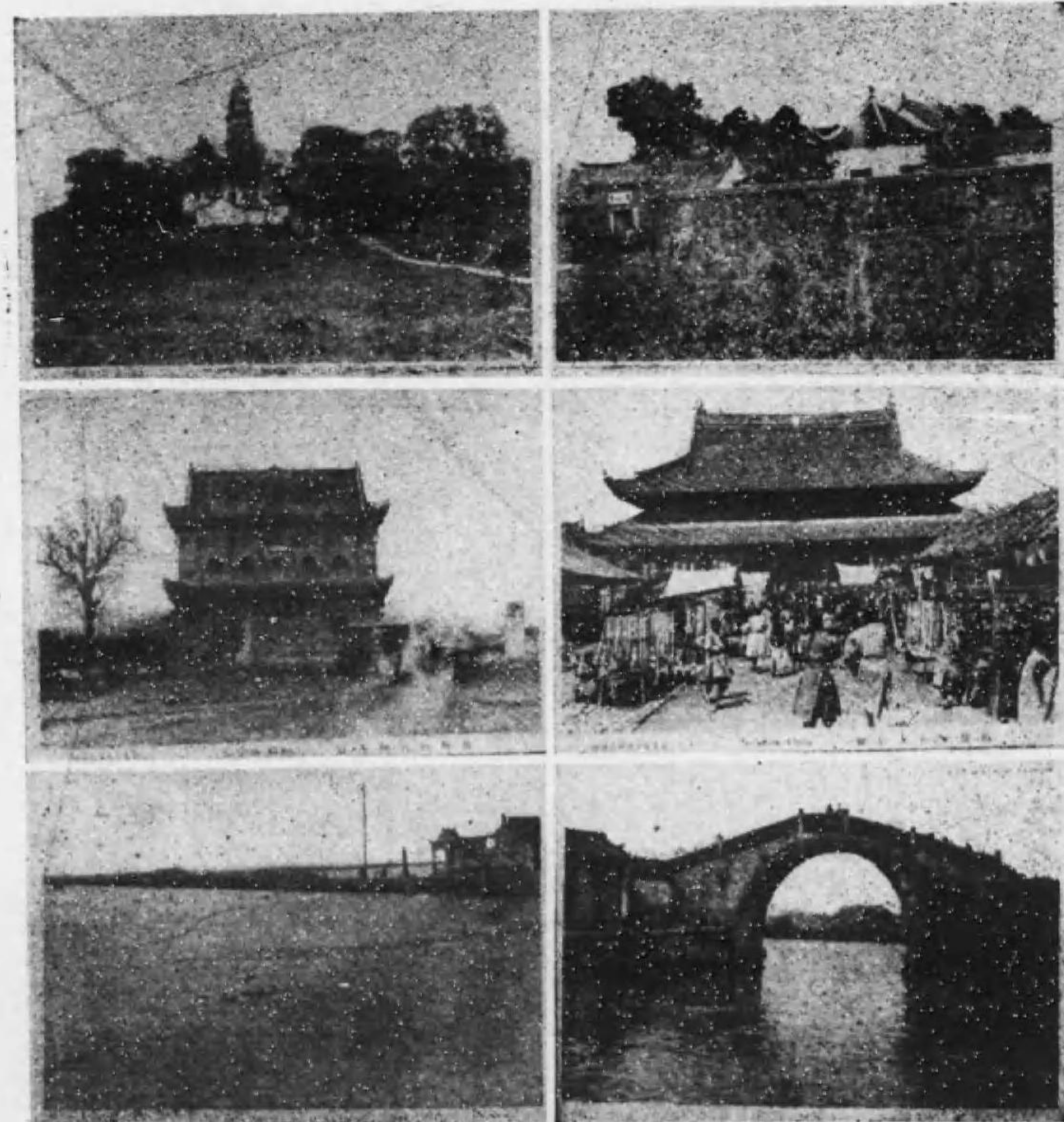
館薬路馬四海上 俗風那支 りよ右段上
 全 車小の那支 りよ右段中
 俗風那支 亭心湖内城海上 りよ右段下



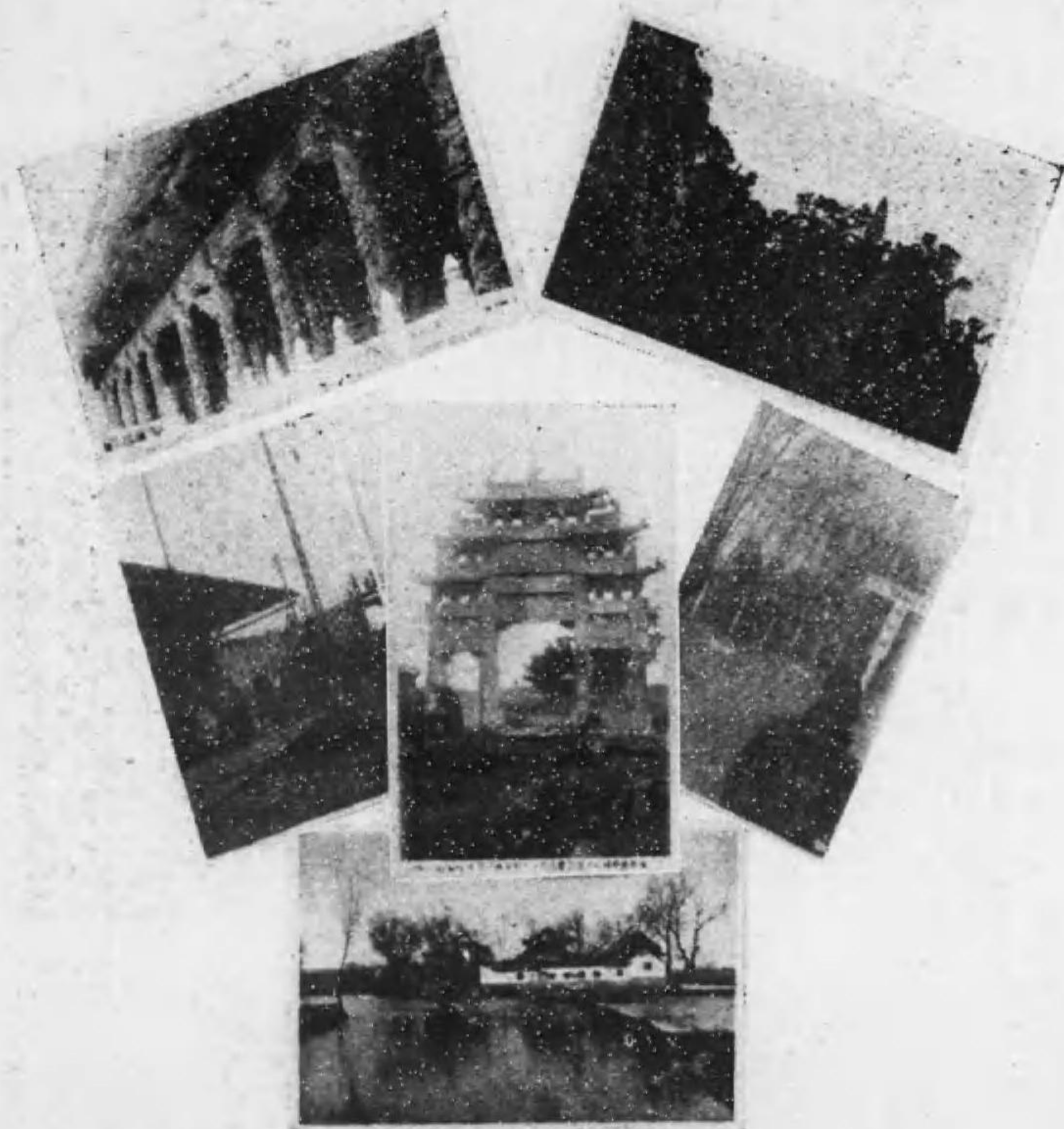
望遠山巖靈外城州蘇 墓の師先子孔阜曲 りよ右段上
 塔寶の寺北内城州蘇 段 中
 望遠山方上外城州蘇 江浦黄及園公海上 りよ右段下



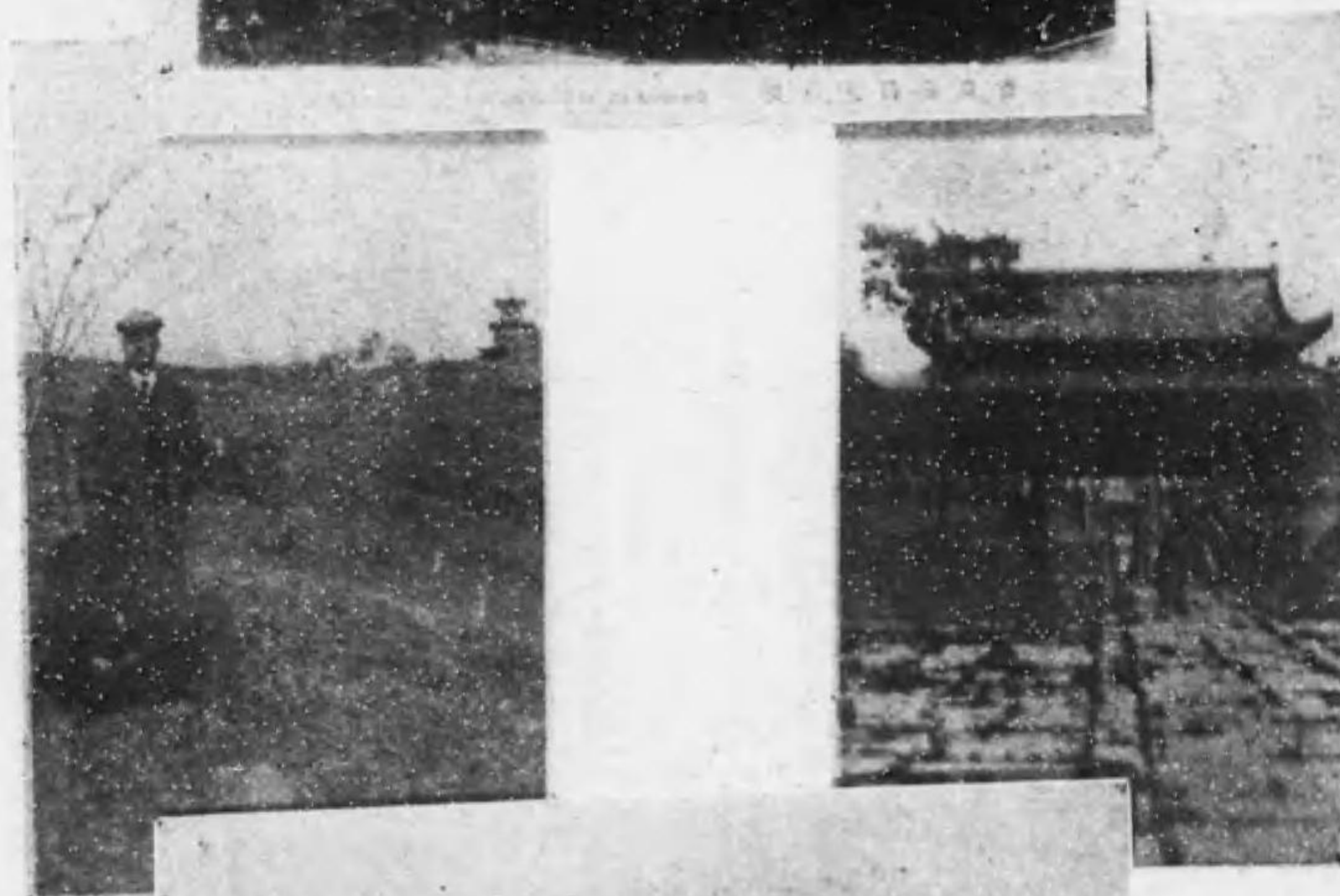
鐘晚屏南 全 月印潭三湖西 りよ右段上
 月秋湖平 全 照夕峰雷湖西 りよ右段中
 荷風院曲 全 雪殘橋斷湖西 りよ右段下



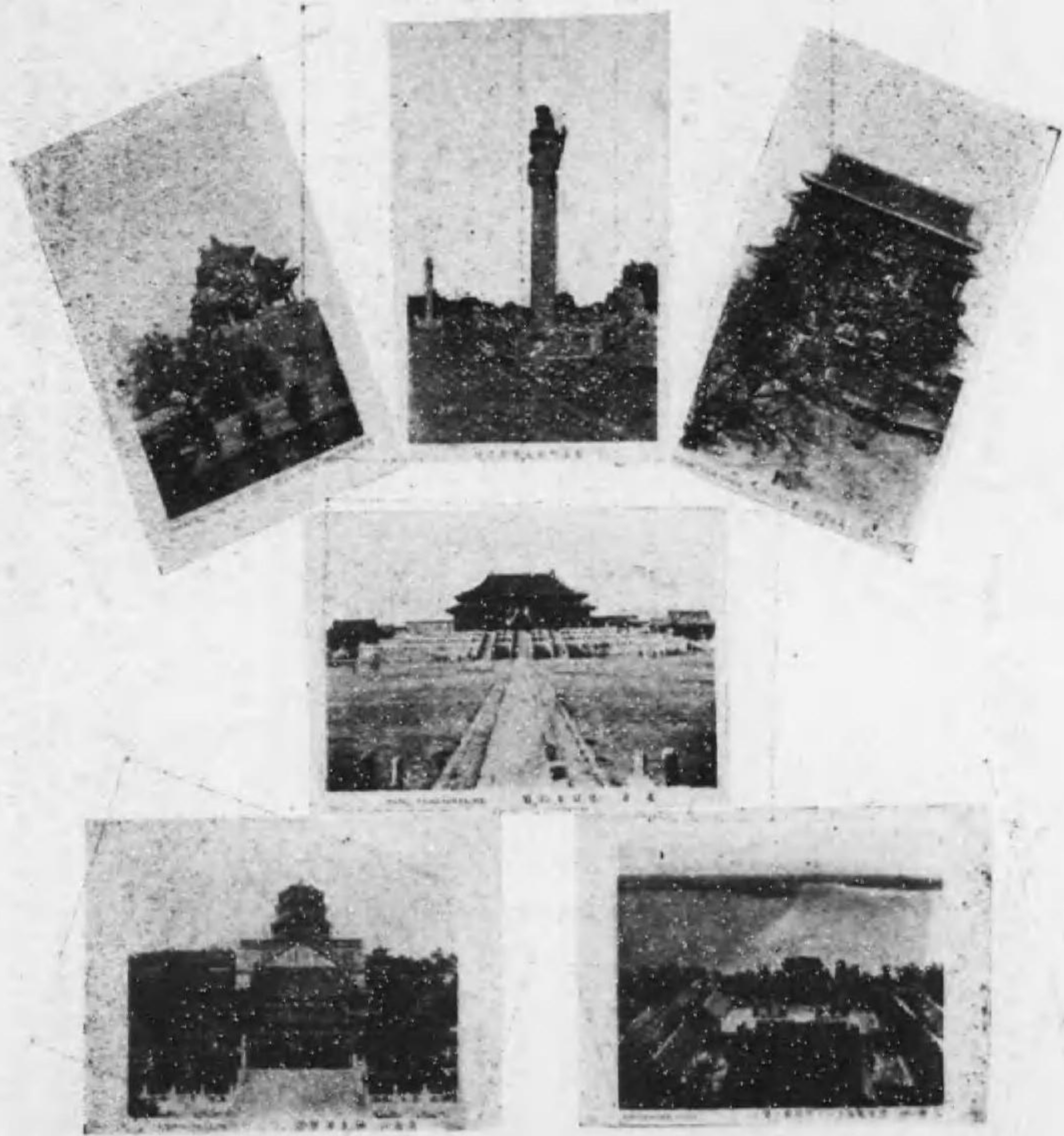
丘虎外城州蘇 寺山寒舊外城州蘇 りよ右段上
 殿梁無内城州蘇 觀妙玄内城州蘇 りよ右段中
 橋帶寶外城州蘇 橋楓外城州蘇 りよ右段下



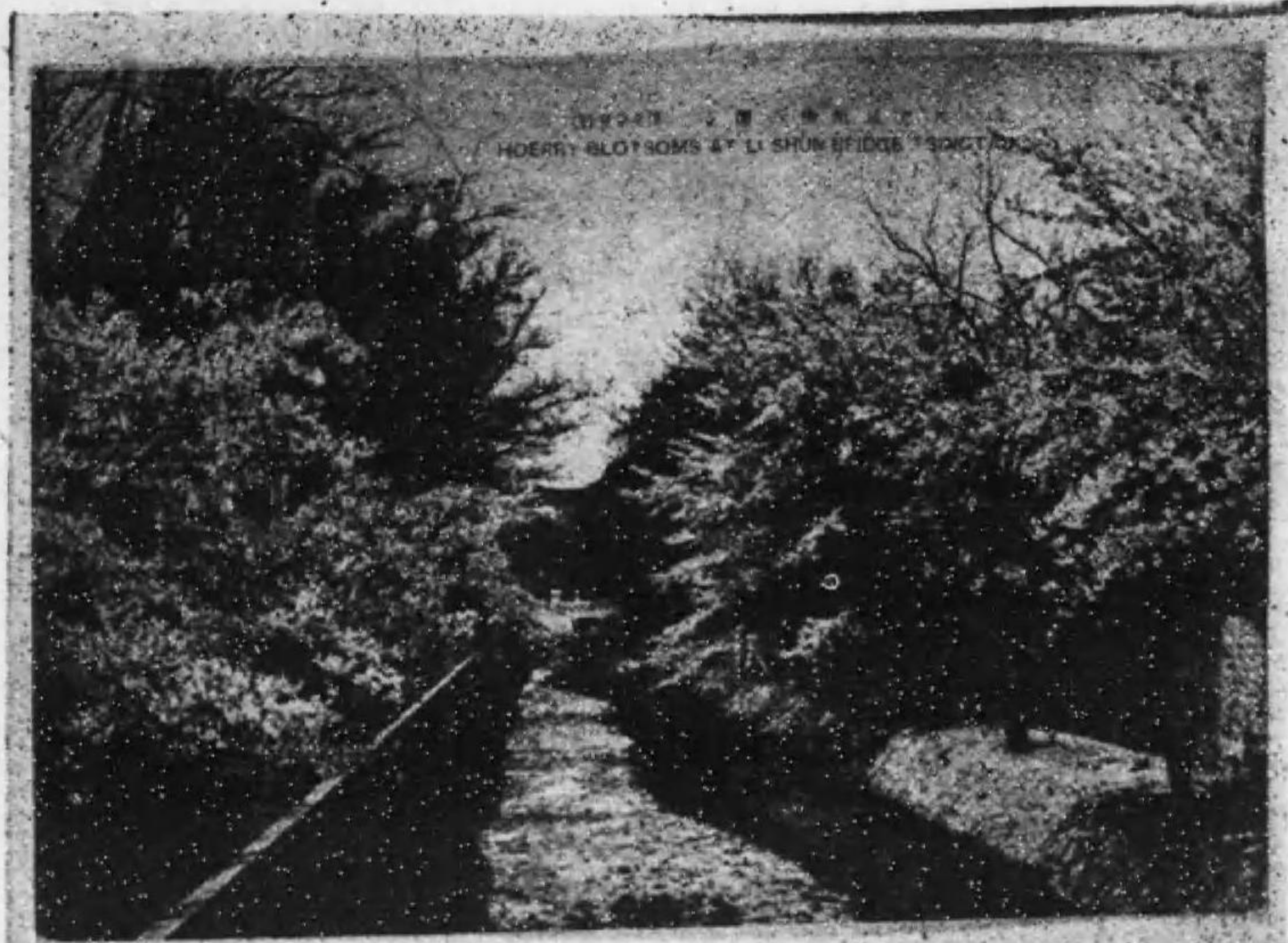
殿成大廟子孔 峰秀獨洞龍府南濟 りよ右段上
 場車停南濟 牌操節旨聖の外城阜曲那支 鐘頭泊線浦津 りよ右段中
 湖明大南濟 段下



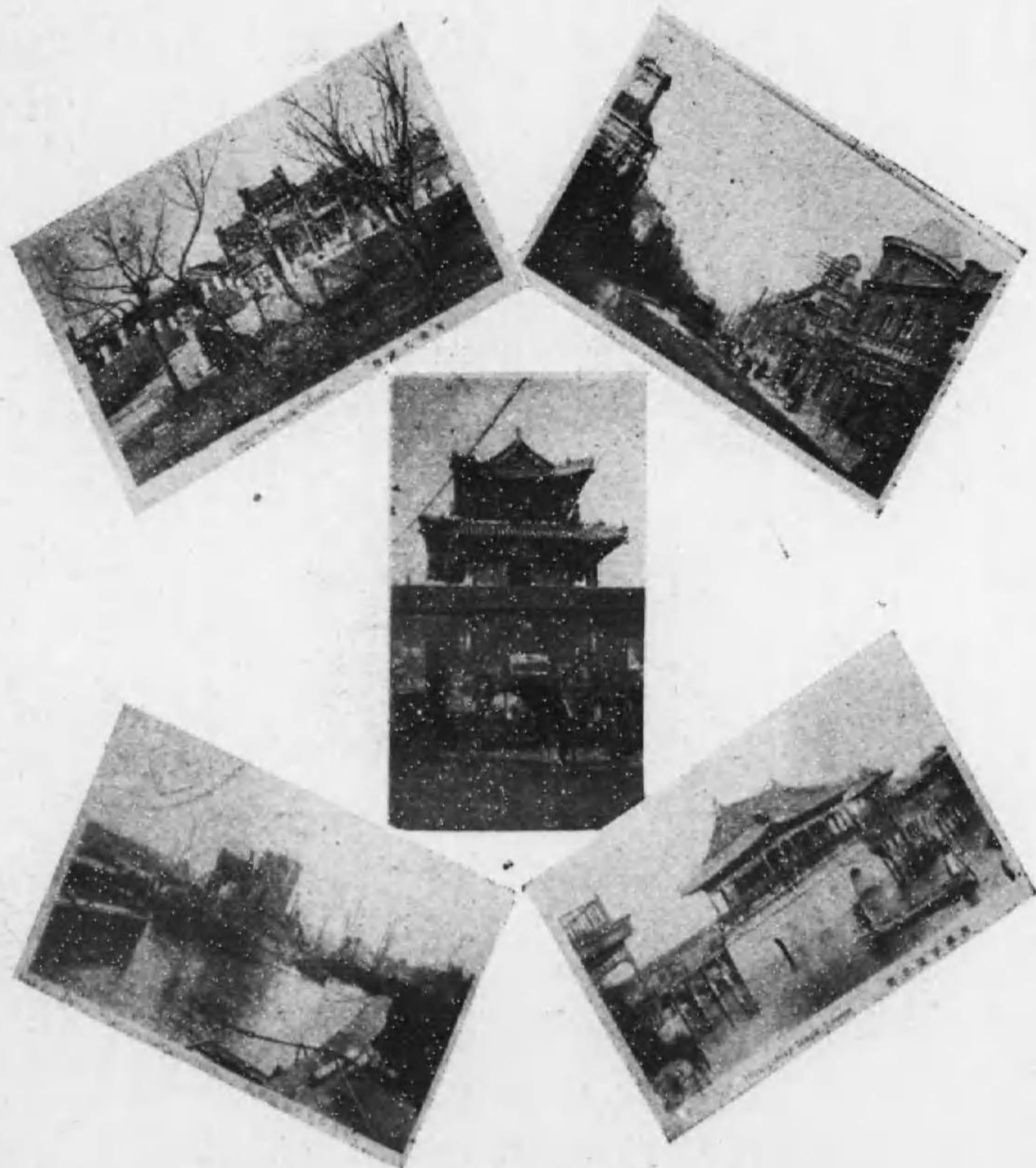
校學大陵金京南 段 上
 譯通と者著と閣極北 全 廟子孔京南 りよ右段中
 廟子夫京南 段 下



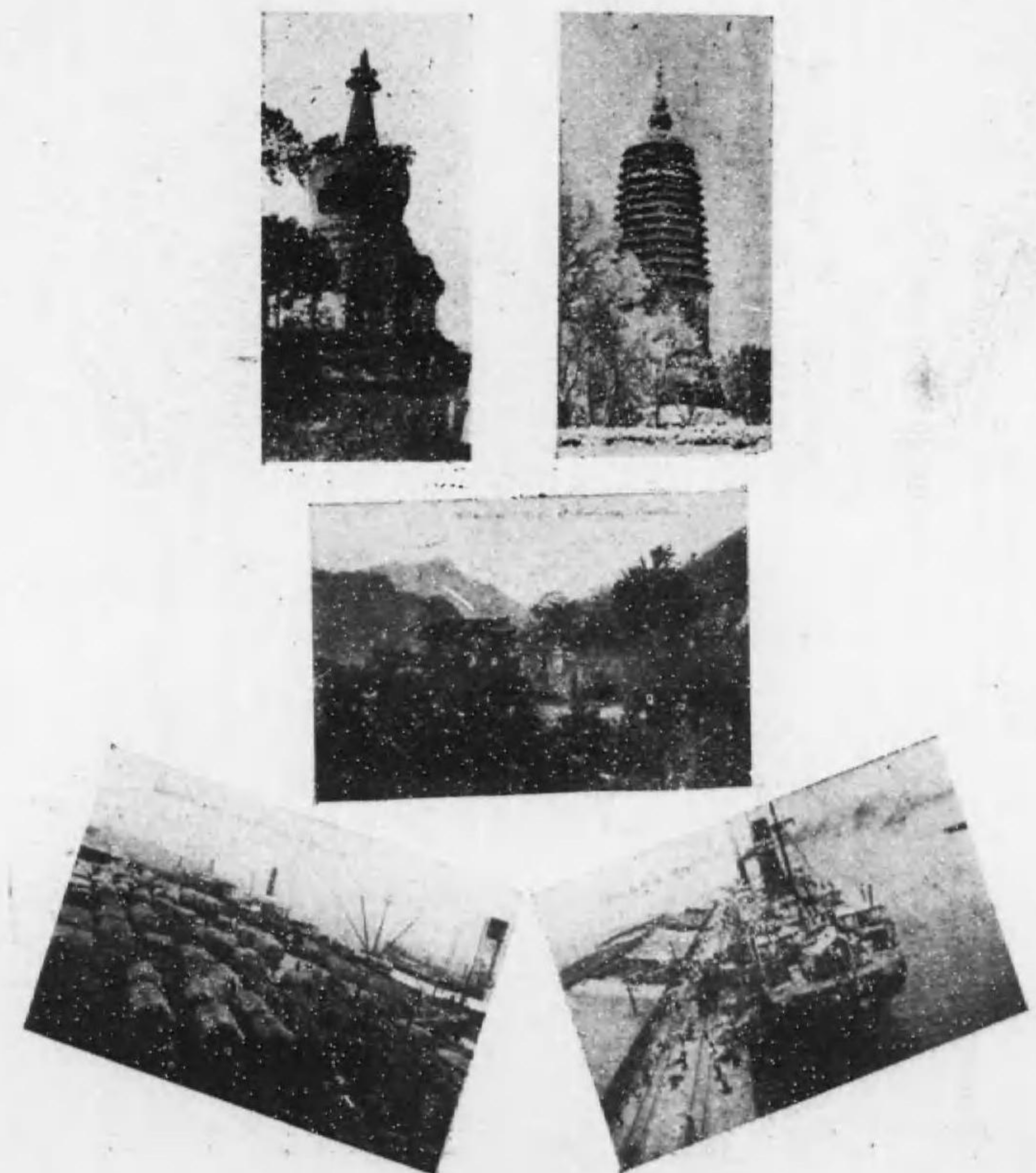
樓角の城宮京北 物造石理大前門安天 樓鼓京北 りよ右段上
 殿和太城宮京北 段中
 近附閣香佛全 湖明昆及上頂閣香佛山壽萬 りよ右段下



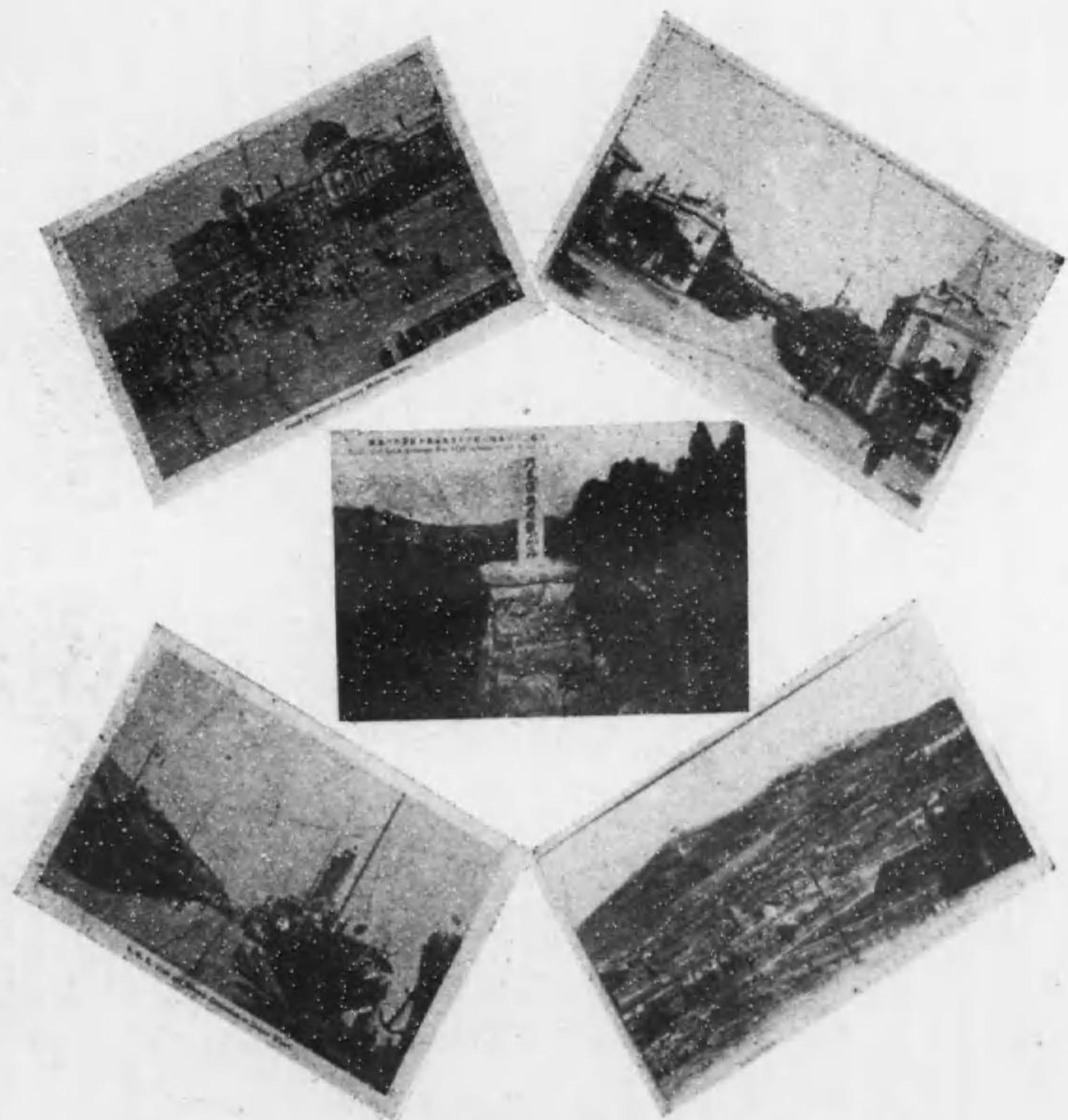
櫻の橋順旅島青上
 場浴水海全下



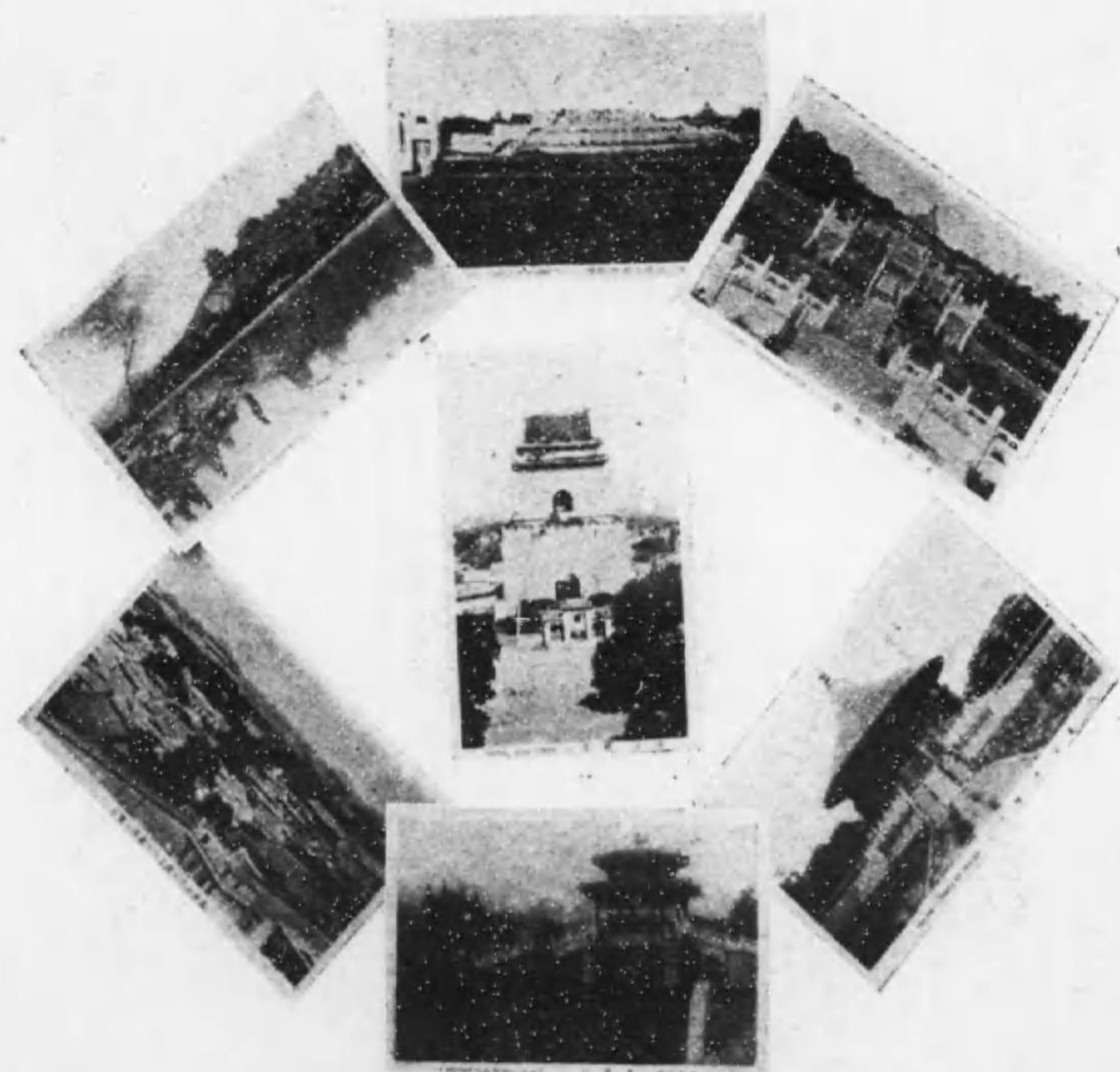
廟子孔津天 通旭界租本日津天 りよ右段上
 樓鼓津天 段中
 頭埠河白界租佛津天 廟章鴻李津天 りよ右段下



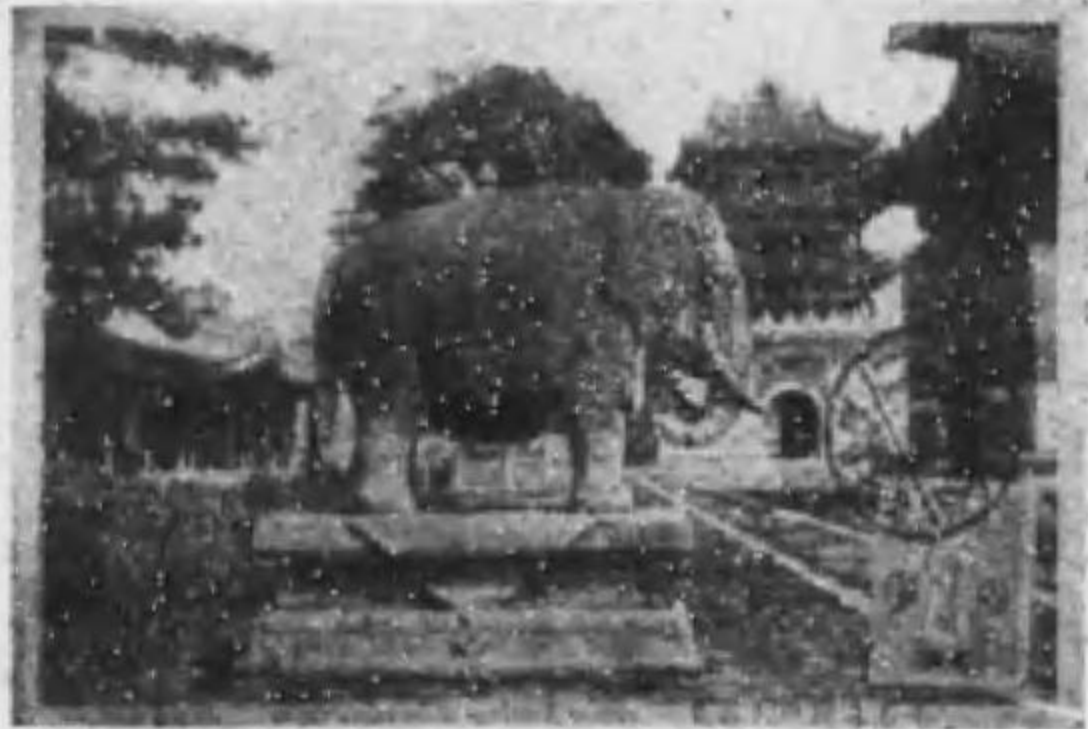
塔嘛喇の外門東天奉 塔白の陽遠 りよ右段上
 院寺山千 段中
 場止波連大 りよ右段下



場車停道鐵滿南 り通町江鯖及行銀鮮朝順旅 りよ右段上
 標墓の死戰尉少木乃るけ於に地高三〇二 段中
 頭埠及橋棧連大 景む望を山玉白りよ街市舊順旅 りよ右段下



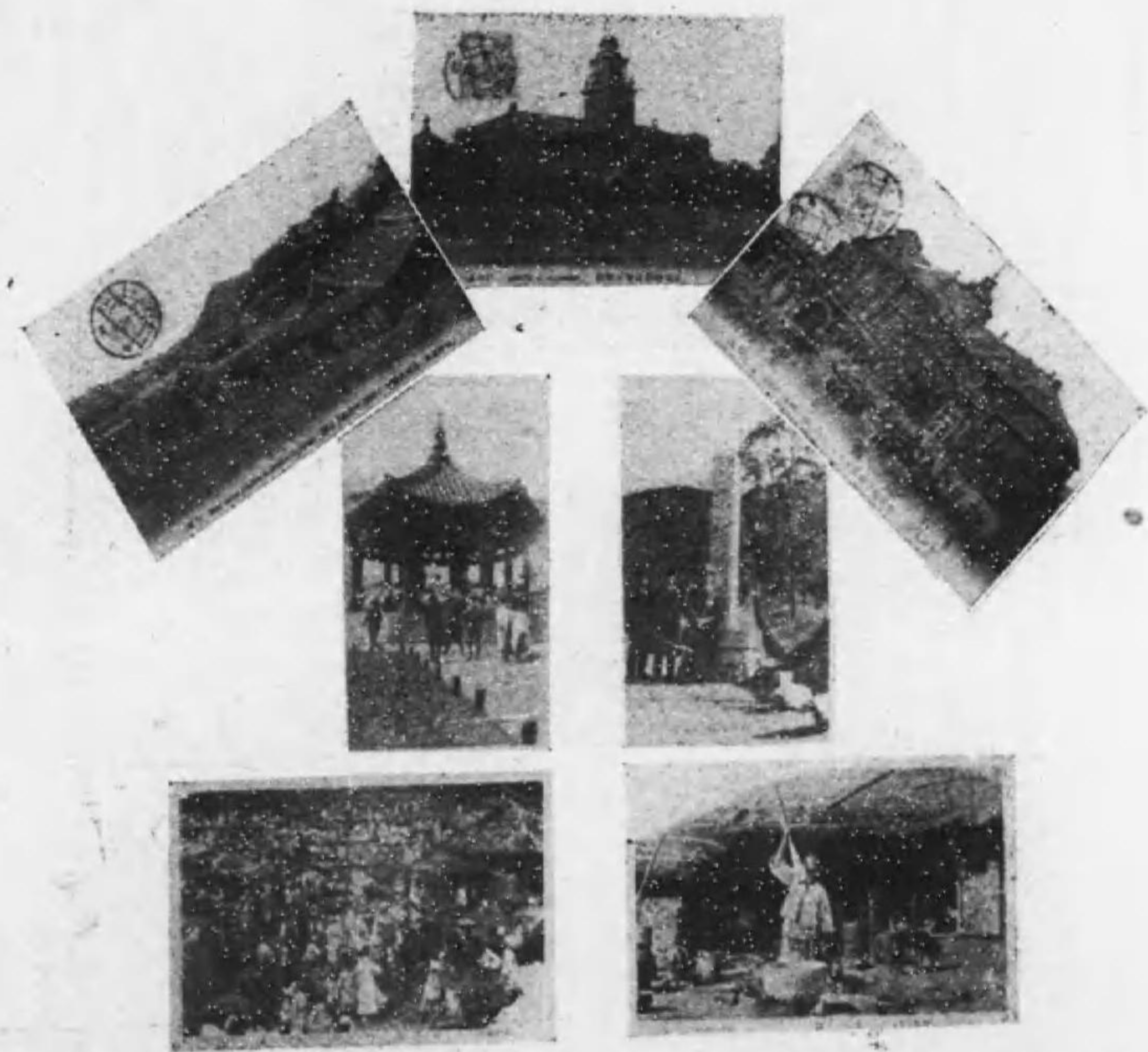
山壽萬京北 臺拜の壇天 壇天京北 りよ右段上
 樓鐘京北 央中
 む望を城宮りよルテホ京北 山壽萬全 壇天京北 りよ右段下



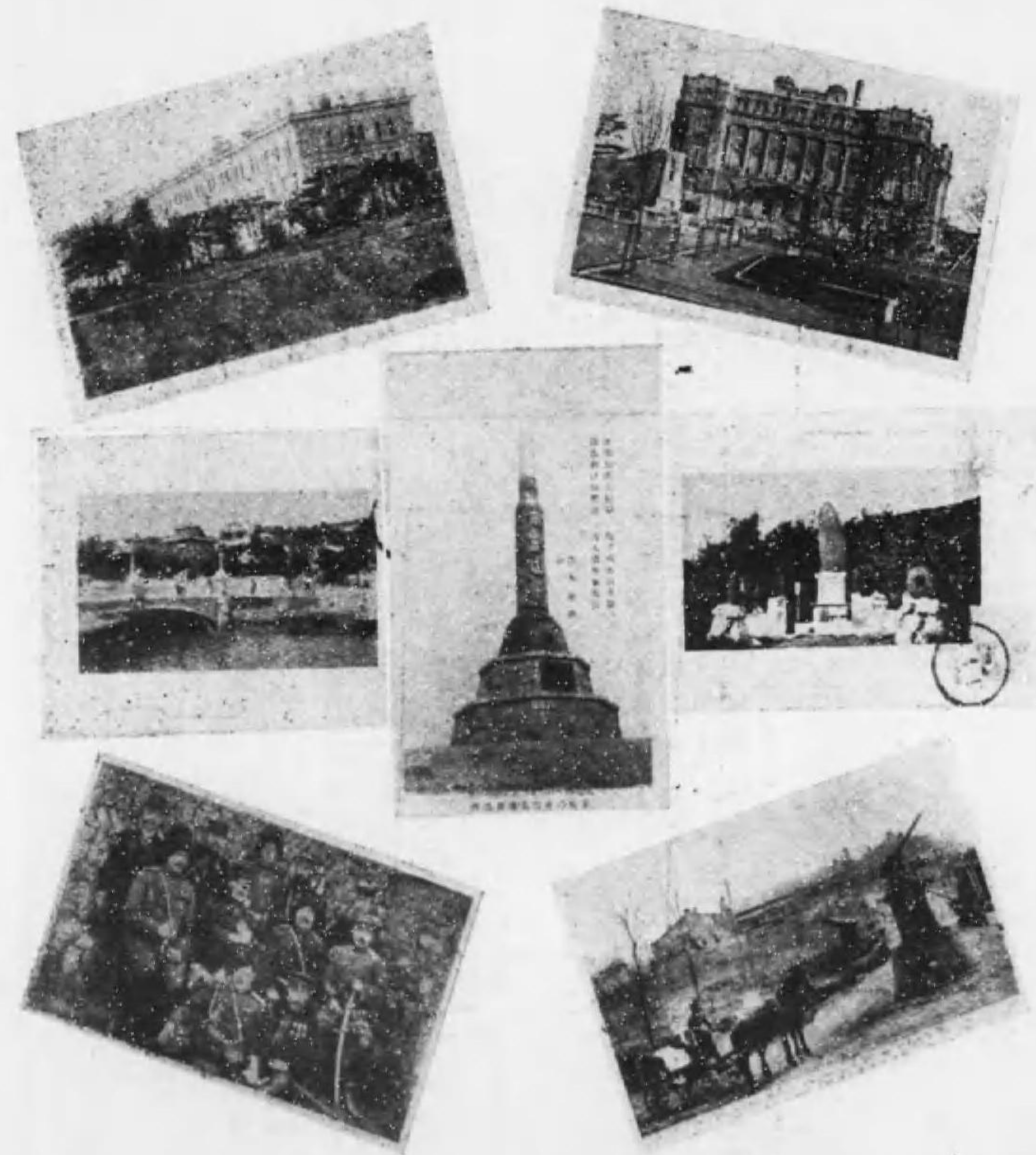
景全陵北天奉 段上
樓鼓天奉 馬石全 豹石の陵北天奉 りよ右段中
象石陵北天奉 段下



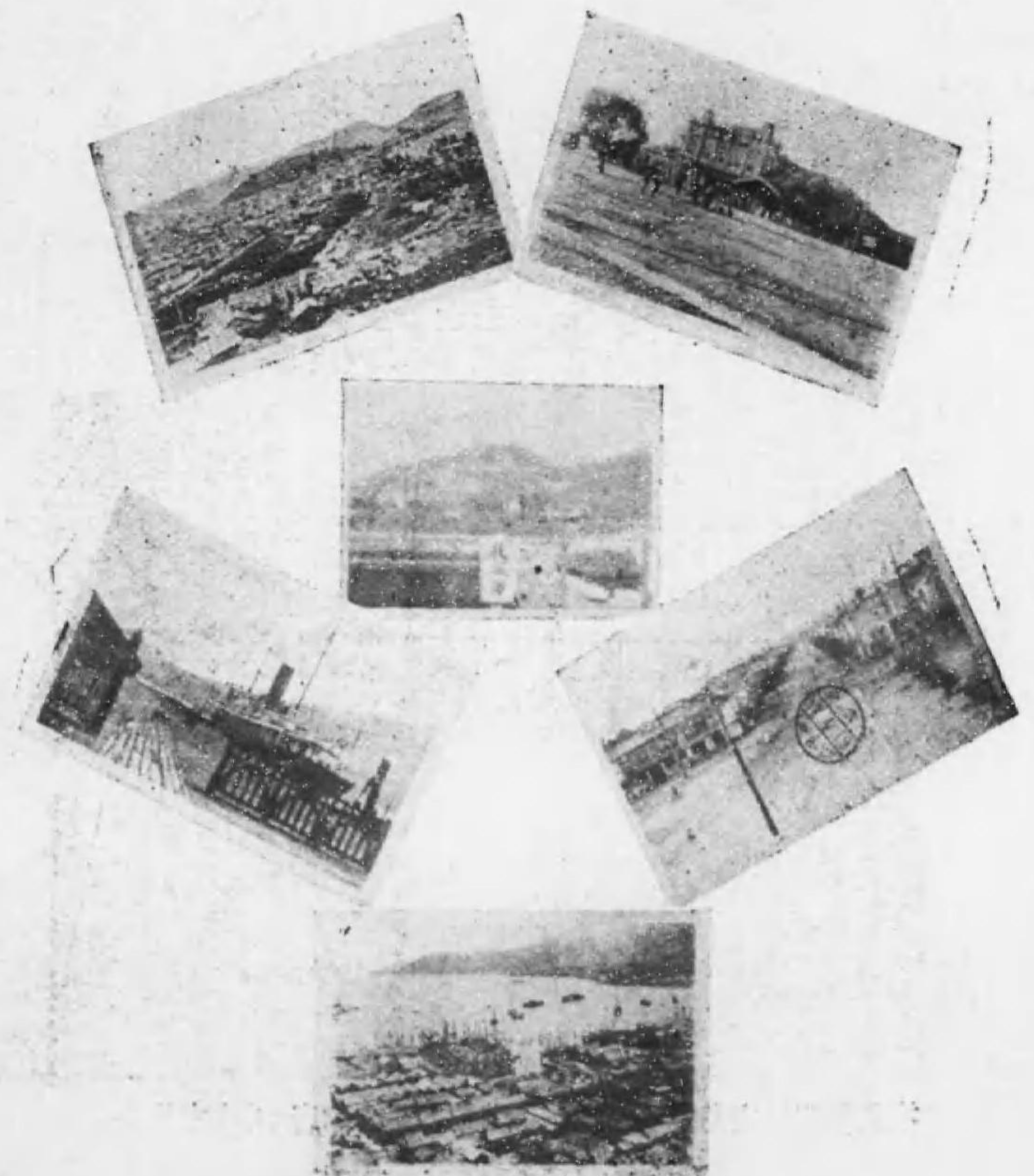
族家の官大舊鮮朝 段上
子親及嫁花の鮮朝 りよ右段中
事食の供子ご所臺 刑 苔 りよ右段下



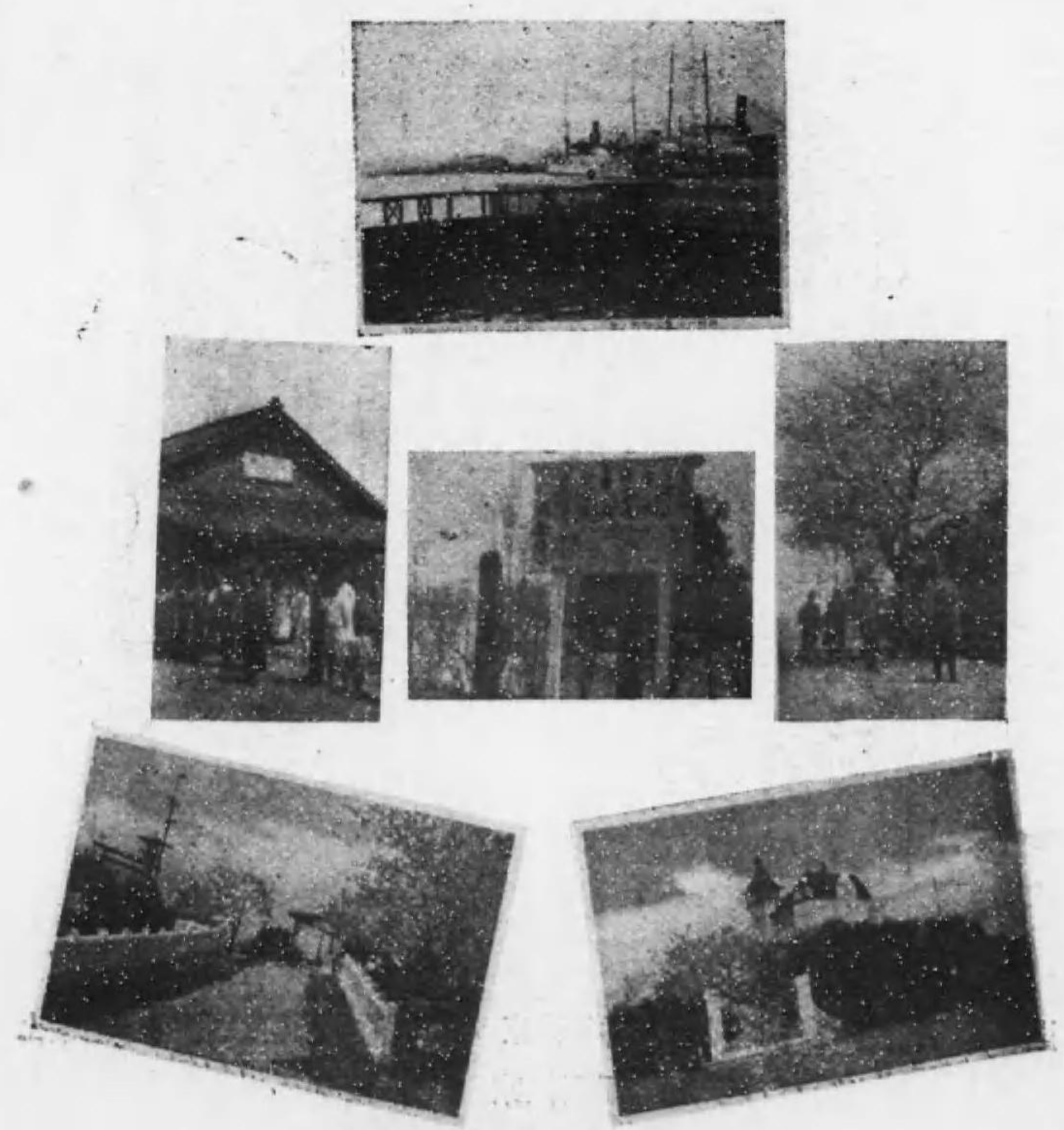
殿政仁宮德昌城京院醫府督總鮮朝城京 ルテホ道鐵鮮朝城京 リよ右段上
 城京社神城京リよ右段中
 店露全搗米の鮮朝リよ右段下



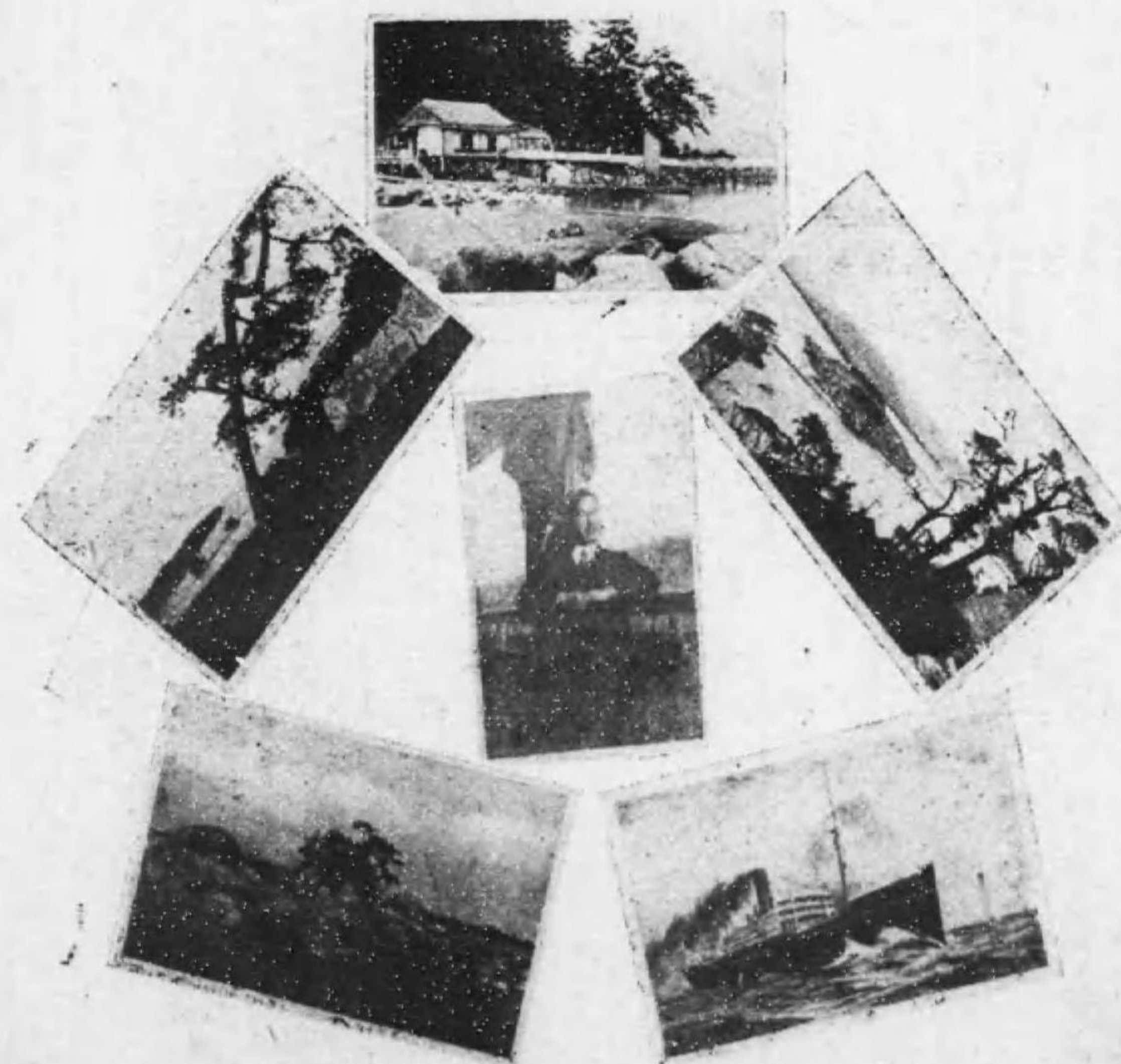
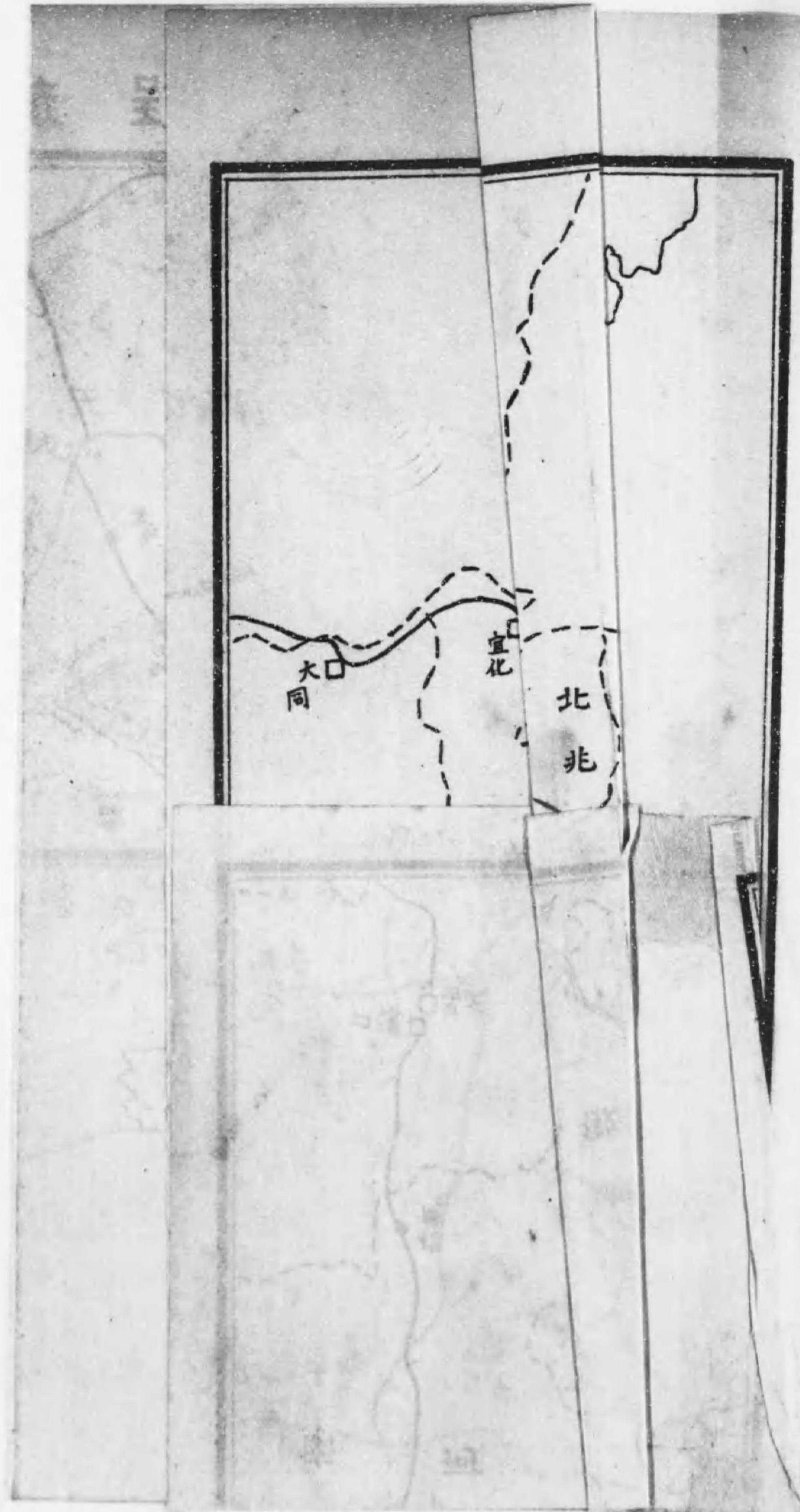
堂學科工順旅 ルテホ和大連大 リよ右段上
 橋洋東順旅 碑識標地高三百二順旅 碑念紀隊塞閉口港順旅 リよ右段中
 軍將木乃るけ於に營師水 場列陳念紀品利戰塞要順旅 リよ右段下
 (其さ目番二りよ左列中)
 軍將ルセツテスは次



景全面方部西山釜 場車停邸大 りよ右段上
 驛歡成鮮朝 段二
 丸羅新及橋棧一第山釜 り通前驛邸大 りよ右段三
 景全港山釜 段四

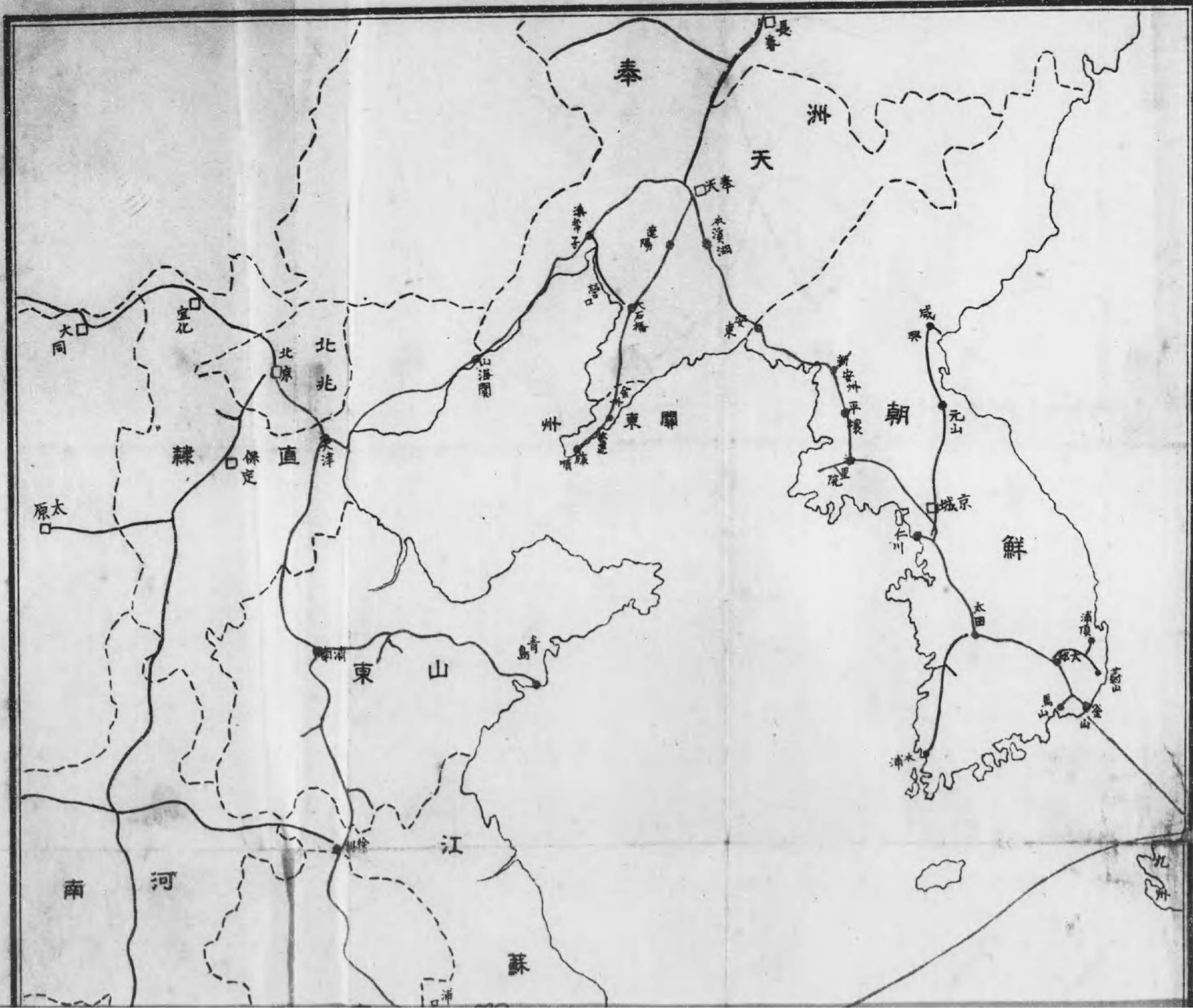


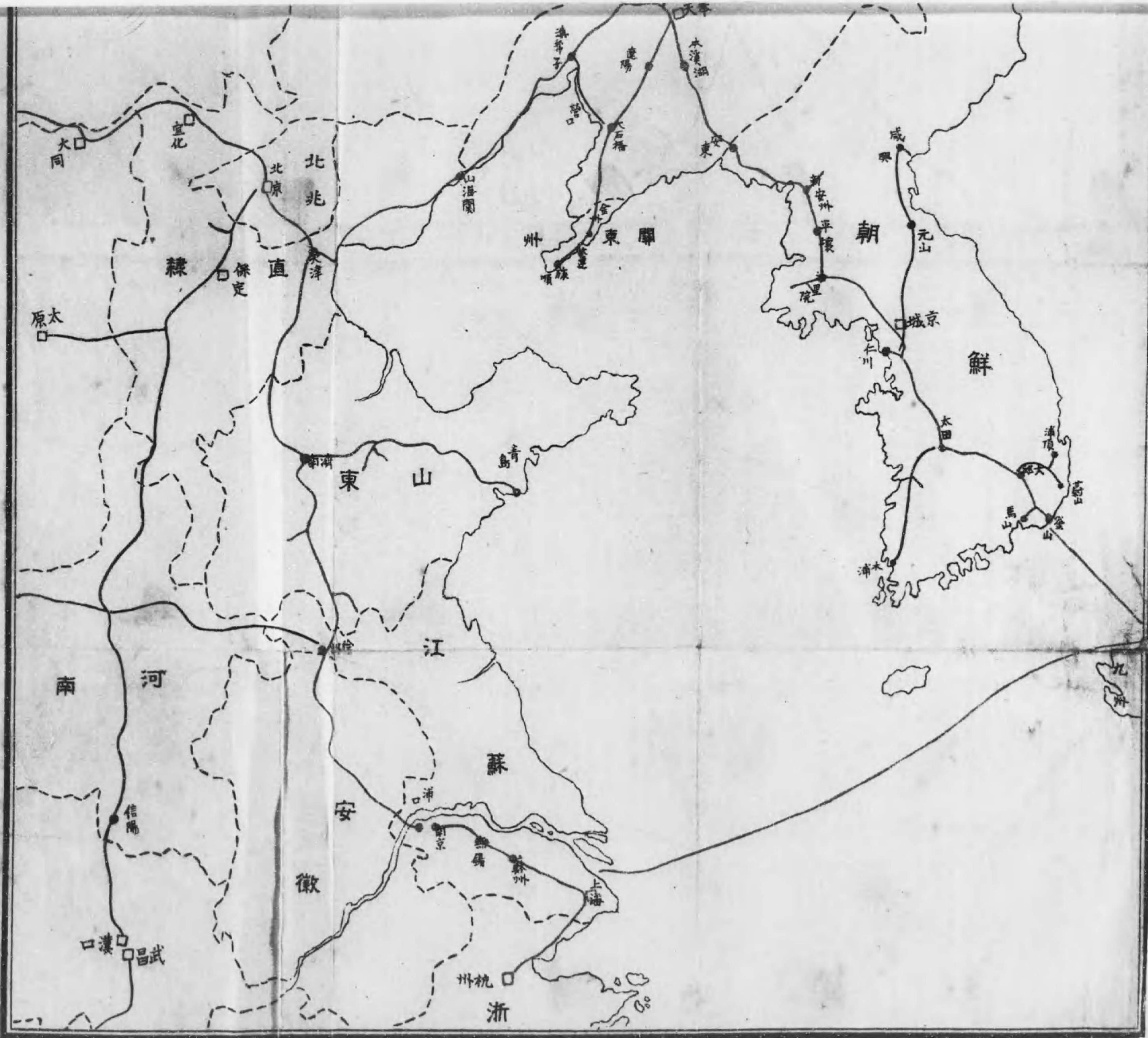
門開港築川仁 段上
 全 驛歡成 氏本山てに驛歡成 りよ右段中
 櫻の園公東全 櫻の園公西川仁 りよ右段下



場魚養閣洋玄島 む眺を島満りよ圃公津唐 りよ右段上
 む望を海玄りよ城屋護名
 者 著 段 中
 岩浦松津唐 丸茂賀 段 下

圖畧程旅





支那漫遊記 目次

| | |
|--|----|
| はしがき | 一 |
| 旅行目的。旅行心得。日支周遊券。著述の目的 | |
| 出發 | 四 |
| 賀茂丸。船室の完備。送別の悲調。食堂の雜觀 | |
| 瀬戸内海 | 七 |
| 内海の景。關門碇船 | |
| 航海 | 九 |
| 門司解覽。玄海灘。故郷の山。慈父母。無線電信。甲板上。支那海。洋中の 默禱。西洋美人の散歩。船風呂 | |
| 上海 | 一五 |
| 楊子江。對岸の異彩。上陸。知人。稅關。第一印象。豐陽旅館。日貨排斥。 | |



工業勃興。大阪商人の覺悟。支那語。上海の沿革。英國の利權。市街。行政銅像。共同公園。佛租界。城内。他都市との交通。市内交通。關稅。香料概念。兩替。通貨。爲替相場。石鹼工場。支那製品。日貨排斥。工業勃興。語學。上海料理

蘇洲及無錫

支那汽車。沿道の景。停車場。日本租界。驢馬。沿革位置。城市。玄妙院。北寺塔。虎丘。文珠重國。驢馬の嘶。寒山寺。中西旅館。惡俾夫。落馬。景山。無錫人形。無錫料理。俾賃

上海

洋服屋。田中大將の爆彈騷。小林洋行。名古屋觀光團

杭州

滬杭鐵道。沿道の景。位置沿革。城市。西湖。西湖十景。瀟湘八景。西湖觀光。斷橋の情話。古跡。善男女。神社佛閣。西湖名物。支那宿。便所。晚餐

會。惡俾夫。土產物

南京及津浦線

南京。輸出入品。城市。名所。明孝陵。明故宮。血碑亭。北極閣。鐘山。玄武湖。獅子山。孔子廟。濶紡。浦口。津浦線。沿道の景。支那墓。徐州城。袁州府。魯城。曲阜。泰山

山東線

濟南車站。金水旅館。山東鐵道。沿線の風光。坊子炭坑。淄川炭坑。金嶺鎮。鐵山。周村。氣候の激變。南京虫

青島

青島の美觀。沿革。萬年山。忠の海。海水浴場。旭山。若鶴山。青島神社。公園。嶗山。建築。病院。學校。支那政變。港灣。輸出入品。物價の低廉

津浦線

濟南。輸出入品。名所。黃河。白河。天津停車場。常盤ホテル

天津……………四

沿革。地勢。市街。商業。工業。輸出入品。天津料理

北京……………九

第一印象。名所。大液池。萬壽山。榮枯盛衰。孔子廟。四聖十哲。國子監。十三經。鼓樓。鐘樓。雍和宮。陰陽佛。扶桑館。飯店。北京城。城門。內城。中城。紫禁城。外城。城門。商工業。交通機關。鐵道。運河。陸路。娛樂機關。市場。宮城。武英殿。文華殿。重寶御物。三大名所。天壇。北京五壇。奉直戰爭

天津……………二〇

支那製品。名所。李公祠。工業展覽會。支那風俗。支那美人。纏足。外國租界。紫竹林バンド。銀行。官銀號。爐房。滙票莊。錢舖。當舖。通貨

京奉線……………二三

通州支線。京漢線。京綏線。滬寧線。開平炭。灤洲。昌黎。山海關。萬里長

奉天……………二五

城。守備兵。沿線。日本料理
沿革。留京。張作霖。市街。うざんや。城内市街。胡同。商工業。宮殿。東陵。北陵。奉天大會戰場。忠魂碑

大連……………二五

遼東ホテル。日本旅館。沿革。市街。社寺教會。住宅地。支那人町。埠頭。輸出入品。海運交通。南滿洲鐵道會社。大和ホテル。支那芝居。茶吞人種。酒の毒。禁酒論

旅順……………二六

名古屋觀光團。夏家河子。營城子。龍頭。姜家屯。戰跡。二〇三高地。松樹山。二龍山。望台。東鷄冠山。白玉山。旅順港口。廣瀨中佐。乃木將軍。旅順市街。星が浦

大連奉天間……………二七

臭水子。狼煙臺。大房身。金洲。南山。大赫山。三崎山。普蘭店。田家。瓦房店。王家。熊岳城。咸家梨園。望兒山。蘆家屯。沙崗。蓋平。太平山。大石橋。娘々廟。分水。他山。海城。南臺。湯崗子。千山。鞍山店。鞍山。立山。馬伊屯。遼陽。張臺子。煙臺。沙河。蘇家屯。渾河

安奉線

一八〇

撫順炭礦。渾河。吳家屯。陳相屯。姚千戶屯。石橋子。萬寶山。本溪湖。清河城。龍洞。宮の原。福金。橋頭。南坂。下馬塘。連山。釣魚臺。摩天嶺。祁家堡。草家口。通臺堡。劉家河。秋木莊。鷄冠山。鳳凰城。高麗門。湯山城。長柵。五龍背。蛤蟆塘。沙河鎮。安東。鴨綠江。稅關

京義線

一九二

新義洲。義洲。宣洲。龜城金礦。定洲。新安洲。价川鐵山。雲山金礦。平壤牡丹臺。玄武門。七星門。黃洲。遂安金礦。開城。高麗太祖。龍山。南大門

京城

二〇〇

地勢。市街。朝市。朝鮮鐵道。諸官衙。學校。銀行會社。名勝。昌德宮。博物館。動物園。植物園。景福宮。總督府廳。南山公園。バゴタ公園。鐘樓

仁川

二一〇

永登浦。港灣。寺院教會。仁川公園。江華島。月尾島。花嫁花婚

京釜線

二二六

龍山。水原。名勝。成歡。稷山。天安。烏致院。清洲。大田。秋風嶺。金泉直指寺。海印寺。倭館。大邱。慶山。三浪津。釜山。蔚山。名護屋家祖。日韓併合。大邱。達弗城址。半月城

東萊溫泉及釜山

二二七

入湯。辨天山

歸着

二三〇

旅程哩數。旅行費用。旅行大觀

はしがき

支那漫遊は年來の希望であつたが家庭の事情や營業の都合で容易に時を得ずして思立つ
ことが出来なかつたが近來營に見物漫遊の外に商賣の要事が可なり重つて一度出掛ける必
要が迫つて來たので愈萬障を排して斷行することにした。

支那の旅行には別に旅行免狀などを要しないから内地旅行に餘り變らない、旅裝もても
簡單なものでトランク一つで澤山だが商品見本を持つて行くので荷物が馬鹿に殖へて同行
店員の荷物と合せてトランクや手提拾個にもなつた。こんな荷物を手廻品として始終携帯
して支那内地を走り廻ることは随分氣骨の折れることと思ふが仕方がない、少し減らし掛
けて見たがみな必要なものばかりだ。

旅行目的

旅行の目的は何かと聞かれるに漫遊視察販路擴張等と大そうに言はれるが官吏や公人の
旅行と違ひ商人のこゝだ此邊は極めてボンヤリで自由だ。自分の費用で勝手に走り回つて
來ればよいのだから香氣は香氣ともいへるが所謂お役目でない代りに何かに油斷は出來な
いわけで時日と經費の費し甲斐ある旅行を果たす爲には夫丈けの覺悟も心備へも必要だ。

旅行心得

出發前に旅行心得として自分のノートの第一頁に書き止めたことは次の通りである。

二

- 一、毎朝神に祈るべし、
 - 二、健康に注意すべし、
 - 三、商賣第一見物後廻し、
 - 四、目を鋭くして物を見よ、
 - 五、常にポケットに注意すべし、
 - 六、如何なる人にも丁寧なるべし、
 - 七、隙さへあれば手紙を書くべし、
- まだ三ヶ條程あるが之れは省いておこう。
- 支那を旅行するには日支周遊券を買ふのが便利である、之は日支観光客の便利の爲に特別な割引賃金で日本(朝鮮)滿洲支那間海陸の兩經路を接続した環狀周遊經路に對して發賣されて居る之に二種あるが大要次の通りである
- 第一旅程 日本出發地—上海—南京—浦口—濟南—天津—北京—天津—奉天—安東—釜山—出發地

日支周遊券

又はこの反對の順路を經る旅程

第二旅程 出發地—上海—漢口—北京—天津—奉天—安東—釜山—出發地

又はこの反對の順路を經る旅程

日本出發地から上海迄は日本郵船で上海漢口間は日清汽船で聯絡をこつてある賃金は汽車汽船一等で第一旅程が神戸から貳百拾五圓程第二旅程が貳百七拾圓程である之に重要な支線には二割引の割引券が添へてある例へば上海杭州間、北京張家口間、奉天大連間、永登浦仁川間の如きである。

而し急行券や寢臺券は別に支拂を要する譯だか之にて日本より高くはない。

自分は此第一旅程の周遊券を買つた、店員二人で四百三拾圓、四千哩近くの一等賃金としては安いものだ。

神戸から歐洲航路の賀茂丸に乗ることにした、郵船會社に同窓の友人湯川君や吉川君が居たので船室なごも出發前日に取れて都合がよかつた。

著述の目的

此度の旅行到る處に友人が居て何か世話になつたがこれがその始まり第一番だ。

赤毛布けつぎの分際で視察談でもあるまいからせめて彌次喜太的の滑稽談でもこは思ふが夫に

三

しては顔だけ揃つて人を笑はず藝當もなければ筆も走らぬからこれもダメ、只初めて支那朝鮮を旅行して何やら自分で行き甲斐があり面白く感じたので後日の記念に日記を辿りて書き連ねて見た、或は讀む價值もなからふ又人の日記を讀んで呉れる閑人もあるまいが只支那に初めて旅行する人の幾分の参考になり又終まで讀んで見てア、自分も一度支那に行つて見たいナミ思ふ人があつたらそれで著者の満足は充たされ勞は犒はれるのである。

三月十六日 出 發

賀茂丸

船室の完備

今日午前十一時神戸出帆の賀茂丸に搭すべく芦屋の宅にサヨナラを言つて出立知人店員家族一同に船まで見送られた、船は八千噸の歐洲航路船既に煙を吐いて突堤に横付けして居る、大勢の見送人で船は人に満ちて雜間の最中だ、漸く船室に行つて見るに既に名前を表記して掃除もチャント行届いて居る、バースが上下貳臺あつて反對の窓側にソーファアが設けてある、洋式小箆筒もあれば洗面器も備付けてある、餘り廣くもない室を極めて便利に使つてある、大小拾個のトランクは棚の上やベッドの下に納まつてキッチン片付いて仕舞ふ、圓窓をのぞく甲板の手摺越しに海景色が見へる航海四五日間の我がホーム氣に入つた。

船は賀茂丸バースは一、等

立海支那海なんのその

送別
調の

暫くするミドラ鐘が響き渡る、之を合圖に見送人は船を下りる、大勢の人が船側一パイに列んで名残りを惜しむ、船は錨を上げて岸を離れる。
サヨナラ、ゴ機嫌ヨ、萬歳、連呼の聲は一種の悲調を帯ぶる、テトプの連條風に飈り離るるに伴れて切れる一層の哀調をそそる、聲を發せずテトプを手にせぬ美しき人達のハンカチが一際目立つソット目を拭いて居る婦人目を赤くして居る老母もある、送らる人もハツミ眼鏡をイチツテ居る。

旅客の多くが萬里の旅程を彼方に早くて半年、永くて三年も別れるのだそれも道理だ、平氣に構へこんで居た自分も此光景を見て變な氣分に閉された、テレカクシにコダツクを出して一寸失敬……ピントも光線もあるものか、暫くでも別れる事はよくないものだ。

船は煙を残して西に向ふ六甲の連峯も雲煙の中に消へ、須磨明石の絶景を後に播磨灘に入る頃は食堂の人になつた。

食堂
觀の

西洋人が十人ばかり日本人が二三十名一緒に食卓に就く、無論食卓はイクツにも別れて

あつて豫め事務員の手で名札を附けて話の合ひ相な人を配り合せてあるが大勢の事だから時には見損ひがある、餘り洋食に馴れない人が西洋人三食卓を囲んでマゴツカせられるのは可愛想だらう。

店員山本幸か不幸か西洋婦人のの側に置かれて閉口、折角の料理が充分咽に通らなかつたそふだ。

目に横文字なき隣席のオ客ボーイの差出すメヌが讀めぬ、無言で突きつけられた腹イセでもあるまいが無言で何か命じてゴザル、ボーイ要領を得ずして退却せぬ、向側の客の食へてる皿を目配せして、顔をシヤクつてアレ／＼はなか／＼苦しかつた、「ワシは英語はワカラヌ見計つて持つて来てくれ」こうやれば却て男らしいイヤ老人らしい。

食卓の善美事務員ボーイの斡旋申分はないが内容のわからぬメヌを突き出されるのは一寸困る。

佛語や英語が讀めても皿の内容を知らない人が多いのだから……馴れ切つた西洋人を標準にしてある食堂だから氣の張るのは當り前……而し西洋に行く人ばかりこもいへるから修業の積りで辛棒すれば腹も立つまい。

内海の景

瀬戸内海の風光を見るべく甲板に出て見たが雨模様之處へ風まで加つて来たから充分に展望が出来ない無論寫真も撮れない、而し——雨もよし日和にもよし瀬戸の海——でなかなか景色はよろしい名も知らぬ山や島を兩舷に見へて船は悠々西に走る、地圖を擴げて見ても悉しくわからぬ、船員に一十尋ねても島の名さへ知らない、船客ミ違つて船員は景色に見惚れてる隙もあるまい、地球の半分を航海して變つた風物に接するものには内海の小さい景色なご目に入らないのかも知れぬ、食卓を共にした人達ミ懸念になつてあつちでもこつちでも愉快に話が出来る、陸上ミちがつて船の上では所謂一蓮托生直に心安くなつて學者も商人も九州人も東北人もあつたものぢやない。

夜の食堂は賑かであつた一馳走も澤山あつた、風呂で温まつて早くベッドに入つた、旅行第一日は安らかに暮れた。

三月十七日 瀬戸内海

朝六時目を醒ますミ船は三田尻沖を通つて居る、日は東の山から昇つて旭光燦爛、周防灘の曉風颯々、海の朝景色は又格別である、身支度を済まして甲板に上つて兩舷の風光を観る、早朝の瀬戸に入り壇の浦を通る頃は船客皆甲板に出て對岸の風光を賞する、海の色

關門碇泊

八

山の景なか／＼よろしい、此邊は要塞地帯で寫眞を撮る事が出来ない。

食堂開けて朝飯を済ました時分には船は門司港に着し百船輻輳の中に錨を卸した。

電報數通繪葉書拾枚發信した之れが旅行の第一信だ、門司出帆は明日正午だからそれ迄大分時間がある、碇泊中に門司ミ小倉ミ若松に知人を訪ねべく九時上陸した、先づ三井物産に前田君ミ武島君に面談して汽車で小倉に行つた、親戚を訪問して晝食を済まし電車で若松に向つた、此邊は北九州の工業中心地で殷賑十年前ミは面目を異にして居る、戸畑から渡船で若松に渡り兒島君の宅を訪れた、久振に兒島君の兩親に會ふて昔話をした、兒島君は今瓜哇に居るのだから親元からの言傳でもあれば届けてやりたい老婆心から態々若松を訪れた譯だ、こゝいふミ自分が瓜哇に行く様に當るがそふでない、瓜哇領事館に赴任する水田信利氏ミ同船して懇意になつて同氏に之を托するのである新舊交友を紹介して相互の利便に資する爲である、兩親も喜ばれた、水田氏も未知の地で好個の知人を得る事をこよなく喜ばれた兒島君も定めし異郷の地に新知已を得て喜ぶだらふ。

同窓木安信君の時計舗を訪れ久し振りに同君ミ面會した、歸りに戸畑に明治紡績會社に立寄つて月形周君を訪ねた、快談數刻辭して電車によりて門司に出て前田君ミ一料亭に晩

食を共にした、十時頃會社のランチで船迄送つて貰つて有難かつた、船室に歸るミ山本も戻つて居た、門司ミ下關の名所を見物し一二知己を訪れて一日を暮したそふだ、各船室は皆靜かなもの人の氣配もない早くベッドに入つたものもあらふが大抵上陸して一夜を町で明かすのが多い様だ、それに引かへ船腹では夜業で石炭の積込や貨物の荷役で忙しいクレインの音や仲仕の聲が遅くまでやかましい、而し疲れて居るので直に眠に就いた。

三月十八日 航海

天氣快晴今日は上海に向つて出發だ玄海や支那海を乗り切るミ思ふミ氣も勇む、早く起きて身支度を整へ朝飯もオヒシク食べた、繪葉書十數枚認めて方々の知人に支那旅行を通知した。

出船前に陸から雜誌小説其他種々なるものを賣りに来る、發賣を止めてあるものまで賣つて居る、船の上であるのミ航海者の無聊に附け込むのだらふ、正午を過ぐる二十分船は錨を上げて動き出した、此處から乗る客も大分ある、見送人はランチ三四艘に満ちて居る、其内の一艘は船ミ共に沖合まで並行してついて来る、英國式の西洋人の見送の爲めである旗をふり帽子を挙げ萬歳を叫んでゐる。送らるゝ人は感激に満ちて之に應じて居る、神戸

門司解纜

九

でも此通りであつたが送らるる人は如何なる人か知らん大會社の重役か有名な音楽家か但しは學校の教師か、一寸判断がつかなんだ。

玄海灘

宮本武藏の敵討で有名な巖柳島や蒙古王佐々木野次將軍が嘯いて居た六連島も知らぬ間に後になつて九州の山や長州の岬が霞の中に薄れ行き船は玄海の浪を蹴つて進行する、對馬海峡に近づく頃遙に南西に當つて見覺へのある大小の山や島が望まれる、之れは肥前松浦郡の陸地で近く横はる大島は壹岐であらふ、三百餘年前豊太閤が征韓の役を發したのは朝鮮に最も近き此地點、松浦半島の一角名護屋灣である、此處はわが搖籃の地であつて少時古城に登りて玄海や朝鮮水道を眺めて當時の雄圖を偲んだのである、今は八十歳近き父母の老を養ひ居ます所太閤の本營跡山里丸がそれである、海渡幾十里の彼方に其陸地を望んで言ひ知れぬ懐かし味を感じた、今日の船出を知ります母は父を誘ふて高い古城址に老の身を運んで玄海を通る船を眺めてアレカコレカと噂して無事を祈つて居らるるだらふ、雲烟遠き海の彼方何の合圖も出来ないわ、神よ父と母とを安らかに守り給へ。

慈父母

船客中に青年紳士がある之れは小川良之輔氏で舊師安場先生の義弟である、此度無線電信事情調査の爲に其筋の命で歐洲に出張さるるのである神戸で先生に紹介を受けてから心

故郷の山

無線電信

安くなた、船の最上層に設置してある無線電信局に局長と同居して居らるる、其處に同氏を訪ねて電信事情を説明して貰つた、序に東京と大阪と名護屋に電信を打つた料金一通八十錢だ、島影一つ見へない大海原で自由に通信が出来るのを見てソウ思つた、有難い世界ぢや。

甲板上

玄海の波靜かなりとは云へぬが船が大きいから殆んど微動なくて進行する、船暈なきは思ひも寄らず船客皆元氣で愉快そふだ、甲板上で輪投遊戯やデツキゴルフが始まる、ボーイに行り方を教つて皆試みて見る、下手が段々上手になる、子供の様に嬉々として無中になつて遊ぶ。

三十餘りの一夫人七ツの男の兒と四つの女の兒を伴れて時々甲板に出て見へる、話を聞けば倫敦に居らるる良人の許に行かるるそうだ子供二人伴れて女の身で六十幾日の航海は随分エライことだらふと同情する、而し行先に安着を待つて呉れてる人があるから一日一日の経つのが楽しみで割合に心丈夫に航海が出来るだらふ、人生の旅もその通り辛い事や苦しい事が重なつて来ても之れ暫しの航海、行先では龍宮の乙姫様か西方淨土で觀音様が慈悲の手を擴けて待つて居て下さると思ふと浮世の浪も左程荒くは當るまい、そふだ

板一枚下は地獄ミいふ諺の

おくにや龍宮の別世界

三月十九日 航海

支那の海

目を覺まして窓を覗くミ夜は明け離れて居る、能く眠れたので氣持がよいデッキに上つて見るミ渺茫たる大海原だ濟洲島の沖らしいが何處を見ても島影一つ見へない、玄海では同じ方向に走つて行く汽船が澤山あつたが此處では一隻も認めない。

波を乗り切る音ミエンヂンの音ミ和して一種の凄味ある氣分を漂はしながら船は全速力で走つて居る、食堂を開ける鐘がなる船に酔ふた人もなく皆元氣で揃つて食卓に就く、大分顔なじみミなつて初めの様に氣の張る事もなく愉快に談笑して食事が出来る、西洋人なご愉快けに食べて居る。

今日は日曜日である大阪に居れば今頃は百人ばかりの日曜學校の生徒の前に立つてる時分である。

洋中の
禱

奇麗な談話室の一隅で獨り聖書を読み靜かに祈りをなした、家族一同の安全や親戚知己の爲に次々に祈りを續けた、最後に自分の此度の長途旅行を無事済まして歸る事の出来る

様に切願を捧げた、大洋の真中で獨り靜かに祈禱をなす事は生涯度々ある機會経験ではあるまい。

午後は甲板でデツキボールや輪投遊戯がなかなか賑かだ、自分も加はつて見たなるほど面白くて時間のたつのもわからない、遊び事はなんでも面白いもの—金儲けはなんでも辛いのもの—さちらを取るかで人間の相場はさまる—商人はこう思つて居れば間違ひはあるまい、競技のチャンピオンは醫學士の福田得志氏に林敏郎氏京大助教授の小栗栖先生や松本的高等學校教授の横山氏等で皆子供になつて愉快に遊ぶ、英國や獨逸に留學さるる學者連中十人ばかりもある新嘉坡地方の椰子林やゴム事業の檢分に行かるとる實業家其他の商人、新聞記者がある皆打解けて話し合つて愉快なもの航海の無聊苦痛更になし。

夕暮になつて少し波が高くなつたけれども船は動搖する程でもないさすが大船ありがたい。

西洋美人
の散歩

晩食を済ましてから甲板に出て風に吹かれて散歩した、月なき闇の夜に八千噸の大船がエンヂンの音高く白浪を起こして大海原を乗切る様は一種雄壯の氣をそそるものだ、そこへ美しい西洋夫人が伴れの男ミ腕を組んで散歩を始めた、憂々ミ靴音高く歩調を揃へて大

跨に歩いて居る、薄ものに肉體美を包んで電光に照されて輕快にやつて飛ぶが如く跳るが如くダンスを見て居る様だ、西洋人は愉快に出來て居る人間と思ふた、食堂でも大きな顔して嬉々として甘そうに食べる甲板に出ては快活に散歩ダンスをやる、船室では自由にピアノを弾する、手紙書くにはタイプでバチバチ早いもの、日本人はそれを眺めて感心したり、眞似したり、近頃はやりのダンスなごがその通りキツスなごもそのくちだらふ、船客の中に母親に伴れられた和蘭に歸る子供がある、姉が十一弟が九歳だ姉が畫がうまいので何か一つ記念に書いて呉れよいつたらニコくして、かいたはよいが男の子が女の子のほべたにキツスしてる畫題——コン畜生ませた事をする——と言ひたくなつた、小さい時からキツスを好む大きくなつてやる筈だ、前に西洋人をほめたから一寸これだけクサしておく、ボーイが風呂を知らした、よく温まつて早く休んだ、風呂は洋式の瀬戸物、日本風呂の様にユックリ落ち着きは出來ないが人の入り滓でないから奇麗だ、それに大洋の海水こ來てるからヨク温まるには驚いた、之も西洋式か衛生的だらふ、支那人さへ日本の風呂は不潔極まるに笑ふて居る。

三月二十日 上 海

船風呂

楊子江

今日も好天氣風もなく浪も靜かだ而し海は一帶に濁水に化して居る、サアいよいよ上海が近くなつた、甲板に出るに見渡す限り黃褐色の海の面、之れが名に負ふ長江楊子江の川口！源を遠く西藏の高嶺に發して流域曲折實に三千餘里東洋第一の大河の名に背かない、濁海に入りても猶渺茫として島影さへ見へない、水天髣髴吳か越か、眞に雄大な眺望である、漸くにして陸地を認むるは寧波半島の突出岬である、島が見ゆる、汽船の來往繁くなる、妙な恰好をした支那ジャンクが帆走つて居る、本流の川口にある吳淞港を遠く右舷に見て船は支流の黃浦江を溯る、上海港はまだく、奥の方だ、楊子江を淀河にしたら上海は築港や川口所じやない三邦か吹田位に當るだらふ、大陸だけに本流では川口が廣過ぎる、支流の方に東洋一の貿易港が開かれてあるのだ、船が進行するに伴れて大小船舶の來往織るが如し、對岸の風物悉く日本に違ふ、家屋、樹木、人間、船、日本の夫は別世界の様だ、早速兩舷に展開し來る異彩をコダツクに納めた、門司から二晝夜位の航海でこんなに變るものかと思つた、聞けば今秋から郵船會社で五千五百噸の最新式快速船長崎丸上海丸の姉妹船を長崎上海間に配置して一晝夜で上海に行ける様にするそふだ、之れで上海行が餘程樂になる支那が近くなる、日支親善の爲長崎港繁榮の爲大に祝すべき事である、長崎

對岸の 異彩

支那近く なる

上陸

は我が第二の故郷！有難い！

さて上陸準備にて大した事はない、別注文の飲食物の勘定ボーイの心附税關に出す荷物の申告書の記入位のもので、船が郵船のワーフに横付けする甲板から眺むるに旅館の客引ボーター、出迎人が支那人日本人取り交ぜ澤山の人が船橋が架るのを待つて居る、宿は大阪から電報して定めてある筈だが名前がわからぬ、知人にも船名を確報してないから誰も来てない、失策つたと思ふて居たら群集の中に一婦人を見出した郷里出身の知合ひのものである、聞けば日本から船が入港する毎にワーフに出掛けて居たそふだ、異郷にありて知人を迎へるのは懐しいに相違ない、迎へらるゝ方は猶うれしい、小林洋行の堀口君が旅館の番頭を伴れて見へた、互に顔は知らぬが直ぐ尋ね當てられた、人相書が届いて居たかも知れぬ、荷物萬端處理して貰つて大に助かつた、知らぬ他國の旅の空で知人や友人のオ世話に實に難有いものだ。

税關

申告書に見本箱の價格を正直に記入した爲に税關で従價五歩を取られた、記入せずに置けばフリーであつたそふだ、相手が異人だ思ふ様に文句が言へない、上陸匆々六弗半程入らぬ金を取られた之れが赤タツトの始まり而し赤タツトなら先づ第一に上海の偉大か

第一印象

美觀かに面喰ふ所だが之れは又不思議、東洋一の大都市にもあるのに埠頭に上つた第一印象の悪いこと、薄黒い黄いろい顔の居留日本人、婦人の髪着物の様子ナツテない、支那人のボトタイや苦かの不潔、垢顔、着物はボロボロ乞食の様、砂塵の巻き上る中に豚か猫の鳴聲見た様な聲音で叫びながら、右往左往してゐる有様を見ては全く自分の期待が裏切られた。

正午過豊陽館に落ち着き水田氏や報知新聞記者熊田氏に中食を共にした、賀茂丸で香港やジャバに行かるる兩氏に此處で別れを告げた。

豊陽旅館

豊陽館は共同租界内で交通要衝な所に在つて第一流の日本人旅館である、宿の主人は九州人で女中達も大抵長崎や佐賀縣の人が多く、自分も山本も九州辯の丸出しで女中を笑はした、宿では女中に氣安くして置く事は旅行の秘訣だ、何かに便利や都合のよい事が多い。

日貨排斥

小林洋行に行つて小山氏に對面し商賣の方の手續に就て相談した、日貨排斥の餘波未だ靜まらず、支那商人は日本人に取引する事を嫌つて居る、商人自身では取引したくても排日屋や學生コロに強迫されたり亂暴されるのが怖ろしいから皆手を出さぬ、始めて支那に行つて商賣するのに此始末だから非常に時が悪い、困つたものだ、茲數年來日本からの商

工業勃興

一八

品殊に大阪の對支貿易が衰退して行きつゝあるは山々敷大事である、紡績工場、燐寸工場もドン／＼支那人自身で經營し其他の雜貨、化粧品、石鹼の如きも支那製のもので濟まし上物は舶來物を用ゆる有様、原料利便工賃は安し此調子で行けば早晚日本の低級工業は支那に移り行くことになるだらふ、聞けば日貨排斥の裏には米商なきの尻押があつて或る二の大會社か二百萬弗も投げ出したそふだ、日貨を退けて自家製品に代らす算段も見へる、妙な廣告費を使ふものだ、日本商人實業家の蒙る損害實に大なるもの、此事實を知るに大阪商人なきは眠つて居れぬ、洋行して西洋人の極道振を真似たりダンスの稽古に夜更したりしては居られまい、日本の物價の高いこゝ世界一、支那の物價の安いこゝ世界一かも知れぬ、隣同士で此通り之では近所交際も出来るまい、輸入超過、貿易不振當り前な話しだ。

大阪商人の覺悟

三月廿一日 上海

旅館の和洋折衷

昨夜は宿の廣い座敷にのんびり落ち着いて能く眠つた、日本人旅館だから内地の旅詣と變つたこゝにはない、朝風呂もある寢所も日本式食事も日本料理少しの不自由もない、只變つて居て良いと思つた事は、座敷が洋式ドアで隣座敷と絶縁され入口は完全にロックが出来るのだ、用心のよい事此上なし、モ一つは食事は客が皆酪々に食堂に入つて勝手に出來合の膳部(卓子)に就いて濟ますのである、膳部に優劣はなく只客室によつて宿料に等差がつけてある様だ、長い廊下や階段を膳部の持運びが省けるから女中の助かるこゝ夥しい衛生にも適つて居る、それもこれも洋式ホテルの長所を取つたものだ、而し山出しの女中一人に言葉のわからぬ支那人小僧が二人で給仕をして居るのは餘り愛想がなさすぎる、郷に入れば郷に従へ仕方がないロチラが支那語を真似せにやならぬ、シヨウロンゾー、シヨウロシゾー、何の事ぢや、小僧お茶!、ブオクシナハレより餘程増しかも知れぬ。今朝大阪から電報が來たので一寸胸がドキついたが商賣上の要件でヤレ安心すぐ返電を送つた、上海は洋服が安いといふので合服を誂へた、成程安い大阪で百圓もかゝるものが六十圓程だ、材料の安い上に工賃が安いからそれもその筈。

支那語

今日は商賣の要件で二三軒支那人を訪問した、残念ながら通辯なしには支那人と話しが出来ぬ、通辯では充分に要領を得兼ねるが仕方がない、北京官話で三四年も苦しんだがそれは十五年前の學生時代、使はぬ頭は役に立たぬ使はぬ語學はものにならぬ。取引上の事は悉しく記すに長くなり又必要もないと思ふから、之は省いて只一般見

聞や名所見物位に止めよう。

上海の町を大観すべく自動車で一順走り廻つた、市街より郊外に郊外より市街に般賑を極めた町やら奇麗な別荘住宅地や城内地帯の支那人街、黃浦江口の工場地帯三時間ばかり疾走した中に次々に目前に展開し来る風物習俗凡てが珍にして妙又奇にして變もいはれよう、赤ケツトには随分面白い見物であつた、之れでザツト上海のアウトラインが呑み込めた、少し其要點を記すこゝにしよう。

沿上海の

英國の

市街

上海は西歴千八百四十三年阿片戰爭の結果南京條約に基き廣東、厦門、福州及寧波に共に開港せられたのである、夫れ以來微々たる一小市が今日の繁榮を來し商業の旺盛出入船の多き事香港に次ぐ有様である、上海といひ香港といひ英國が其實力惡くいへば暴力でもつて或は大砲や機關銃で或はヘンリー・パークスやロバート・ハルトなどいふ世界の鼻づ柱の強い外交家の口先で、グン、グンと支那の胸をつ腹の油の乗つた處をセシめたのである、赤兒の手を捻る様な事をして居ても國が強いと世界はそれで通るがら癪にさわる。

市街は共同租界佛租界及城内の三區に分れて居る、之れ以外に閘北、南市、黃浦江の對岸に浦東がある、在留日本人は多く共同租界内に居住して其數凡そ二萬餘外國人中第一位

であつて、地理上我國は最も密接なる關係があるのだが實際の經濟勢力に至つては到底英國の足元にも寄り附けない有様である、香港上海長江一帶に扶殖せる英國の勢力は實に大したものらしい、支那の南部に於ては日本人の大發展は到底急な事には行くまい、先づ大連や青島に經濟的根城を築いて漸次南下する外あるまい、而し張作霖は南下して負けたあまりよい辻占でない、支那南北統一の不可能な様に日本の南下も當分不可能と見た方がよからふ。

行政

上海の行政は各租界の自治であつて、支那政府より獨立せる一箇の共和國の如き状態で其政治的地位は一種特別なる變態なもので、世界に類なしの事一寸走りかけては話が出来ない。

我在留民は帝國總領事と居留民團の支配の下にあると共に又租界市會の決議にも拘束せらるゝのである、此租界市會の議員が九人あつて其中一人は二三年前から日本人の手に得られたそふで滿鐵の理事者とか聞いた、後の七人が英國一人が米國か佛國か、支那人一人もなし、上海港に於ける政治警察權大部分此市會に依つて左右せらるゝとすれば七人の多數を有する英國の勢力の卓越推して知るべしである、それで英國人が餘り憎まれてないか

銅像

二二

ら感心、外交の巧妙か英國全盛の餘澤か？、上海一等の要街地點にヘンリー・パークス即ち明治初年から十數年間日本及支那に駐割せる英國公使ミ支那政府總稅務司であつたロバートハートの銅像が建つてゐるのを見てそふ思ふた、大連に大島將軍の銅像があり青島に神尾大將の記念物があるのと思ひ比べて、日本の外交對外策のへたな事が我々商人には能くわかる、一將功成りて萬骨枯る、お蔭で青島も熨斗附けて大支那民國に返上これでは萬骨枯れず、躍り出す、而しこゝばかりもいへぬ東洋に横車を押しかけた露西亞の破滅宣教師一人の價で青島を乗り取つたがあの始末、かだけではいけない、英國が永く榮へ米國が有頂天にかんで見ても時は來る、驕る平家は久しからず、萬國の興亡盛衰も人生の有爲轉變、こ更るものか。

筆が横道に外れたがもう少し市街の事を述ぶるこ先づ共同租界が中心地で東西に貫流せる蘇洲河が黃浦江に合する所に架したる鐵橋をガーデンブリッジ稱し、電車馬車人力自動車の往來頻繁なもので各國の人間が思ひくの風俗を以て砂塵の中を右往左往しておる、橋の袂で立止まつて見てゐる芝居を見るより面白い、此橋より黃浦江に沿ふて佛租界の方に上る河岸通を「バンド」又は黃浦灘路といつて佛租界中最も美麗な大建築が並列して居る

共同公園

此「バンド」の川岸に「パブリックガーデン」がある細長い處に樹木は澤山植へてあるが名前程でもない、貧弱な公園だ、それに支那人の出入を許さぬこ、日本人でも羽織袴でないこ這入れないそふだ、神様も祀つてないのに合點がゆかぬ、まさかパークスやロバートの銅像があるからでもあるまい、それは支那人を入れるこ豚小屋にして仕舞ふそふだ、成程苦力や車夫先生豚を去る遠からず着物はポロポロ顔や手足は何時洗つたこも知れず、家なき連中青天井で天下泰平、公園でも開放したら夜も晝も足跡む先もあるまい、日本人の袴羽織は何こする、之れは雲助毛脛命を祀り込む爲合點、それに毛色の變つた連中は此處でも無禮講やらダンスやら、又横道に這入つた失敬、共同租界は商業の中心地、内外の大商店は大抵此處に軒を並べて居る上海一の殷賑街路大馬路も此處にある、茶館酒樓戲園列りて遊客群集滿街不夜城ミ化する、四馬路も此處佛租界にある、佛租界は大體に於て土地廣く道路完備建築整頓して如何にも西洋式に出來て樹木はあり、塵芥も少い他の租界ミは全然而目を異にして居る、富豪や大會社の重役なごは大抵此處に住んで居るそふだ。

共同租界

佛租界

城内

城内支那人町は上海縣城の在つた所舊城壁や七つの城門等は革命後取り崩して今は交通自由である而し街路が狹隘で住民の生活狀態汚穢狼籍たる様一驚を喫する、淺草公園の様

二三

な處が有名な湖心亭を中心に展開されて遊人の蟻集雜鬧いはん方なしてある、象牙細工、玉器、紫檀細工、陶器、骨董等を賣る店が櫛比して賑かなものだ、不潔だけれども日本から旅行する者は城内を素見かすが一番面白いだらふ。

夕暮に宿に歸つて風呂に入り、^{風呂}畜事を済ます來、訪客が三四あつて應接に忙しい十一時過休んだ。

三月廿二日 上 海

今日も天氣快晴有難い旅行者には何よりだ、朝から商甲に奔走した、日本商人の知己一二訪問した城内の支那商人の許に商談に出掛けたが直接日本人と會ふ事を避けられて困つた、商賣上の應酬は記述を畧して一般的の事を要點文摘記する事にして茲に交通の事を少しく記す。

他都市の交通

- 吳淞行は滬寧鐵道で十二哩三十分、一日十二回發車
- 杭州行は滬杭鐵道で百十四哩、六時間一日四回發車
- 南京行は滬寧鐵道で百九十三哩、七時間一日五回發車
- 北京行は二路あり

(一)上海南京間は滬寧鐵道で百九十三哩、南京天津間は津浦鐵道で六百二十七哩、天津北京間は京奉鐵道で八十二哩、全部約二晝夜

(二)上海南京間滬寧鐵道で百九十三哩、南京漢口間日清汽船で四百三哩、漢口北京間は京漢鐵道で七百五十二哩、全部約四晝夜

大連行は南滿鐵道會社汽船四百五十哩、一晝夜半每週二回發船

漢口行は日清汽船會社汽船五百八十五哩、二晝夜半每週五六回發船

長江一帶の巡遊は日清汽船會社の汽船で吳淞より宜昌まで約一千哩に亘る本支流を凡そ五十日にて一巡する事が出来る。

市内交通
人力車

市街交通の乗物としては通船人力車電車馬車自動車がある、自轉車は餘り見掛けぬ、之れは車賃が安いからこのこと、成程人力車の多い事、汚ない支那人が空車を引張つて客の取り合ひ之れは上海の名物といへよう、我々赤ゲツトが宿の入口や商店の出口に立つたら直きに五六臺の車屋が梶棒突きかけて来る供給が多いから安いのは當り前、賃銀一哩毎に十仙一時間以内四十仙其以後一時間毎に二十仙が規定であるそうな、規定通りでなくても安い。

そして此人力は共同租界佛租界及支那街に車税を納むる車でないに全體を通じて走ることが出来ないから乗車に先つて車體に三箇の鑑札あるや否やを検査する必要があるそふだ、而し自分達は別に検査する必要もなかつた大抵宿か行先の土着の人に雇つて貰ふ事にして居た、實際鑑札の検査よりも行先を示すことも車代を聞く事も出来ないから結局人力を獨りで命ずる事が困難、知つた風して間違を起すより安全第一能く聞くに限る。

電車は一區又は二區が一等三仙三等一仙以後一區毎に一等三仙三等二仙で三等は支那人用外國人は多く一等を使用するらしいが別に限られて居るのではない。

馬車は一時間約一弗半日約三弗五十仙一日約六弗、馬車賃も安い一寸荷物なきある時は之が便利だ。

自動車は一時間四弗乃至五弗之は大して日本に變らない、一寸チップも入るようだ。夫から郵便電信の事を一言するに

郵便は上海始め支那の主要なる開港開市地には日本の郵便局がある、上海郵便局は天津路一號にある郵便事務は内地取扱と同様である。

電信は日本宛に限り和文電報の取扱がある名宛を一通に付一語を看做し又本文片假名

七字を一語を看做し二十五仙を課し最低料金を名宛込六十仙と規定されてある、歐文電報は時に變るそふだが日本が二十仙、北京天津十八仙、香港十八仙である。

關稅は旅客携帯の旅行用具の外従價平均五歩の税金を課せられ絹物類に對しては輸出税を課せられてある、刀劍武器は特許を得ざれば携帯して上陸する事は出来ない。

今日は商用の傍市中見物も出來た朝山本三宿を出て一日奔走夕景宿に歸つた、同窓の先輩田川小六氏中村鐵一氏の來訪を受けた、二人共上海に永年活動して居られるので種々有益な談を聞いて有難かつた、商賣に見物に訪問に應接通信やら日記やらなかなか忙しい、使命や職務に忠實なる爲には一寸の隙も油断も出来ない、家に居ても旅に出ても變つたことはない、眠つた間が眞の休息だ。

三月廿三日 上海

早朝起きて商用見本品の整理に時を費した、見本をいつても十種や二十種のものならなくてもないが香料の見本をいへば一通揃へるに貳百種位はある、今營業をして取扱つて居る香料は優に三百種に上るだらふ、只一口に香料をいへば單純なもの様に聞へるが恐らく香料程商品として種類の多いものは尠からふ、序に香料の大體を一言すれば

其生産上より天然香料と人造香料とに別れる、天然香料の中で植物性と動物性と區別が出来る、人造香料は化學的製品と配合香料に分たれる。

植物性

植物性香料は香料の大宗となるもので各種芳香含蓄植物の花葉枝幹根より抽出蒸溜して得たもので此種類の多き價格の多様な非常な複雑なものである。

動物性

動物性香料は或種の動物の分泌物や臓器に有する芳香物を抽出したもので之は數種類に過ぎない麝香や靈猫香の如きそれである。

化學的

化學的製品としては多種多様に簡單に約言し難いが多數の芳香化合物より化學的に抽出轉換をなして新らしき香料を製成するものである、之に天然香料より抽出するもの及び全然香料として存在せざる物例へばサルチル酸やコールターの如きものより抽出集成するものもある。

配合香料

配合香料は各種の既成の香料を多種多様に配合集成して適當の新産物を作るものであつて之は化學的製品と共に殆ど無數に展開され得るもので實際商品として香料の種類が無數に増して行くのは之が爲である。

製產地

次に香料の製産地を擧ぐれば佛蘭西、獨逸、英吉利、伊太利、瑞西、和蘭等であつて天

然人造共に大きな香料會社が澤山ある、亞弗利加南洋支那の如き特種の天然香料を産するが主として原料として生産され歐洲の香料會社で精製されるものが多い従つて安價なものが多く種類も至つて尠ない。

日本に於ては香料としては殆ど數ふるものがない、樟腦屬の香料、薄荷油、蜜柑油、黒文字油位の天産物である、近頃人造香料會社も一二出來たが外國の輸入品に比ぶるに微々たるものである、日本の需要は逐年増加して居るが殆ど大部分外國の輸入によりて充たされてある、最後に用途の一般ぐれば

香料用途

各種石鹼、香水、化粧水、フケ取香水、齒磨、香水白粉、香油、ポマード、髪付、クリム、洗粉等一切の化粧美身料には必ず香料を要せらる。

清涼飲料水用としてシトロン、バナナ、サイダー、アップル、パイナップル、レモン等果實の香精が用ひらる、近來益々需要が増しつゝある。

其他菓子食料品に果實香料が用ひらるゝ猶又醫藥用として白檀油、丁香油、小茴香油、桂波油等が用ひらるゝが之は種類は餘り多くない。

香料鑑定

斯くの如き多種多様な商品だから見本の仕譯や分類は一通りでない、殊に香料は他の

商品の如く目に觸れ又は一定の検査や試験によりて等級眞偽の鑑別が出来難く主として嗅覺の經驗練習によりて辨別さるゝものが多いから商人として香料を取扱ふには少くとも十年以上の經驗を要するのである、尤も天然香料の如きは比重や成分を或程度迄分析試験する事は出来るが之れで少數の割合である。

さて今日の日程は見本全部を携帶して支那人の經營せる石鹼工場や化粧品製造工場を歴訪する豫定で自動車で宿を出掛けたが、案内通辯の勞を約せる章湘泉君が差支が生じたる爲奔走出来ず已むを得ず豫定を變へて知己訪問に出掛けた。

日本海上保險會社に同窓友人岡里喜君を訪れた十二年振に逢つて昔語りをした、夫から同君と増幸洋行の立石亮君を訪問した兩君共元氣に充ちて活動して居らるゝを見て愉快に感じた、兩君の好意で晝食を共にしながら上海の時事に就て教を受けた、學生時代の友人は何時になつても愉快なもの直に打ち解けて何の相談でも出来る、學校の難有味はこんな時に能くわかるものだ。

午後は小林洋行で暮した小山氏や店員達に種々世話になつた今朝熊野丸で大阪から到着された上野氏や手島氏達と會談した。

兩替

日本金百圓を支那通貨に兩替して貰つたら八拾六圓餘りしかない金が安くて銀が高い、相場の変動で午前と午後と違ふ反對の場合は日本の百圓札が百拾圓にもなる事もある、相場の変動と金の勘定はなかく困難で一兩替屋に飛び込んで替へる事は出来ない、支那全體の貨幣制度に統一がないから随分複雑だが上海は殊更面倒らしい、随つて贋造貨幣が少からず流通して居るから鑑別と金の受渡は上海通でない出来ない。

通貨

上海の一般通貨は大畧左の通りである。

- (イ) 銀貨 一元(又一圓若くば一弗と呼ぶ)即ち普通墨西哥弗又は墨銀と稱するもの 二角(二十仙) 一角(十仙)即ち小洋と呼ぶもの
- (ロ) 銅貨 (一仙)普通十一乃至十二個が小銀貨一角に相當する
- (ハ) 一文 (一厘)支那人小賣の標準貨幣で一千三百二十三文が墨銀一弗に該當する
- (ニ) 紙幣 六七種の外國銀行兌換券がある横濱正金銀行及臺灣銀行支店も亦之を發行する

普通一弗、五弗、十弗、二十弗、五十弗及百弗の六種である。

爲替相場

爲替相場は騰落常なしで上海日本郵便局は日々日本貨幣との兩替價格を局内に揭示する

右は普通上海に流通する貨幣であるが、元來支那政府には兩三稱する空稱銀本位があつて之れが價格の標準となつて居る、卸賣其他の大取引税金等は皆之れに據るのである。

三月廿四日 上 海

今日も天氣快晴で奔走に好都合である上海に來て五日目見物や土地の様子は一通り分つて來たが商賣の方は一向埒が明かない、山本は少し悲觀し出したが支那人相手の商賣はあせつても仕方がない保守主義で古きを尙び老舗の家聲を喜ぶ上に歐米崇拜で事大思想に富める商人の事だから新規な物や人には容易に相手にならぬお負けに日貨排斥氣分が止まぬから餘程ポロイ商談でないに飛び付いて來ない、殊に吾々の香料賣込みなき最も此嫌がある、廣告を宣傳を存分にやつて置いて徐々に收穫を得る方針で行かねばなるまい。

石鹼工場 支那製品

朝九時自動車で宿を出て小林洋行に行き通譯兼紹介役たる章君に歐君と共に同伴を乞ふて商用に奔走した、石鹼工場、化粧品工場五六軒を訪れて工場を視察し傍ら見本品を提供し又相當の廣告もして廻つた、概して設備も不完全なり製造技術も幼稚の様で仕揚製品の體裁等も日本品と比べるに餘程劣つて居る、香料の如きも單純なもので種類も至つて少く主として安價なもの十種にも達しない位である、而し工場は廣い地坪を有し製産額も可なり

日貨排斥

多量に上るらしい、國產獎勵の時機に適した爲か開業幾年ならざるに相當の成績を舉げて居る模様である、品質は必ずしも優良ならずとも安價であれば一般的には販路がある、支那人の生活程度には支那で出来る品物で澤山である。高い工賃や税金や廣告費の掛つた日本製品を使ふのは寧ろ贅澤といつた方がよい、こうなつてくるに日貨排斥といふ事は國際問題や外交事件の因縁でなく全く商品其物の競争餘地がなくなり日貨の輸出の途絶へ、反對に支那の製品が日本に輸入さるゝ逆潮に向ふ時がないとも限らない、大阪地方より上海方面に製品として輸出さるるもので、低級な工業に屬するものは漸次右の始末に傾きつゝ、あるは事實を思はれる、固定資本が低くて濟み勞賃給料が安く原料仕入が利便である以上

工業勃興

斯く成り行くは當然の事である、紡績工業、燐寸工業、製紙工業等其他大小の工業が支那至る處に勃興の氣運に向ひつゝあるは事實である、此點は日本實業家の大に注目すべき點であつて殊に支那を得意とする大阪商人に取りては由々敷大事と見てよからふ。

午後は上海最大石鹼工場で日本人經營の瑞寶洋行に訪れた、販路の廣大製品の優良恐らく支那第一といつても過言でない、主腦部數人を除く外は販賣製造職工支那人の手で運んで居るらしい、支配人宇野氏に會つて種々好意を以て遇せられて嬉しかった、商談に於て

語 學

も通辨付きでないから徹底的に談が運ぶ、不十分な通辨を挾んでは到底充分な仕事は出来ない、支那で仕事をしようとするれば言葉から服装から氣風まですっかり支那人に成り切つてやらないと本當でない。宇野氏もいつて居られた、此点からいふと商人實業家に取つて最も大切な修業事は語學である、學校で第二外國語として佛語や獨語や支那語を遊び半分にして役に立たぬ法律や經濟などに一生懸命になるのは一寸見當違ひと思ふ、學校で一番つまらぬと見た算盤や手紙や語學の修業が學校を出るに一番必要だと思ふ。

法律や經濟の學問は別に専門の學者先生辯護士が居る、商人には算盤はじく事と手紙書く事と三四ヶ國の國語を饒舌べる事が肝心だ。

上海料理

夕食には小山氏の好意によりて支那料理の御馳走を受けた、有名な永安公司の經營せる大東旅館の一部にある食堂で様式は少し西洋化して居る様だが料理は純支那式である、日本人五人支那人五人都合十人で圓い大きな卓子を圍む、大きな茶碗に支那茶が出る、蓋をしたまゝ隙間から啜る、名も知らぬ木の實が二三種皿に盛つてある、西瓜の種子が小皿に入れて並べてある、料理が出来て来るに之をかじる、吾々は下手で西瓜の種子一つ外皮を去つて中實を取る事が容易でない、支那人は口に入れてゴツゴツやるに直に皮と實を舌

齒で捌いて皮だけフイと吹き飛ばして居る、なか／＼巧みで早いものだ、料理を井又は大鉢に盛つて一種宛出る、一つ鉢から皆が自分の箸で自分の口に運ぶ、一つの井から汁物を自分の匙で自分の口にすすり込む、箸と匙が占有で料理は十人共有二皿三皿次々に出て来るものを挟み取りツ、き回すのだ、日本の勤焼を非衛生的といふが支那式は一つ上手だ、初めて見参するものは一寸此合戦には躊躇する、お負けにボーイ君がなんだが薄汚ない面相服装頗る見つゝも能くない、食事中にタタルを熱湯で絞つて持つて来るのはよろしいが之が四五回も續く、處が之も十人共通第二回以後には人の使ひ滓に當る、前のを能く洗ひ出して來ないから汚点や移香があざやかに見へる、之れには閉口何にしても平氣で顔を拭く氣になれず一寸手先だけで済ます。支那人諸先生喰ひ行儀が悪い、食事中にペー／＼と唾を吐く、骨付を嚼る、喰滓を卓子に積む、成つてないが之が支那式では主人側に對する禮儀充分に呼ばれ盡した事になる相だ。而し料理其物はなか／＼旨い、珍な料理が澤山出る一度や二度では名前もわからぬ。鳩の卵家鴨の丸煮家料理の數々鱸魚料理、海參料理、クラゲ料理、燕巢料理、海老料理と十四五種も持つて来る、調理の塩梅も口に合ふ、實に中味の料理だけは日本料理、西洋料理でもお話にならぬ、水臭い日本料理生物交りの西洋

料理、目に見ては美しいが口の味いさ、身の養には支那料理の足元にも奇り付けまい。そして値段も安い十人で十分に満腹飽食して二十圓内外、飲物入れても三十圓なら充分で非常に安い。

此大東食堂は余程西洋化してハイカラの方だから値段は少し高い相だ、此の後で自分が支那人を支那生粹の料理屋に招いた時は九人で一卓子で拾三圓余でチップと共に拾五六圓で済んだ、何にしても安いものだ。滋養に富んで経済で而も口に美味しいのは支那料理だ、世界一いいやうい、之を反對に日本では食器や座敷や裝飾などに金をかける、お負けに高い毒な酒やつまらぬチップに馬鹿に金を絞らる、支那の實利主義は日本の威張主義のよい表象だと思ふた。

食事を済まして一同打ち連れて賑かな町を散歩した、今日迄夜の町を知らなんだ、通辯付で夜の町をうろつくのも氣が利かぬし又萬一の危険を恐れたから夕景宿に歸るに手紙書きに來客の應接に引込んで居た、始めて上海の道頓堀千日前を見た、群集雜鬧滿街の不夜城であつて其賑賑さすがに上海だなと思つた、上海通二三人と同道だから一通り見物して宿迄歩いて歸つた、風呂に入つて疲れを休め早く寢に就いた。

三月廿五日 蘇 洲

今日の日程は章君の案内で早朝上海出發蘇洲見物に一日を暮し一泊して翌朝無錫にいふ町に行つて少し商用をなす事であつた、昨日萬事打合せして置いたから早起して支度を済まし自動車で停車場に駆けつけた、七時五十分の發車には十五分程間がある。

章君を探したが見當らない、三分五分過ぎても姿を見せない、余り人込でもないから來て居れば直に見付かる筈だ、さうく見へない時間に遅れたのかそれとも急に用事でも出來たのか、困つたものだ、案内通譯なしでは今日の見物明日の要事がダメだ、口を開けば支那語相手は支那人金は支那錢を來てるから切符一つ完全に買へない、宿の番頭が見送つて來て世話して呉れてよかつたが章君が來合はせないのは大閉口、仕方がないから山本と二人で蘇洲の見物丈で歸る事に腹を極めて切符を買はして汽車に乗つた、發車間際まで氣を遣つたがさうく章君やつて來ない、宿の番頭に後事を托して發車した、支那の汽車に乗るのは始めてだから何だか勝手が悪い、支那人と西洋人ばかり、日本人は一人も見へない、而し一等室には西洋人か日本人で支那人は割合に少ない、幸ひ六人詰の室を山本と二人で占有、乗合の人もなくして氣樂で何よりだ、汽車は廣軌で客車の構造も日本のものは

支那汽車

異つて居る、片側に通路があつて客室が一方に扉付で仕切つてあつて一室に六人向ひ合ひに座れる、夜は寢臺四個になる、晝は真中に取外しの出来る卓子が架せられて茶を呑んだり書物を讀むには至極便利だ、日本の一等より余程上等だ、尤も四等五等迄もあるのだが一等が氣に入るのも當然、何故か知らぬが一等の事を頭等と書いてある、處變れば品變る、汽車の事を火車といふ踏切の注意に「小心火車」と書いてある成程火の車なら一層用心が出来やう、但し日本に此歌あるを知るや知らずや、

火の車作る大工はあらねども

己が作りて己が乗り行く

次の停車場(車站)に着く迄に妙なイカメシイそこそ間魔様の帽子見た様なものを被り洋服やら支那服やらわからぬものを着た顔付きのよろしくない男、支那語で何かツツケントンに言ひ放つて居る、英語で一寸尋ねるに通用する、切符検査と分つた、道理で面相が悪い、検査役は何處の國でも嫌な顔をして居るものだ。

柏子の悪い事には宿の番頭が一等と二等と間違つて切符を買つて居たので暫くゴテクサしたが結局不足額を渡して一等切符に替へて貰つた、持合せの珍品に代るものをやつたら、の車は熱くないわい。

沿道の景

車窓に凭つて沿道の風景を見るに楊子江流域の耕原地で山一つ見へない、廣漠たるものだ、麥の畑、菜の花畑、綿々として連つて居る、さすがに春だ、村落には桃の花が咲いて居る、柳も若い緑を漂はして居る、犬も居る、鶏も唄つて居る、驢馬に豕、時には水牛さへ見へる、家の造りが變つて居る、松や杉や樹木らしいものが少しもない、常盤木でない枯木の様な木が村里に立つて居る、少し高い木には必ず鳥の巢がある、山林がないから仕方がないと見へる、而し里の子供もいたづらはしないらしい、此鳥の巢の多いのを此邊の名物と見た。

停車場

二時程で蘇洲に着いた、下車して改札口を出るにサア大變、乞食見た様な連中吾々の前後を取巻いて通さぬ、ピー／＼／＼／＼うるさい事お話にならぬ、荷物を持たせてくれに車馬に乗つてくれが彼等の願だ。不要／＼で手を振つて制し兼ねて居るに支那巡査繩鞭で連中の足元をムゴたらしく引つ叩く、エライ勢だ、之れで皆退却に及んだ。

巡査が向ふへ行くに又寄つて来る、始末におへぬ夏の蠅の様だ、其處へ懐しい日本語で一青年が出て来て名刺を出す、之れが今夜泊る筈の日本旅館の案内者だ、早速馬車で三人同乗宿に急いだ、停車場から蘇洲の町迄は一里もあらふ、城外の日本租界は停車場と反對の方向にあるからなかく遠い、馬車の上から沿道往來を眺めるに純支那風俗が能く見へる、如何にも珍らしく面白い。

日本租界

居留地とは名ばかり、領事館と警察と繁の家といふ日本旅館が城外の街道筋に一ヶ所にかたまつて居る、日本の居留民としては外にないといつてよい、宿の隣に一軒電燈會社の技師が一家族ある丈けだ、位置が悪いから居留しても仕事はあるまい。

外交が拙い爲英國の指圖でい、様にされたそんな宿の青年が憤慨して居た。

宿に着いて晝食を命じ其間に野原に出で、長閑な春の日を浴びて繪葉書數枚認めた、柳の枝には春風が見へる、櫻の並木が連つて居るがまだ蕾がかたい、葦や蒲公英が野原にチラホラ咲いて居る、座ろに故國の春が偲ばれる。

た、すめば蘇洲城外風薫る

長閑さや菜の花畑帆船行く

驢馬君

晝食を済まして宿の青年を案内者として見物に出で立つ、馬車か俾と思つて居たら驢馬が三頭待つて居る、子供の玩具位にしか見へない小さい貧弱なものが二十貫近くもある人をよく乗せるか一寸躊躇したが決して心配入らぬ馬方がいつてる、馬方二人無論支那人汚ない事は例の通り、而し一人の先生少し日本語が出来る、其日本語がなかく聞きもの一寸真似も出来ぬ、勇氣を鼓して乗つて見たが何だか普通の馬とは違ふ、乗心地の悪い事お話しならぬ、歩き出すに落され相だ、小跨にチヨロ／＼走るから尙氣持が悪い、落されまいと力むから体がぐらつく、其恰好が餘程滑稽に見へて山本は笑ひ崩れて居る、山本は足が長いから少し足を踏ん張るに地に着く位だが自分は體が太い割に足が短かいから笑ひでもするに振り落されさうだ、茲一生懸命だ馬方め客の苦勞も知らずに口も取らずに後から追かけてピシヤ／＼鞭を當てる、馬子が嘔狂な掛聲をかけるに驢馬が變てこな嘶聲を發する、支那語だからわからない、わからないから尙おかし、お負けに自分の馬だけ横走りして列を崩して仕方がない、列を崩すに馬力が後から走つて来て支那語で叱る、先登に居たけれども後に下つて能く見るに此先生片目だ而も一番小さいの一番大きい客を乗せて居る行儀の悪いも無理はない、早速他の馬に乗り替へた、處がこいつも亦行儀がわるい之れ

は餘り振つた滑稽だから畧して置かふ。漸く道の五六丁も行く間に乗り具合が分つた一生懸命苦しんだから習はぬ馬術のいろはが讀めた、東京の小林さんが此調子で乗せられて閉口、笑ふ所でなく大變おこつたといふ話を思ひ出して尙おかしかつた。

蘇洲の位置の沿革
 蘇洲は大運河と蘇洲河との會流點に位し西南には太湖を控へ江蘇省屈指の大都市で人口約五十萬もある。春秋の世の吳の國都姑蘇といつて越の國を争ひたる處又會稽の故事のありしも此地方で姑蘇時代より二千五百年の星霜を経たる古き都である、杭州と共に清楚美觀を以て稱せられし市街らしいが數度の兵亂の爲に慘禍相次ぎ今は昔日の榮を見られない。一八九六年馬關條約で外國互市場として開放せられたのであるが町は城壁で圍まれ城門が六個所有て、城外に周らす運河に通ずる五ヶ所の水關があつて水運の便利な處である、姑蘇三千六百橋といはれた位橋の多い處水の市といつてよい、其橋は石造の穹狀になつた鼓橋であるから馬車や人力の通行が出来ない、轎子か驢馬を用ゆるのは之が爲である。驢馬に乗つて市街地に散在する名所や郊外地の舊跡を遊覽に走り廻つた、二三重たつた所を擧ぐるに玄妙院といふ大きな伽藍のある寺此處は境内廣く露店や茶樓與行場等があつて賑かな遊場で我淺草か千日前に似た所である。

城市

名所
玄妙院

北寺塔

有名な北寺塔は報恩寺といふ寺の境内に在る九層の石骨木造で天王寺の塔よりも淺草の十二階に似て居る。塔の最上に登つて雄大な大陸の展望を擅にした。吳の孫權が乳母の供養に建立したものといふ。壁に樂書してあるのは日本も變らぬ。自分も一寸失敬した。

北寺や塔の高さの九重に

吳の尊嚴(孫權)の偲ばるるかな

孔子廟、留園、滄浪亭、雙塔寺塔等見物したが何れも往時の盛華を思はしむるものがある、而し是等の名所か一体に保存掃除が行届いてない上汚ない乞食見た様な連中が番をして居るから其尊嚴や美觀を殺ぐ事一通りでない、孔子廟なき宏大な建築であるが、境内には名も知らぬ草が蓬々繁つて居る、參詣の人もないらしい、荒廢するに任せてある様だ只年に一度か二度か祭は行はるゝそだ。日本には八百萬の神があるが支那には一つの神社もないよ、孔子廟が之に代るもので到る處に祭つてあるが之れは所謂墓場で生きた御利益もない見へて參詣人一人見當らない、支那は矢張り佛の國だ。

市街の大通小路を驢馬で西や東にかけ歩く間に支那町の風俗、生活の模様なき非常に面白く見られた。葬式の行列にも會つた、花嫁の通行にも出喰はした、裏店の汚ない所を通つ

て鼻を挿んだが、女學生の行列を邂逅して馬上から蘇洲美人の美しい姿を拜見に及んだ。後から聞いたら蘇洲は支那第一の美人の産地だそう、楊貴妃も或は此處の産かも知れない。

虎丘

郊外の虎丘といふ古跡を訪れた、吳王闔閭を祀る禪寺が山の上にある、昔此處に吳王を葬る時十萬人を殺して埋めた所が三日の後悉く白虎に化して陵上に蹲踞したといふので虎丘の名があるそふだ。

文珠重國

山上に高い塔がある風雨に曝されて幾星霜を経て丹碧の美技巧の妙は見られないが座ろに千年の昔を語る思がする、此處の山門に大鐘がある、其銘に南紀文珠重國とある、之れは紀洲の刀鍛冶で有名な名工である、日本で鍛つたものを送つたか、支那に行つて鍛つたか知らぬが、文珠重國の名がなつかしく見られた。此處を下りて春の野道を驢馬に鞭つて名所詣での半日の清遊なかく愉快であつた。

始めは驢馬を怒つたが馴るにそふでない、調法な動物だ雑鬧の中でも細い呷道でも平氣で運んで呉れる、日本の馬の様に馬屋や別當も入らないで贅澤でない手軽く飼へる、子供の玩物には持つて来い、一匹買つて歸りたい様に思つた。

驢馬の嘶

而し困つた事にはこいつの啼聲だ、胴体の小さいのに聲の大きい事恐ろしい様だ馬の嘶きと獅子の咆哮と豚の啼聲と犬の立吠とをチャンポンにした様な何かこもかこも形容の出来ない厭な聲で、山本が亡國の聲と評する、此聲を聞くに一遍に愛憎が盡きる、やはり支那語で啼いてるだろうと思ふて馬方に通譯を頼んだがよくわからない、ひもじいのだろう、胡馬北風に嘶くといへば詩句になるが「驢馬空腹に咆哮すでは文句にならない。

亡國の聲は何處を尋ねれば

蘇洲城外驢馬の嘶き

亡國を驢馬いなくや蘇洲城

最後に一番有名な天下の名所寒山寺を訪れた、姑蘇の城外一里半、楓橋にある、唐張繼の夜泊の詩で鳴り響いて居る。

月落烏啼霜滿天 紅楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

而し此れ程天下に響いた名所であつて此れ程名に實に伴はない價打のない所は天下になからう。

寒山寺

幽邃なる山もなければ清澄なる水もない只運河に沿つた一部落の町外れ、極めて平凡な小さい寺がそれである、殿堂の美も輪傘の麗も勿論ない、日本の田村にある小さい禪寺より浅ましい、昔日の面影をも止めない迄に荒廢したかは知らぬが夫にしてもあんまりつまらなさ過ぎる昔もても左程の事はなかつたらふ、只楓橋夜泊の詩が人を呼んで居るのだ、文字の國、詩の國さすがにゑらい、四行の詩文が天下の名所を作つたのだ、六十余りの住職近舟和尚頼みもしないのに書を二三枚書き卸して呉れた、筆はなか／＼達者だ、此方から外に五言の佛語を詩文した「今井先生殿に高囑す」もある、お蔭で買物以外に謝禮が二弗なんほ名所でもあれでは賽錢も上るまい、内職の字書きで好きな酒でも買ふのだらふ。

名物にうまいものなしよくいふた

寒山禪寺味噌の香ぞする

此外天平山靈巖山太湖船遊等残つたが時間がないので見物を止めて驢馬を走らして夕景旅宿に歸り一泊した。

三月廿六日 無 錫

昨夜章君が旅宿にやつて來た。次の汽車で吾々の後を追つて蘇洲に來て自分の用を濟ま

し夜に入つて同宿したのである、今朝は上海に歸る筈であつたが之れで豫定復活になつて共に無錫に行く事にした。

蘇洲から鐵路二時間にして無錫に着く、今日は半日本人の章君同道だから汽車中愉快であつた、沿道の風物に就て能く説明を受けた、此邊一帶に麥畑桑田連つて居る、耕作は余に手入れが届いてない、粗放な様だが收穫は良いそふである。

章君の郷里寧波地方は農家は充分手入れをなし集約的に耕作をなすそうだが收穫は却つて此地方に劣るそふだ、理由を尋ねるに此地方は地層が縦で寧波地方は横だといふ、成程縦であれば根が這入り易く横であれば畝も入れ難く根も浅からふ、素人には簡單にして要領を得た説明と思つた。

無 楊

下車するに相變らず苦力や馬車屋がワイ／＼殺到して道を塞ぐ、章君がついて居るので安心だ、俵で拾丁余りの市中に走つて一旅館に投じた、泊るのぢやない晝の支度や休憩のめただ。

中西旅館

旅宿に中西旅館の旗が揚げてある、中西といふ日本人が經營して居るのかと思ふて居たらそうではない中は中國西は西洋の意で日本の和洋旅館に當るのだ、道理で大きい町に

は大抵中西旅館が二つや三つあるのが後で気がついた、上海でも此邊でも吾々日本人をト
ンヤン(東洋)といつて居る、支那は中華國だから西洋と東洋とを振り分けにして居るわけ
だ、日本丈けを東洋と見て呉れるのは光榮だが自分が東洋の真中に居ながら西洋最負ばか
りして日本を袖にするから内輪喧嘩が絶へぬのだ。

宿の二階から前通の往來を眺むるこなか／＼賑かなものだ、停車場に行く目貫の街路で
日本人や西洋人は一人も見へない、純粹の支那町である、通行人の面相服装や物賣の呼聲
や珍ならざるものはない。街路からも吾々日本人が珍らしいと見へて下から眺めて居る、
車屋か四五丁宿の入口に押かけて支那語で吾々に頻りに喋舌つて居る、吾々を或遊樂地に
案内しようといふんだ、梅園とかいふ名所だそうなる。

暫くするに支那服を着けた人品のよい支那人が刺を通じた、之は警察官で宿の届出で早
速調べに來たのだ、日本人など減多に行かないから注意するのだらふ、勿論善意であり保
安の爲である。

支那料理の晝食を済まして車を連らねて郊外地の或工場に出掛けた。途中で其處の技師
楊君に會つた生憎今日は工場主は不在工場は休業の事で残念、面會も視察も出来ない。

技師楊君と要談を済まして後は見物四人連れで車を飛ばした。

此處は上海南京間に在る著名な工業都市である。絹糸紡績の盛な所で大工場が澤山ある
上海開港以來好影響を受けて繁盛に向ひ江蘇省富源の中心地といはれて居る、人口二十萬、
宋代の築造に係る、城市は周圍五哩高き麻壁を繞らし、東西南北の城門もある、大運河に沿
ふて居て城内に通ふ水門も三ヶ所ある、支那の城市は大抵平地であつて近くに山を見る所
はない位だが此處には直ぐ傍に滙泉山といふ高くて勾配の緩かな親しみのある山が町の西
北に横はつて此處の地相に一段の價值を添へて居る、丁度大阪の生駒山の様に見られた。

此山の麓に一二の名所を遊覽する爲二里近くもある城外の大道を走つたが途中で二つの
事件があつた、一つは仲夫の横着である、吾々の命する方向に行かずに自分等の勝手な所
に連れて賃銀をゆるする積りらしい、章君と楊君は支那人、自由に支那語で叱り付けて居るの
になか／＼きかない西へ行くのを東へ行こふといふ、暫くははけしい口論があつたが吾々
は怒るより寧ろ面自い、支那語の喧嘩は聞きものだ、章君非常に怒つて將に活劇にも及ば
ん有様である、こうなるに吾々も笑つて居られぬ仲を下りて日本語で怒鳴りつけて威勢を
示した、客の權幕に怖ぢたのか仲夫奴忘れた様に素直に棍棒をあけた、支那人連れでさね

ハイカラ
君の落馬

此通り日本人丈けでは到底無事には納らぬ、今一つは今日の日曜日支那青年ハイカラ連中五人馬に乗つて郊外遠乗こいふ場面、吾々四臺の俾が近づく頃一頭の馬が何を怖ぢたか俄に駈け出して乗人を振り落して道なき畑へ一散に走る。落馬の先生腰をさする間もなく後について走る、他の連中がピー／＼パー／＼支那語で詈り合ふ、車の上から思はぬ余興に腹を抱へた。

景 山

滙泉山の麓にある梅園、景山等名所を見た、丁度京都の清水の様な所で寺があつて樹木もある奇岩石材を以て築山を拵へ墜道を穿ち石段を曲折させてある、支那の名所は大抵此式で自然の山水が乏しいから己むを得ず人工でやる、樹木は風土に適せず、思ふ様に生育せぬから石や岩を用ひ丹碧を凝らすより仕方がない、此處の土産に無錫人形こいふのが名高い、博多人形の様な土人形青や赤や毒々しい彩色をして種々なものを作つてある、値段は安いが重いので日本へ持つて歸る程のものでもない。公園や市中雜鬧の中を散歩して、見るもの聞くもの凡てが珍妙に感じた所謂唐人町の不潔低級な所を遺憾なく拜見に及んだ。

無錫料理

四時の汽車を外した爲め次は七時、夕食を一料亭で認めた、料理の中味は旨いが食器や食卓や食室の不潔には閉口だ、何處へ行つても此通り上海、南京、天津、北京皆然りである。

無錫人形

而し安價な事も恐れ入る壹圓内外で充分に食へる。楊君と分れて少し早目に停車場に出で七時の汽車を待つた。

俾 賃

驛前の廣場で暮れ行く町の景色を眺めて旅情の寂しさに打たれて居るこ又一事件が起きた。車二臺で田舎の夫婦者子供二人伴れて駈け付けた、車賃を拂ふ段になる口論が始まる妻君迄口を尖らして車屋に喰つてかゝる、盛んにチ／＼／＼やつて居る、傍に近つて聞いて居るこ實に面白い唐人の寢言こいふが寢言より喧嘩は一段こ面白い双方腕を捲くり將に活劇にも及びそうだ、話の種子だヤレ／＼吾輩此處で觀戰する、仲裁をせぬ、他の婦人が仲裁に入つたが止まらぬ乗客先生車に飛び乗つた車夫君棍棒をあげた、元の場所へ返へすこいふのか警察にでも出やふこいふのかわからぬ、汽車の時間は迫るが夫君は騎虎の勢止むに止まれぬ、漸くにして妻君金入を出して赤黒い奴を一枚宛二人に渡す、之れで事件解決、壹錢銅貨にあらざれば貳錢銅貨なる事確かだ、成程車賃は安い。口論も安い時間も安い支那人は金で回はすに限る。

七時の汽車で出發上海から沿道の日曜遊覽に出掛けた西洋人や支那上流の男女こ同乗した、幸運な事には支那美人と西洋美人と同室の榮を得て對照比較が出来た、おかげで汽車

中の退屈を忘れて十時過上海に歸り着いた。

三月二十七日 上 海

五二

洋服屋

豊陽館で眼を覚ます、今日も好天氣で何よりだ、朝風呂に入つて身仕度をして居る、支那人の洋服屋が仕揚物を持つて来た。日本人に支那人に注文したが比べて見るに支那人の方が、値段は安い生地の見本なごも支那人の方が豊富に持つて来る。只仕立方が拙い時日があつて念入りに仕立てさへすればよからふが、旅行者には其餘裕がない。不出來の品に甘んずるの外ないが而し之れを口實にして註文を取消すか、所謂シヨンベンするか、値段を引かすかで洋服屋は苦しめらるゝそふだ。言葉が充分に通せず、信用をかまわぬからこんな無理が出来る。旅の耻ならぬシヨンベンをたれ流しにされては、後から行くものが迷惑する。而し洋服は安い、大阪で百圓もかゝるものが、上海では六十圓で出来る。

田中大將の爆彈騷

今朝の新聞は昨日の珍事、田中大將の爆彈騷で賑ふて居る。大將が比律賓訪問の歸途税關前のバンドに上陸した處に不逞鮮人（金益相）が現はれて爆彈を投じたのである。幸に大將は無事であつたが、傍杖を喰つたり、逃走中に負傷を負はされた者こそ氣の毒千萬、中にも悲惨なのは一西洋婦人が、爆彈に觸れて倒れた事である。病院に擔ぎ込まれて間も

なく死亡したのである。此婦人は近く愛兒を亡くして失望悲歎に呉れて居たので、夫君に携へられて世界一週旅行を思立ち、せめて悲痛の幾分を慰する目的であつたそふだ、日本の舊式でいふに愛兒の菩提を弔ふべくオイヅルを着て夫婦で四國遍路に出掛た形だ、それが偶然田中大將と同船して上海に上陸したばかりの處をやられたのだ、實に不仕合の至りである、取り残された夫君が死骸に取纏つて泣きの涙に呉れて居るこの事だ、新聞を見てさへ同情の涙が催される。田中大將は花輪を贈つたり使を遣して百方悼意を表せられたそふだ、それもその筈全く身代りの様なもの……。

英人ハイクスの銅像の前で日本の軍閥の親玉が不逞鮮人に覗はれて却つて米國の一婦人が斃されたが何だか現代の外交時事の辻占の様にも見へる。何分世界人種の寄合所だから此位の出來事は珍らしくなからふ、上海の社會相か世相かを能く物語て居ると思ふた。

小林洋行

十時頃から小林洋行に出掛けて商用に奔走した、小林洋行は東京のライオン齒磨本舗小林商店の別働隊である、十數年來貿易業を經營されて主任小山氏が多くの店員を指揮して活動して居らる。自分は小林家には先代富次郎翁以來特別な懇親の關係がある爲何の氣兼ね遠慮もなく小山氏や店員達の好意を受けて商用、見物萬事行き届いた利便を受けて非

常に嬉しく思ふた。元來大阪商人が上海や天津で支那人と直接取引を始めるのは容易でない先方の信用がわからぬ様に先方も此方の信用がわからぬから取合つてくれない、有かな紹介者があるか信用ある其地の商店の仲介なり代理が最も必要である、さうして言葉や商習慣に熟した支那人を用ひて商買に當らすが安全であり又近道である、殊に支那人は店が老舗でありレツテルが老舗でないミダメだ。

此点から見ても老舗であり支那人に信用ある小林洋行がエゼント的な勞を見て呉れたので非常に好都合であつた。お蔭で今日は商談が二三口纏まつて嬉しかつた。或一流の會社では社長が好意を以て面會して呉れて愉快に思ふた、英語が話せるので支那人の通譯なしで直接要談が出来た。商品の鑑識商人としての常識なく、侮り難い人物と思つた、夕景遅くなつて辞して歸る頃日本語の巧みな支那青年が刺を通する、此人は此會社の社員で神戸に在留して買付係を勤めて要事で上海に歸つて居られる郭君といふ人である。蘆屋の宅の近くに住んで居らるゝ自分の知己マイヤース師に英語を教はつて居らるゝ事もわかつた。

意外な所で意外な人に出會ふたが神戸や大阪で會つては余り感激にも當らないが初めて

名古屋 光園

行つた支那人の店、而も支那語か英語でないミ話が出来ず日本語の一寸も通じない所に飛び出されたので一種の滋味を感じざるを得なかつた。

宿に歸つたら名古屋の市會議員の視察團七人今朝入港して隣座敷に泊つて居らるゝ、明日は杭州見物の日程らしい、杭州は日本人の居ない所で見物には必ず通辯を伴れなくてはならぬ事を聞いて居たので幸ひ此一行に隨いて行けば萬事經濟と思つて女中を介して同行を頼んだ。一行中の白石氏早速自分等の室に來られたので初對面乍ら快談を交して心安くなつた、無論同行は快諾だ、通辯一人伴れて明早朝一行九人杭州見物に定めて寢に就いた。

三月二十八日 杭 洲

早朝身支度をして一行九人自動車で停車場に駆け着けた。六時何分といふ一番汽車で發車したが困つたのは通辯が來ない事だ、急な差支で今朝になつてから斷つて來た爲外に雇ひ易へる間がない、已むを得ず汽車には乗つたが一同大弱り、暫くの間支那人ばかりの汽車の中で日本語で大評定一同勢九人だから元氣はエライが支那語に來ては一言も出來ない連中、騒ぐのも無理はない、若し杭州で通辯を得ず案内人なしにすればそれこそ啞の聲の旅行だ。市會議員も辯護士もあつたものぢやない。そこへ丁度乗合はして居た一等客の支

那紳士少し日本語がわかるこ見へて吾々の騒ぎに黙し兼ねて發言して呉れる、日本語は不
充分だが英語が能く話せるので種々對話が出来た、上海で新聞業を經營して居る鍾先生こ
いふ人だ、自分も杭州に行くから旅館迄案内して都合よく世話して上げようこいはれる。
一同も思はぬ良き道連れが出来て一安心、漸く沿道の風光に眼をつける氣になつた。

滬杭鐵道
沿道の景

鐵道は江蘇省の一部こ浙江省の大部分を縫つて南西に奔つて居る。沃野渺茫こして水田
桑園綿々こして連つて居、山嶽の秀麗もなく平凡なる景致賞すべきものはないが到る處水
利が縦横に通じて農作物は豊饒らしい。菜の花や桃の花の咲いて居る間に村落の点在する
のはよき眺めである、古い城壁を以て圍らされた都邑や丘の上に立てる古塔が點在して居
る處は國の古さを能く物語つて居る。

龍華、松江、嘉興、周王廟、長安寺の都邑を経て約五時間で杭州車站（停車場）に着い
た。

杭
洲

下車するこ不相變馬車の脚夫や荷持夫が押しかけて来て混雜する、幸ひ鍾先生の先達で
無難に驛前に入る、丁度旅館から案内人が来て居た。無論支那人だが日本語は鍾先生より
旨い。一同車を連ねて市中を走り有名なる西湖々畔にある聚英旅社こいふに投じた。

沿位
革置

城
市

此處は浙江省の首府で人口三十五萬餘の大都會である、有名なる大運河の南端に位して
水利も亦至便である。禹貢の時代には揚洲春秋の時は越國、それから隨唐吳越南宋こ代々
其國都たりし歴史上の沿革に富める古き都である。昔マルコポーロが此地に遊び景勝宮殿
の莊麗を稱して、世界に冠たりこ贊嘆せりこのここである。支那人も亦「上有天堂、下有
蘇杭」こいつて其美を謳歌して居る。府城内は例によつて城壁で繞らされて四面に城門が
ある。慶春、清泰、望江、候潮、鳳山、清波、湧金、錢塘、武林、艮山こいふ十門が開け
てある。水門もあつて運河や西湖の水こ通じて居る。此地の生命こいふべきは有名なる西
湖の明媚である。之れあるが爲に支那の「瑞西」こも稱せられて、内外の遊覽客が絶々な
いのである。府城に等しい面積の湖水で我が琵琶湖程雄大でなく、海景色も備へないが、
湖面全體が一目に見渡され翠巒靈峯を以て圍まれて居る所は琵琶湖よりも遙に觀賞的こい
ふか理想的かである。而も近江は八景こいふが、此處は西湖十景である、同文の有難さに
は名前を對照しても面白い、之れを一々嘆賞的な説明を加ふる筆を持たないが、其文字が
大部分の詩趣を表はして居るから一寸並べて見よう。

西
湖

西湖十景

一、三 潭 印 月

二、雷 峰 夕 照

- 三、平湖秋月
- 四、南屏晚鐘
- 五、蘇堤春曉
- 六、柳浪聞鶯
- 七、斷橋殘雪
- 八、花港觀魚
- 九、曲院風荷
- 十、雙峰挿雲

瀟湘八景として古來有名な風景は湖南省の楊子江流域に散在して居る。近江八景の名稱由來が此處から來たのであらふ序に記すこ

瀟湘八景

- 瀟湘夜雨
- 平沙落雁
- 洞庭秋月
- 山市晴嵐
- 遠浦歸帆
- 烟寺晚鐘
- 江天暮雪
- 漁村夕照

之れ以外に湖上湖畔に幾多の名稱寺院があるから、詩筆に富んだ支那の文人墨客は此十景を賦する外三十六の名蹟を挙げ七十二勝を數へて居るさうである。

西湖の觀光は船遊が最も愉快で所謂、畫舫を雇ふて湖勝を巡覽するのは詩的であらふ。陸地の名勝を探るには、人車、籠、驢馬で廻る事が出来る。

吾が一行は直に入車を連ねて、案内人葛余堂君を先達にして山の名勝を巡覽し歸りに水の方を賞する事にした。

葛君は日本領事館に永く勤めてゐたので、日本語は一寸話せるが名所舊跡の説明は出來そふにもない。其上九人の連中に只一人だから車の上ではあり話が聞へない、圖面か書物で自得するより外はない。

西湖觀光

古塔や寺院や廟墓の有名な所だけ、順覽して西湖の風光に親しむ事が出來た、畫舫ならぬ小船二艘に乗つて湖心に掉し西冷(西湖)の十景を賞した。時間に餘裕がないので充分に觀光が出來なかつた、一行中には通人も居るので、例の畫舫を浮べ西湖美人を招んで一夕の遊宴を張らんこ、言ひ出したが之は少數で否決された。

情斷橋話の

斷橋殘雪の名所には面白いローマンズが傳はつてゐる、蘇洲の文世高きいふ書生が此の斷橋の邊りで劉秀美きいふ窈窕花の如き美人と甘い戀に酔ふて悲劇となり、喜劇となつた情味タップリな情話である。古來蘇杭の地は美人の產地だそうな、蘇洲の美男子と杭州の美婦人とを西湖景勝の中心、斷橋に結びつけた挿話であらふが元の至正年間の事といふ、強ち無根の事でもあるまい。日本にも紀洲日高川の安鎮清姫あり、山城宇治川の朝顔日記

がある。天然の名所には人事のロマンスが、附物となるのは支那も日本も異りはない。

此外書物に見へた古蹟を挙げるこ

古蹟

- 一、葛洪仙人が仙丹を鍊つたこいふ葛嶺仙蹟
- 一、白樂天が築いた白堤故蹟
- 一、蘇東坡が詩を讀んだ六橋才蹟
- 一、林和靖の放鶴亭あゝる孤山隱蹟
- 一、丘飛廟のある丘墳忠蹟
- 一、詩人宋問之僧守一が詩の問答をした靈隱詩蹟
- 一、名妓蘇小々の墓のある西冷韻蹟
- 一、佛韻禪師と東坡との事蹟のある南屏醉蹟
- 一、唐の英雄錢鏐王の錢塘霸蹟
- 一、名妓馮小青の梅嶼恨蹟
- 一、蓮池和尚が放生所作つた放生善蹟
- 一、虎溪三笑の虎溪笑蹟

一、三臺夢蹟

一、雷峯怪蹟

一、三生石蹟

さすが文字の國丈けあつて、名前の排列がなかなか巧い、こんな事蹟由來を一々頭に入れて名勝を探れば興味も多いが、此豫備智識がないと折角の名所探勝も餘り感心しない。

名所といへば山水の美か人工の美が大部分であるが、山紫水明に慣れた吾々の眼には西湖の山水も左程勝れたものとは思はない、廣い平凡な黄土萬里の中にあるから珍しい事になる、支那の瑞西といへようが東洋の瑞西といへない、風光明眉は日本が世界一と思はれる、人工の美は寺院別墅に表はれてゐるが、之れも精巧極致に感心するものは殆んどない。

善男女

神社佛閣

寺院に佛像が多く其佛像が流行つて居り善男善女の寺参りの多い事が一寸目につく。而し眞の信心供養の爲か物見遊山の浮れ歩きやら一寸吾々には見當がつかないがそこまで皮肉に詮議の要もなからふ、日本でも神社佛閣に参詣するものが悉く信心崇拜の爲ではあるまい。寧ろ大多數は所謂遊山氣分の遊場所としてゐる様に思ふ。人間が拵へた神社や佛閣

だから人間の都合のよい様に使つたらよからふ、神様が人間を造つたにすれば、其神様は本物だらふが人間が神様を造つたのでは其神様はろくなものぢやあるまい。

佛様でも神様でも人間から造つて貰つて拜まれても仕方があるまい、宗教は此見解一つで眞偽が分れる様に思はれる。

木村兼葭堂ミかいふ茶人が西湖の水を取り寄せて、茶を煮たミいふ逸話がある位に西湖の景勝は古來文人墨客の憧憬の的となつて居たそふだ。是程の處だから本當に見物しようものなら少くも四五日の滞在の必要があらふが、連れが多い上に通辯が不自由だから仕方がない一泊丈けで引き返すことにした。而し折角の名所だから書く丈けなり今少しく書いておこふ。

李鼎ミいふ人の著した西湖小史に西湖の特色を列舉してある。

一、時による特色であつて

- 雪の景色 春の新柳
- 月の觀賞 秋の紅葉
- 西溪の梅 滿龍の佳

西湖名物

- 翁山の李 六橋の桃

四季観るものに富めるのを舉げてある。

二、地即ち地理上の特色

周圍は翠巒秀嶺を以て、繞らされて四時の風景が多種多様である。

三、堅の多い特色

古來名家豪族の別莊名園が多く此處の風致を助けて居る。

四、紡即ち畫紡の美しさ、情趣に富めること。

五、産即ち産物が豊富である。

- 西來の栗 龍弘の茶 花下の蓮根
- 湖下の順菜 玉泉の梅 亭阜の櫻桃
- 横里の蓮實 栖上の蜜橘 鴨蟹鮑

六、獻即ち偉人名士の文獻多し。

白樂天や蘇東坡丘飛等、古來多くの名士の事蹟に富めること。

七、僧即ち寺院が多いこと。

八、艶即ち美人が多いこと。

蘇東坡は「西湖山水の滋味を受け姿容畫の如く遠く望めば嘆風の楊柳の如く近く相對すれば初日の芙蓉の如し」ミいつて西湖山水の秀麗が名妓蘇小々を生んだミいつて其艶美を歌つてゐる。蘇小々いふ女は「天性聰明口に任せて語を吐く皆格を成す」ミいはれて、次の詩を作つたそふだ。

妾乗油壁車 郎乗青總馬

何所結同心 西冷松柏下

今時こんな美人が居たら吾々一行三五日の滞在も何のその、萬障を排して拜顔の榮を荷ふものを、そこらの畫舫の裡にはそんなビウチイは見當らない。

薄暮に及ぶ迄湖中を廻つて西湖十景の隨一なる三潭印月を觀、斷橋には残雪なきも美しき寶石山や葛嶺を背景にして、船中から夕景色の景を賞した。漸く船を捨て、旅社に歸つたのは點燈頃であつた。

今日は朝から自動車に乗り汽車に乗り船に乗り一日乗り物づくめ、晩は妙な馴れない寢臺に乗つて一夜を明かさねばならぬ。

支那宿

風呂に入りたくても支那宿のこゝ風呂のありそふもない、室内の洗面所で顔や手先を洗ふばかり支那宿は食事に次で之れが困る。

夕食は九人共通で例の一卓の支那料理を食べた、支那でも矢張料理屋の飯と宿屋の飯は味が異ふ、上海の料理の味を知つてからは田舎の料理は食へない様に思つた。

便所

序に今一つ困るのは便所だ、室内に大小便器を備へてあるが之れは占有でない、合客も共有である。氣持が悪いから尋ね廻つて裏の方にある共同の大便所に行つて見たら尙驚いた、一列に並んだ西洋式の便所、門戸開放であるが門戸も仕切もない、満員の時は十門も揃ふて發砲ミくるからたまらない、支那人先生平氣なもの煙草を燻らしながら大言壯語か寢言か知らぬが、大きな聲でお隣同士でチンパンカンパン………之れが支那漫遊第一の滑稽であり閉口の場面であつた。

市街の夜景を見ようと思つたら既に一行中の猛者達が虜にして離さない、仕方がないから旅館の前通を一二丁散歩して繪葉書や書物屋を漁つて早く休んだ、蒲團が薄いで寒かつたが風も引かずに能く眠れた。

三月二十九日 杭 洲

今日は杭州見物を切り上げて早い汽車で上海に歸ることにした、一行九人宿を辭して馬車で杭州車站に出た、市中は上海城内や蘇州の町と大差はない、目立つのは食物店の多いことだ。殊に豚や牛や羊や鳥類の肉を鬻ぐ店が多い、羊の頭や豚の丸肉が店先に並べてある、羊頭を掲げて狗肉を賣るこいふ言葉が成程こ肯かれた。

葛君の見送りで無事に汽車に乗り込んで杭州を發した、汽車中で繪葉書三十枚程認めて諸方に通信した、晝食は汽車食堂で済ました。

五皿でコーヒー付き壹弗、値も安い味もよい、二時頃上海に着き豐陽館に歸り着いた。不在中に要事が出来て居た、小林洋行に行つて商談で支那人と會つた、少しづつでも商賣が擴がつて行くのを有難い、溫洲に行かるゝ小山氏や上野氏に別れを告げた、今夜汽船に乘らるゝ筈だ、自分は今夜同窓の先輩である中村鐵一君に招かれた。

晚餐會

場所は寶山路橫濱橋北詰にある同君の家庭である、相容は同窓岡里喜君夫婦に同窓立石亮君夫婦ミワイエムシーエーの前田寅治君である、皆相識の間である。夫に凌道揚先生夫婦之れは支那の青年官吏であるが二人とも眞面目なクリスチャンで米國で勉強された人である、妻君の英語の達者なことは夫君のゼンツルマンリーには大に感心した、中村令閨の自

慢の手料理、次では獨唱妹君のピアノ演奏を饗せられた、久し振りで家庭的な會食が出来て嬉しかつた、自分は感謝と感想を述べた、英語でやらないと凌先生二人に通ぜぬので一寸考へたがブロークンを列べるより日本語で失敬した、後で中村君が達者に通譯して居られた、凌先生は英語で挨拶された、クリスチャンは人種や國別はない、日支親善はクリスチャンの肩にかゝる、支那と日本の間に橋を架けることが出来るならば夫れはクリスチャンこそない得べき事である、こいふ意味の話をして居られた。

充分に歡待を受けて十時頃辭して同君夫婦と同道散歩しながら宿に歸つた。

惡車夫

途中で車に乗れる日本人から聲かけられた、夫は助けを求められたわけだ、惡車夫に引き廻はされて言葉が通じない爲宿屋につく事が出来ないこの事、初めて船から上つた日本人は時折此手にかゝつて散々な目にあふそふだ、成程夜の上海は物騒と思はれる。岡君が適當な宿屋を知らしてやつて支那語で車夫を叱つて居られた。

三月二十日 上 海

今日も天氣快晴六時起床風呂に入り朝食を済まして上海出發の準備をしかけた、二三人知人の來訪あつて會談した。

土産物を買ひに行つたが支那語が不充分で思ふ様に買物が出来ない。

自動車で章君の案内で或石鹼工場に商用で訪問した、主人も支配人も日本語が出来る、思ふ様に當方の意志が通じた。

上海で纏まつた注文を受けたのは此處である。

四時頃小林洋行に歸つたら支那第一の化粧品工場香港に本店を有する廣生號の上海支店の販賣係の人ミ技手らしい人が来て居られた。

商賣は出来なかつたが種々先方の事情や要求を聞いて將來を約して別れた、出發近くになつて商談が出来かけるのはよろしいが餘り永く滞在も出来ないので明晩出發する事にした。

六時頃から「別有天」ミいふ生粹の上海料理を食はする料理屋に小林洋行店員一同ミ晚餐を共にした、さすが自慢の處だけに料理の工合は大に賞味の價值があつた、尙又値段の安いのに驚いた、上等の料理を充分に喰べて九人で十五圓程で済んだ、日本ならば五十圓位の相場ミ思ふた。

十時頃宿に歸る途中同窓田中兼吉君に邂逅した。

同窓先輩田川君が訪ねられたそふだが會へなかつた。

三月三十一日 上 海

今日は上海最後の日なれば要務が忙しい、洋服屋の支拂や宿の支拂を済ました、宿屋の拂は案外安かつた、横山某度々不在中訪ねられたが今朝又見へた、會つて見るミ未知の人である、先方も名前丈けで顔は知らない間らしい。先方の談の端で人違なる事を發見した今更人違こもいへず困り入つた、殊に先方は氣が付かぬミ見へて晝食を共にすべく頼りに勧められる、時間がないから程宜く斷つてお別れにした、先方も後から氣が付いて自分の處置を納得して呉れたらふ。

先方の名前職業も自分の名前要件も充分に明かつて居るのにさうして間違つたか今に其原因がわからない。

田中兼吉君が來訪して呉れた、同君は日本郵便局の稅務係を勤めて居らるゝ、今日は一日附いて通辯なり萬事の世話をする積りで見へたのだ、無沙汰勝な友人でも同窓の友人は有難いもの！

小林洋行に行つて章君以下店員一同に挨拶した滞在中の好意厚情を謝し別辭を告げた。

土産物

午後田中君と同道城内の支那人町で土産物の象牙細工、翡翠扇子等を漁り廻つた。城内で物を買ふのは夜店式で、値切れを聞いて居たが成程夜店式よりまだ小さい、田中君は自由に支那語を學つて遠慮會釋もあらばこそ百圓のものを五圓位に付けるには驚いた、これでは吾々買物の出来ないのは當然だ。

お蔭で欲しいものを安くで買へた、上海通の田中君に今少し早く合つて居たら随分便宜な事があつただらふに惜しい事に思ふた、而しつかまつた田中君こそ迷惑千萬だらふ、半日の間に田中君の活動振を見てこんな愆さしい氣になつた。

上海名物の茶館の光景も初めて田中君の案内で見物した、滑稽な芝居も一寸のぞいた、十一時半の急行の田中君、堀口君等に見送られて南京に向つた。

寢臺車で支那人と乗り合はしたので荷物が氣になつて充分に熟睡が出来なかつた、夫でも二人連れであるから餘程助かる、支那内地の一人宿はそれこそ壽命が縮まるかも知れぬ南京、濟南、青島、天津と之から愈本舞臺に入るのである。

四月一日 南京

朝六時頃目を覚ますと汽車は進行を續けて居る、此鐵道は南京上海間の滬寧鐵路で上海

南京
輸出入品

北站から南京城外下關車站迄百九十三哩である、此沿線は所謂江南の沃野であつて纔に南京附近に於て丘崗の起伏する外概ね一望千里の耕野が連つて居り、その間大小の運河、湖沼を點綴して居る處に蘇州、無錫、常州、丹陽、鎮江等の諸城市が在る。
七時半頃南京下關車站に着いた。寶來館支店といふ日本人經營の旅館から支那人の通辯人が来て居て萬事世話して宿に案内された。
此處では宿泊せず南京見物を短時間で済まして河を渡り浦口から津浦線に乗り込む積りである。

直に自動車を命じて山本と通辯と三人連れで南京見物に奔つた。

南京は明代に創建された古き都城であつて名勝舊蹟に富んで居る。江蘇省の首府であつて人口四十萬近く在留外人も五六百人を算する。商工業も盛んで主なる輸出品は絹織物、羊毛皮、犬毛布、豌豆、大豆、團扇、牛皮、水牛皮、藥材等で輸出品は外國産の綿製品を主とし毛織品各種、煙草、石油等である。

城市

軍事、政治の諸官署も深山ある、教會や寺院も四五十も算へられる、學校も金陵大學を始め三十校もある、其他病院や圖書館や娛樂場や文化の機關が備つてゐる。さすがに北京

と對稱せられるだけある、恰も東京と京都の比較に能く似た様に思はれる、城内は例により高い磚壁を繞らし十數ヶ所の城門があつて一々支那式の名稱が付けられて往時の盛華が偲ばれる。

此處の名所を擧ぐれば

| | | | |
|----|-----|-----|-------|
| 名所 | 明故宮 | 明孝陵 | 李文忠の墓 |
| | 北極閣 | 鷄鳴寺 | 施食臺 |
| | 臺城 | 幕府山 | 獅子山 |
| | 清涼山 | 石頭城 | 烏龍潭 |
| | 朝天宮 | 莫愁湖 | 雨花臺 |
| | 鳳凰臺 | 舊王府 | 夫子廟 |
| | 貢院 | 公園 | 等である。 |

自動車で駈足見物だから此半數程しか見なかつたが概して何れも寂寞荒寒を語る遺蹟のみである、明朝亡びて後長髮賊の慘害、革命の兵亂にて殿樓堂宇悉く烏有に歸して荒草離々たる有様である。

明孝陵

明故宮

血碑亭

此處の名所隨一の明孝陵は道路修繕の爲自動車を通せず途中から引返して見物が出來なかつたが明故宮は訪れた、宮殿城壁悉く兵火に罹りて趾を止めず只五龍橋といふ小流に架せる橋、冷宮と稱する房屋があるのみ、尙一つは明の燕王に忠諫して磔刑に處せられ其親故坐座するもの八百餘人に及べりといふ文忠即方孝儒の血碑亭が残存してゐる。これもこれも遺物を見ては轉た懐古の感を深うし、又興亡盛衰の跡が鮮かに想ひ廻らされる。其邊り一體に麥烟があり菜の花が咲いてゐるのは尙皮肉である。

大明の榮華の跡や麥青し

慘刑の鬼哭するや血碑亭

鬼神も泣くや忠廟春寒き

北極閣

鐘山

玄武湖
獅子山

北極閣といふ小山の上の名所に登りて眺むるに南京一體の展望が出來る、四方を繞らした城壁や樓門が遠近に塵煙の中に望まれる、聳へ立つ鐘山の中腹明孝陵の所在が遙に見へる、北に玄武湖の水が湛へて山水の調和が保たれて居る。西の方獅子山の見ゆる所は南京北端下關車站があり、楊子江を隔て、北岸浦口と對してゐる、遠くは沃野千里渺茫たる長江流域を眺め、近くは金陵田野の風光を双眸に收むる事が出來る。

孔子廟

畫舫

秦淮河畔に在る夫子廟にも行つた、規模宏壯の大建築であるが之れも今は死物であらふ孔子以下の聖賢を祀つてある。本尊の方は寂しいものだが廟前の大牌樓の美容が秦淮河の水に映するあたり畫舫の輻湊、行人雜鬧なか／＼に殷賑の様が見へる。

所謂南京町をも自動車で徐行しながら巡覽した、此處の名物は繻子と陶器で日本への土産にすれば喜ばれるがまだ行先の長い旅だ、手數のかゝるものは禁物、買ふのは止めた、筆墨でも素見したが値を負けぬ、さう／＼何にも買はずじまい、途中で日本郵便局に寄つてスタンプを取り、寫眞を撮つて宿に引きあけた、時はまだ十一時前である。自動車のお蔭で三時間足らずで南京見物があらかた出來た。午後三時過迄餘つた時間を食事と繪葉書きに費した。

名古屋觀光團連中は寶來館の本店に滞在してゐるそふだ、漢口行の汽船を船待ちして居るらしい、茶人あり、粹人ありだから南京の滞在は面白い事だらふ、南京は骨董屋が多い上に近頃宋時代の器物もいつて、土中から掘出しつゝあるものが道具屋の呼物になつて居るそふな、一行中の茶人横井氏なき大分買ひ取つて一荷物送つた宿の主人が噂してゐる。

浦口

宿を辭して楊子江南岸の碼頭に出た、連絡の汽船で川は見えぬ江海を渡つて、浦口に上陸直ちに汽車に乗り込んだ、丁度我關門の連絡に似て居る、宿の番頭が此處迄送つて荷物の始末や切符の世話に行き届いて呉れるので有難い。

浦口は見物に歩く時間がなかつたが、津浦線の終點で楊子江の左岸に出來た新發展地である。北京、天津、濟南、南京、上海を結びつけて海に近き支那の中部を南北に貫通する鐵道の要衝であるから、大棧巨舖軒を連ね又工業發展の要素をも備へて居る、將來市況益殷盛を來すであらふ。

停車場所謂車站は三層煉瓦造の大建築であつて規模の壯大なる事は本線隨一であるそふだ。

津浦線

五時五分の急行列車で浦口を出發する、天津迄六百三十哩の要路の鐵道だから乗客も多い、支那官憲の人や外國人が大分多く乗り込んで居る。而も此線路が山東線と共に一番物騒な所で馬賊や土匪の名所らしい、此事を豫て聞き知つて居たから何だか神経がかさぶ様な氣がする、一等寢臺に山本と二人で借り切りと思つて居るこそふでない、そこへ一人の支那人が這入て來た、服装なき見るこ一等客の様に見ゆるが顔は如何にも一癖ありそふだ

虎髯逞ましく眼は爛々として人を射る、それこそ燕人張飛の相貌を見るよう、支那語で挨拶するに日本語で答へる東京に五六年居たといふ、徐州で下車するそふだが丁度眞夜中頃になる、別に泥棒を疑ふわけではないが何だか氣味が悪い、そこへ幸ひボーイが来て外の室へ案内して行つた、お蔭で後は山本二人切りで一室占有が出来た、扉は内からロックが出来るから先づ安堵を思つてるに、豈圖らん扉の錠前が破損して役に立たぬ、バンドで括るやら鎖でハンドルを結び付けるやら大騒ぎを演じた。

沿道の景

車窓から沿道を眺めるに平凡な景色である、低濕な荒地といふか水田といふか、見渡すかぎり海の如く連つて居る。處々に丘陵地が起伏して居る、水田の中池沼の邊に田村が散在して楊柳青き處草膏の農家があつて、犬もゐる鶏も遊んでゐる。所謂唐子なる兒童が水牛に乗つて夕暮の野に草飼してゐる、畫題になりそふな所が澤山あつて却て吾等日本人の目には此大陸的な粗放な眺めが珍らしい、此邊が氣が注いだのは墳墓の多い事である、普通支那の墓は小さい土饅頭であつて上等の方は寢棺にして地上に安置又は之れを被ふ丈の石垣と瓦で小屋を造つてある。夫も共同墓地でなく、自分の所有の野原や畑に葬つてある石垣を繞らし樹を木植へて手を掛けてあるのは殆ど見當らない。

支那墓

鐵道沿線到る處に野の中畑の真中に此土饅頭が蟻塚の様に無數に續いて居る、古いのや新らしいのや半ば壊れて居るのやら水沼の中に残つて居るやら必ず旅行者の注意を引くのである。人家や行人の往來は廣い土地にまばらにしか見へないのに墓丈がさうしてこんなにも多いのか一寸考へて見た。平面的には國廣く人多き處多産多死の事實即ち出生率も死亡率も下等動物の様に賑かである爲ではないか、又國土古くして歴史永く興亡變亂人の死が累積して此處に至りしにあらざるか、之れ立體的の原因さもいへよう。

徐州城 春秋の時代宋の鼓城たりし徐州府は後に楚玉項羽が都せし處、漢の高祖と武を争ひし古
 兗州府 戰場九里山は此沿線江蘇省北部に在る、周代の舊都たりし兗州府及大聖孔子の闕里として
 魯城 知らる、魯城曲阜は山東省南部の沿線にあつて支那五山の一として有名なる泰山遊覽の客
 曲阜 其車站に集散して居る、かくの如く歴史的の興味に富める處であるが、夜行の悲しさは
 泰山 充分に觀光が出来ない、夜明けに濟南に着くのを楽しみながら寢臺に眠つた。

四月二日 山東線

眼を覺ますに東の方山容奇にして美はしきあたり旭日既に昇りて一望千里の平野を輝ら

濟南車站

金水旅館

してゐる。恰も渺茫たる青海原に島嶼の連れる如しである、汽車は泰山々系に近づきつゝ、遠く見へる山々がだん／＼接近して樹木に乏しき奇岩勝石を有する山容が珍らしく見らる。此度の旅行中一番氣にして居た津浦鐵路を無事夢の間に通過して濟南府車站に着いたのは九時半であつた。同窓の知友杉之原孝善君、塚田王世君の出迎を受けた、支那奥地で友人に迎へらる嬉しさは東京や大阪で相會ふのとは格が違ふ、下車して黃臺車站に馬車を飛ばして鐵道ホテルで茶菓を食し會談二十分にして青島行の列車に乗り替へた、金水旅館にこいふ日本人經營の使丁三四人來て居て荷物萬端の世話をしてくれた、此處へ來るに山東鐵道の發端であり青島の要衝であるから日本人の勢力のゑらゐるのがあざやかにわかる、日本人在留民も多い、カーキ色の日本軍人が威張つて見へる。一等列車の大きな箱に相容はない山本二人だ、沿道でも乗人はない、青島まで全く借り切りであつた。

山東鐵道

沿線の風光

此鐵道は山東省の中部を東に走つて半島の海港青島迄二百四十哩の延長である、北部黄河の流域は地味肥沃であつて落花生や高粱や粟や大豆等の産物が多いが東に進んで半島に入るに所謂山東礮礮の地で萬項の黄土打連つて居ても氣候風土の關係が餘り豊穡でないらしい。各地に出稼人の多きも馬賊の跋扈するも之が爲かも知らぬ。國亂れ家貧にして忠臣

坊子炭坑
淄川炭坑
金嶺鎮
周村山

孝子を出すといふが天恵に於て貧弱であり戰國争闘の渦中にあつた山東省が東洋の大聖孔子を生み古來最も強國争奪の的になり猶太の地にキリストの出現ありし事が思ひ比べられる。而し沿道近くに炭層豊富なる博山炭礦があり其他坊子淄川等の炭礦及び金嶺鎮の鐵山もある、絹糸布の市場として有名なる周村の地もある。北に北京天津を有し南に南京上海を控へ近く西の方支那中部の脊隨たる京漢鐵道に連絡し、東の方支那第一の海港青島を有する濟南は通商交通の十字要衝をなすもので將來に於ては非常なる發展殷賑を來す可能性があるように思はれた。世界に知られた山東問題が只單に日支間の感情問題や行き懸りの事件でない事が首肯された。斯く觀來れば山東の地必ずしも瘠土不毛の地と評し去るべきでない。

日本人の經濟的發展商戰の戰爭は北に大連より中部青島より支那大陸に切り入るべきであると思ふ。上海は地理的には青島と大差はないが餘りに英米の勢力が強い爲急には勝利を占むる事が出来なからふ。

氣候の變

晝汽車で車窓の風物に目を樂ましながら地圖を擴げ案内記を精讀して愉快な一日を費した、汽車中では暑くてワイシャツ一枚で通したが夜になつて青島に着いた時は冬オーバー

ミ合オーバーを重ねても猶寒さを感じた、夏の濟南の酷暑ミ夏の青島の清涼が噂の通りだ
 ミ思つた。

青島

停車場に親戚井西吉郎氏の出迎を受け車を連ねて山東町松茂里旅館に落ち着いた、一流
 旅館ではないが場所が便利所謂商人宿らしい、主人始め女中迄大阪辯でなつかしかつたが
 六疊の間に二人荷物ミ同居は窮屈、おまけに夜中大きな南京虫にかまれて閉口幸に見附け
 て捻り殺した、其罰であるまいに嚙鹿が残つて顔の相好を崗す迄に腫れあがつてゐた。

南京虫

四月三日 青島

大阪から手紙が来て居た何も變つた事がないので先づ安心、此方からは毎日の様に通信
 は出来るが留守宅からはこれで二回目、先から先へ旅をする者には己む得ない。遠國に居
 る人や旅行者には努めて通信すべきものミ痛切に思つた。

見物は後廻しにして商買の要事ミ思つたが今日は旗日で休みが多い、我神武天皇祭日が
 支那の領土で守られるのは氣持がよい、夫れだけ青島に於ける日本の勢力が強いのだ。

井西氏の案内で馬車を驅つて三人連れ青島名所の見物に出掛けた。

美青島觀の

此處で旅行者を驚かすのは天然の地理的優勝ミ人工の整美である。

綠樹青松に富む翠巒を背景にして南方青島灣の碧波に蒞んで風光明媚、市街は歐風の巨
 聖赤壁の大厦高樓櫛比して街路樹の翠綠建築の赤瓦ミ相應じて美觀畫の如しである、衛生
 の設備道路の整頓全く畫に見る西歐の都市で此處ばかりは黃塵萬丈平畝萬里の支那の土地
 ミは思へない。鐵道軌路に沿ふてアカシヤ樹の並木林あるは鐵道線路の枕木の更新の材に
 備へ、膠洲灣に望む一体の青綠の松樹之れ日本より移植せしものこいふ、更に青島名所の
 隨一こいはる、櫻公園の櫻樹の豊富燎爛たる萬朶の花を賞するは、全く獨逸經營の賜で苦
 心の跡が思はれる。邦人之を繼承して其長所を發揮して今日に至れるも、若し還付の後支
 那人の手に委せんか能く今日の天然の美ミ人工の粹を保持し得るか之れ甚だ疑はしき事
 である。此点から見ても青島還付は實に惜しいのである。英國の冷淡米國の嫉視なく日本に
 して毅然たる外交手段に出てたならば必ずしも返還の憂目はなかりしものをこ走りかゝり
 の旅行者にも惜しき限りミ思はるのである。

沿革

青島の沿革はこゝに書き記す迄もなく獨逸が今より五十年前東洋方面に海軍根據地を得
 ん爲に此地の天然の要害に着目して軍人や學者を特派して實地調査を行つて其有望なるを
 認め只管占領の機會を待つて居たのである、其後一八九七年に偶々山東省内で獨逸宣教師

殺害事件が起きたので其機に乗じ一舉支那政府に迫つて膠洲灣の要所を九十九年間租借するに至つたのである。爾來獨逸の勢力を以て拮据經營十數年に至り元の小漁村は純然たる歐風市街に化し去つたのである、九十九年の歲月未だ其半を経過せざる大正三年日獨戰爭の結果我邦の管理に移つたのである。露西亞の遼東半島に於ける、獨逸の山東半島に於ける、實に興亡盛衰の好き表象である、日本政府又其特長たる軍閥軍政の勢力を傾注して經營管理今日に至つたのである。而も多大の犠牲を拂ひ勢力を費して之れ又遂に還付するの已むなきに至つた、思へば古往今來國々、人間、人間の行ふ事爲す事結局はパベルの塔砂上の樓閣である、ソロモンの榮華、ナポレオンの常勝、豐大閥の宏業、觀じれば「空の空、空の空なる哉凡て空なり」此の傳道之書の聖句が思ひ出される。

萬年山 此處の名所を數ふれば先づ萬年山といふ舊名ビスマーク山で青島防備の中堅として永久砲臺の築かれし處である、其南面の楚が忠の海といふ舊名ヴェクトリア灣の海水浴場である。藍碧の海靜波を漂はす所海水の清淨支那沿岸中第一と稱せらる。脱衣場、音樂堂、各種の遊戯場旅館等の設備をなして、獨逸時代より支那内地香港遠く濠洲方面より、避暑客を誘致して夏になるに殷盛を極るそうである、當時激戰の痕歷然たるイルチス砲臺のあり

萬年山
忠の海
海水浴場

旭山
若鶴山
青島神社
公園

し旭山は眺望絶佳を以て稱せらる。

モルトケ砲臺のありたる要塞地帯若鶴山には其山腹に青島神社がある、公園としては櫻公園の稱ある旭公園有朋公園深山公園千葉公園新町公園がある。紀念の山や公園や町に日本の名前を冠してあるが青島還付後支那政府の手に委したら又支那名前に變へらるだらふ移り變りの世の中も己むを得ない。

嶗山 猶青島を離る、三四里の山地には有名な嶗山の奇勝がある泰山と共に山東名山の雙壁であつて奇巖妙峯に富み清澄なる溪流到る處に潺々たりで恰も我が耶馬溪の比すべき所らしい。

此山系中に九水、柳樹臺、北九水、嶗頂、太清宮、白雲洞等の名所が點在して天の成せる自然の勝景三千歳の昔を語る古刹殿堂は支那國土の老大を思はしむる所である。吾々も探勝の念盛んであつたがまだ行手遠き旅行であるから悉く名所に應接の邊がない。諸官署銀行會社大商店の建築が整頓して現代的で凡て能率的に見らる、外、民家商店住宅等が殆ど洋式建築で内容外觀共に理想的に見ゆる。

一定の計畫を立て、新しく建築せられた都市の面目躍如たりといへる。東京や大阪の市

建築

病院

街は丸で世界が違ふ、殊に感心されたのは病院の完備である建築規模も大きいが数も多い、大阪見た様に汚ない狭い病室に押し込められて高い入院料で苦しめらるゝ事はない。

學校

學校としては青島中學校や高等女學校噂の堂々たる建築には驚いた、青島人口六萬人中本邦人は二割を算するに壹萬二千人である、其内軍政署や官衙の官吏守備軍の関係者が大多数であらふ。今度軍政の徹廢、守備軍の引揚が終つた時には是等の理想的の文化設備は何なる、青島神社の運命迄が噂の種になつてゐる。

之れが爲に市中は人氣消沈不安の空氣が瀰つて居る。

四時頃迄一通りの見物を済まして宿に歸つて名所繪葉書で各地知己へ三十通の書信を發した、夜は井西宅に訪れて家族達と會談した、好きな按摩療治をなして早く休んだ。

四月四日 青島

早朝身支度商用の準備をして山本同道井西氏に案内を受けて信昌洋行といふ青島唯一の石鹼工場を訪れた、此工場は元獨逸人の經營せるものを其儘繼承したので設備萬端割合に完備して居る、石鹼製造に油脂精製を兼ねて津下信義氏といふ覇氣滿々たる主人が經營して居らるゝ。香料は獨逸人時代よりのストックが二ヶ年分もあるので大した注文も出來な

支那政變

いこの事、少し品切れのものを命ぜられた。

津下氏は青島古參の人で軍政署や守備軍等の官邊との親交ある爲山東問題、守備軍引揚支那の政争日本の對支外交等の問題に就て滔々談ぜられた、なか／＼悉しいものである

- 一 山東問題は結局日本の成功なり、
- 二 將來青島は益有望なり、
- 三 奉直戦争の破烈近きにあらん、
- 四 現徐世昌内閣近く倒れん、
- 五 支那南北を通じて七八月頃は政變來らん、

こんな要點に一々理由や説明を加へて其所見や見聞を話された、石鹼屋の主人として珍らしい識見を備へた人だ、日本なごでは到底見られぬ所だ。工場や設備を見せて貰つて將來の取引を頼んで宿に引揚けた、青島の商事は之れで終つて午後は港灣や市中見物に行つた。

港灣

港は大港と小港とに別れて大港の方は東西北の三方に四千五百米突幅と高さ五米突の防波堤を築造して灣内の波濤を防ぎ灣内には幅百米突の並行せる二條の突堤がある、第一埠頭は長さ七百二十米突、第二埠頭は長さ四百米突もあつて兩者の間は百五十米突離れ五六

千噸の船が十二隻同時に繫留さるゝいふ、突堤や防波堤には軌道を敷設して貨物の運輸に便利である。埠頭附近には倉庫及石炭置場が設けてあつて港灣として萬事申分がない。小港の方も小形汽船や帆船の碇泊に便ならしむる爲に之れも小規模ながら大港に沿ふて築造したものである。由來海港都市の發達は漸進的に自然膨脹をなしたものであるから凡ての設備に統一や整頓を欠ぐものが多いが此處青島は最初獨治以來一定の合理的計畫に據つて政府官憲の力を以て建設したものであるが故に天然の風光と相俟つて各種人工的結構が實に理想的に出來て居るわけである。

住宅道路公園病院學校等數へ來れば一として我大阪なごの遠く及ばざる所である。

此處の輸入品は日用雜貨類各種染料綿糸布金物燐寸石油砂糖紙類等である。輸出品は五十萬擔の落花生、三十萬擔の落花生油、八十萬擔の塩を大宗として其他豆油豆粕牛皮雞卵桐材石炭絹織物等である、貿易額は一九二〇年一億二千萬兩を算し輸入に六阡五百萬、輸出に五千五百萬といふ數字である。

低物價の廉の

上海の物價の安いのに驚いたが青島も安い、此處は風光明媚、市街の美觀凡てハイカラであるから物價は定めし高い事と思ふたがそうでない、家賃位は近頃少し高くなつたそう

だが、其他の日常生活の物資は極めて豊富であつて従つて値も安い。堂々たる半永久的な大建築(バラック建てでない)の公設市場があつて有ゆる生活の必需品が此處で悉く整ふのである、上海や北京はいはずもがな奉天でも大連でも皆立派な市場が設けられて市民の便益いはん方ないである、大阪の巡回公設市場なご町の空地や軒下で縁日商人のやる様な貧弱なものとは同日の論でない。

之が改良改善には無論自治体の主腦なる公吏や役人の頭が進まねばならぬと同時に多數の市民が今少し文化能率的に自覺する事が最も必要である、大阪の船場あたりの舊式生活法は何さかして現代に適應する様に改良すべきであらう、差當り天満の青物市場さごばの魚市場なご今少し改良の必要があるふ、整頓せる青島の公設市場を見て座ろに此感を深うしたので序に書いて置く。

横濱正金銀行で信用狀の金を引出しに行つて同窓入江君を訪れたが生憎不在で逢へない三井物産に同窓永松君を訪ねたが之れ又不在であつた、終りに青島組合基督教會に松井牧師を訪問した、年來懇親の教友である。會堂は見晴しのよい高い位地に洋式三階建に見へた、建地坪の狭い割合に内容外觀共に能く整ふて居ると思つた。

之れは青島陥落後大阪の教友廣瀬廣次君が在住中信仰により傳道の志を起し數人の同志を叫合して集り始めたのが基となり、其後澤村牧師や松井牧師等の奮闘の結果今日此の如き堂々たる會堂の建設を見るに至つたのである、實に芥種子の如き信仰が空の鳥を宿す迄に榮へ來つたこもいへよふ。

今夜青島を出發するので宿で萬事仕度を済まし再び山東鐵道で、濟南に向ふべく二三の知己に見送りを受けて夜十時過の汽車で出發した。

四月五日 津浦線

山東鐵道夜行で夢の間に夜は暮れて今朝八時濟南に着いた。

此處は山東省の中央に位して歴山山脈を東南に負ひ、西北遙に鵠山華山の奇峯を控へて小清河と黄河の二流が近く流れ大小多くの湖沼を通過してゐる、若し黄河が氾濫し咽渴の虞なく楊子江の如く水運交通の實を擧ぐるならば此處濟南の地は恰も漢口、天津に匹敵する大都市を形成するこだと思はれる。

濟南 壁と城壕を以て城廓を成し、四方には例の通り大小の城門を築いて市中大街路に通じて

る。

全市の人口三十九萬餘、内日本人は二千五百人餘といふ、一省政治の中心地であるから諸官署學校病院等多く街衢整然、城廓の雄大、人煙の稠密なるさすが一省の都城に恥ぢない。

輓近山東鐵道の開通、青島港の發達、津浦鐵道の貫通と相俟つて商工業の勃興を見、貨物の大集散地となつたのである。輸入品は綿糸布砂糖石油燐寸染料塗料藥品雜貨等であつて輸出品は麥稈眞田落花生棉花牛骨牛油牛皮鷄卵等を數へらる、此處の名所は歴山山腹にある千佛山の幽邃、城内の北隅にある大明湖の畫舫遊覽が知られ其他廣智院といふ博物館商埠公園及趵突泉の股脈がある、我が淺草雷門大阪千日前に酷似して二七の市日には満都の子女悉く此處に集まつて肩摩穀擊非常な雜踏を極むるこいふ。吾々は此處に商用がないので歸路主な名所を市街を自動車で短時間で走り回り九時半の朝の急行に乗る積りであつた、處が停車場より市街地迄大分離れて居るのこ道路が狭くて自動車の通らぬこいふ。

一日見物に費して夜行で濟南天津間を通つて翌朝天津に着くか見物を止めて朝の急行で沿道の景色を見て夕景に天津に着くか

輸出品
輸出品
名所

ごちらにしようご考へた。濟南の見物は蘇洲や杭州ご大差あるまい、之れから天津北京奉天等も控へてゐる、津浦線の南半分は夜行で通した北半分を晝にして少し沿道を眺めたい、濟南の遊覽費夜行寢臺料等少なくとも五十弗はかゝる、昨夜山東線を夜行寢臺今夜又寢臺で揺られるより天津の宿に早くから落ち着く方が餘程氣樂で又無駄がない、こんな理由で九時半の天津行急行に乗る事にした。金水旅館で朝食を認め朝鮮銀行支店に杉之原君濟南銀行に塚田君を訪れて小時會話別れを告げた。

此鐵道は上海ご北京を結ぶ幹線であるから乗客は多い、一等には西洋人が多いが日本人も大分乗り込んでゐる、英國や佛蘭西の軍人などが乗つて居るのが目立つて見へる、近く内亂の起る前兆かも知れぬ。

黄河流域
白河流域
黄河
大鉄橋

天津に至る沿道二百二十哩の間は山東省の北部黄河流域ご直隸省の南部白河の流域地の平地である。濟南を發するご間もなく黄河の右岸水運の要津たる濼口がある、東洋第一の稱ある黄河大鐵橋を渡る、全長約四千二百尺四ヶ年の歳月を経て竣工し工費六百萬圓を費せりごいふ。

廣漠たる平野打連なりて一度黄河氾濫せんか忽ち一面の濁海ご化し去らふ、車窓より眺

めても其慘狀が想像される、禹王の故事ある禹城縣ごいふ停車場がある、平凡な不潔な所であるが大きな高麗狗の石像が二本停車場の門に並んでゐるのが變つて面白い。

西も東も坦々たる耕圃綿々ごして連つてゐるが春若くして畑に青緑の色なく原に野草の彩りを認めない只村落の點々するあたり楊柳の疎林僅に新緑を呈するのみである。田村農家の平凡なる構造、黄土に對する保護色であるまいが屋根も圍ひも皆土壁小さい窓を明けて一種の穴居の様に見へる、只疎林の綠影が村落の所在を示す位で日本の田舎に見る白い土藏土塀ご瓦屋根の間に茅屋の點々する美ご雅はごても見られない、平調平凡な風物である、殊に長風一陣到れば濛々ごして砂塵を捲き天に沖する處は如何にも大陸的で二重硝子窓の車室内に知らぬ間に黄塵が色をなす有様である、黄塵萬丈の支那語がある所以もわかる。年々北九州地方へ西風黄塵を齎す時があるが之れがゴビ砂漠より來るご傳へ聞くが成程ご思はれる、ゴビの砂塵が支那大陸を越へ海を渡つて九州や大阪の座敷の机に積る、西班牙風が世界を吹き拂ふた事もある、世界は廣い様で狭いものぢや、端なく傳道の書の詩句が思ひ出される。

世は去り世は來る地は永久に存つたり

日は出て日は入り又その出でし處に喘ぎ行くなり

風は南に行き又轉りて北に向ひ旋轉に旋りて行き風復その旋轉る處にかへる

河はみな海に流れ入る海は盈つるこゝ無し

河はその出できたれる處に復還りゆくなり

車窓に凭りて平凡單調な大陸的風光を寧ろ愉快に眺めた、例によつて腰折を披露する。

精進の心安さよ春の風

鳥の巢や山なき里の白楊樹

黄河千里源遠し水濁る

禹の水の昔を語る黄河かな

停車場に高麗狗並ぶ禹城縣

驢馬に乗る童子の遊び長閑なり

人多し國廣し支那五千歳

天津 停車場

天津に着いたのは夕景此處は停車場が三ヶ所ある、南から来る第一が西站で次が總站其次が東站で日本人や外人の下車する所は大抵此東站である、西站は地理上支那人専用の停車場であるばかりでなく、日本人や外人の下車は非常に危険であるそふだ。成程一寸眺めても近傍一體純支那人町で特種部落の様に見へて殺氣満々である、東站ですら夜間の發着は餘程警戒を要するらしい、巡查がゐても泥棒の氣脈を通じてゐるこの事だ、日本人は必ず居留地に近い東站到可成晝間に下車することを忘れてはならない、尤も之れは赤毛布に限るこゝかも知れぬ、恰度常盤ホテルの番頭が迎ひに来てゐたので人車で無事に宿に着いた。

常盤ホテルは此處の一等旅館で設備萬端行き届いてゐる、大阪人の經營で凡てが大阪式で氣持がよい、宿帳を繰つて見るに知人が澤山泊つて居る、今日も偶然同窓舊友三好君が泊り合はしてゐて早速久し振りで面會した。同君は此處に五六年も居て立派な天津通で此度獨立經營開店の爲店舗造作中此處に止宿こある。自分の商用は勿論見物萬端一切案内を引受けるこのこゝで、此上もない好都合有難い、持つべきものは友人だ。

四月六日 天津

九四

天津の第一夜を常盤ホテルで明かし今朝は元氣に満ちて起き出でた、日貨排斥未だ止まらず寧ろ上海よりも烈しい噂さを聲にして居たのこ此地には有力な知己友人もないので商賣の方は殆んき當てにしてゐなかつたが、幸に三好君と邂逅した爲少し模様が變つて來そふである、矢張支那商人と直接に應接することが出来ないで中間に居留日本商店を介し支那人の販賣人を働かして其商店の信用と實力を背景にして切り込んで行けば相當商談の見込はあるらしく見られる、要は信用實力共に適當なる仲介代理店を得る事である、そこで四五日落ち着いて出来る丈け取引の連絡をつくる事にした。

朝食後二三必要な通信を済まして山本同道中昌行といふ支那人の店に行つた、此主人は曾て大阪に永く居て間接に知り合つてゐた間柄だから日本語も巧みである萬事心安く應接が出来て愉快であつた。既に以前から取引の關係があるから商談も圓滿に片附いた、天津の業界の模様なども能く話を聞かされて好都合である、晝の時間になつて中食の饗を受け、別に料理屋に行くのではない家族店員一同と共に純支那式に食卓を圍んだのである。

山海の珍味はなくとも主人始め皆で歡待して呉れられるのが何よりの御馳走である、着津勿々支那の店で支那人に取り圍まれて御馳走になる事は思ひがけない事で好い土産話である、昨夜旅館で偶然三好君に邂逅した事や、今日此店の主人史東初君に心安く歡待される事は天津に於ける吾等の印象を極めてアトホームならしめ、隨に旅情を和らげ得たのも妙からぬのである。

午後は二三の紹介を受けた先を訪問した。

何れも快く應接を受けて天津の見聞を擴めるこゝが出来た。

例によつて天津の大觀を少しく記しておこふ。

此處は紀元前二千二百年の歴史を有する古い土地であつて春秋の時代には幽洲の地に屬し明朝の初期天津と稱するに至つたので、夫以來市街繁盛を加へ近く英佛聯合軍の北京攻略や義和團事件の結果各國競ふて居留地を得て其經營に努力し、今日の發展殷賑を來したたのである。

地勢は勃海灣の巨川白河の江口を距る三十餘哩に位し首府北京を始め多くの都市背後地を有する北部支那第一の商埠である、現今大連の興隆や青島の發展の爲稍往年の繁盛を奪

地勢

沿革

九五

はれたるかの如く見ゆるが事實は決してそふでなく、支那に取りては將來益重要な地位を占むるに至るだらふ、それは只單に北京首府を負へる海港に止まらず、運河に據る水利が能く其背後地を連結するの利便がある。尙又近時鐵道交通が發達して北は滿洲奉天に通じ南は濟南上海に呼應し、西は近き北京を経て支那大陸を縦斷する京漢鐵道に完全なる連絡が出來てゐる。かくの如く東西南北水陸交通の要衝である以上、支那の開發各都市の發展と共に益此地は其繁榮を加ふるものであると見ゆる、地圖を擴げてそふ思ふたが軍事政治的にも天津は最も重要な所である、支那の國防の點から見て假に或國が支那に志すならば天津を占領して北京を衝き青島を領して濟南に據るならば支那の國防は總崩れならぬ、隨に天津や大連や青島は支那大陸の鬼門である。支那人の騒ぐのも無理はない、青島を還附さした支那は來年あたり又關東洲の還附を迫るかも知らぬ。英國が聲援しようが米國が野次らふが日本は之れを蹴散らす腰が据つて居るかさうか、蓋し關東洲たるや日本の國家生存上死守に價すべき要衝の地たるやいふ迄もない。

市街

天津の市街は城市と外國租界に大別さるゝが城壁を取拂つてあるから判然區域が分らないが、白河と大小の運河が交流してゐるから大部分此河流が境界となつてゐる。

城市の方は城裡、城外、河北、河東、金家窩、獅子林窩窪等の市區に別たれ、外國租界は日本租界、法租界、英界、德界、俄界、意界、澳界、比界殆ど世界各國が居留地を有してゐる。

日本租界は地位が好くて一番賑かである、法界や英界は洋風の大廈高樓市街の美はあるが餘り賑かでない其他の租界は大同小異名實充分に伴はず、諸施設に乏しい所もある。

全市の人口は約七十五萬といはれてゐる、其内五千人が外國人で内三千人程が日本人である。上海と比すれば此處では日本居留民や日本の勢力が何となく強い様に思はれる、南より北に行く程地理的優越と共に日本のバックが能く利いてゐるが、經濟的方面の實果が之れに伴ふてゐるかは疑問であらふ。

諸官衙を始め病院教會寺廟等内外人の經營にかゝるもの非常に多い。學校は北洋大學校北洋政法專門學校、北洋醫學校、中學校、師範學校等多くの教育機關が備つてゐる。

商業

商業は前に述べた如く直隸山西陝西甘肅内外蒙古山東河南等の背後地の領域が至つて廣大であるから貿易貨物の集散は夥しいものである。

大正八年には輸入額一八二二萬兩餘、輸出は七一五五萬兩貿易總額一八九七七萬兩に

輸入品

達してゐる、重要な輸入品は日常生活の資料で外國より來るものは綿糸、綿製品、石油砂糖、木材、鐵道材料、紙、卷煙草、麥粉等である。

輸出品

輸出品は棉花、羊皮、山羊生皮、豚毛、落花生、燒酎、藥品、大豆、駱駝毛、棗子等が主なるものである。

工業

工業は概して幼稚であつて燐寸、木工、紡織、石鹼等の低級工業が漸次發達しつつある。此處で有名な白河沿岸の長蘆鹽場は規模宏大な大鹽田で年産額三百萬擔に達するといふ、見物に値する所らしいが行く時間がなかつた。

三好君の招待を受けて夜は天津料理の御馳走になつた、支那人三人日本人四人で食卓を圍んだ、上海と大差ない様だが暫く支那に親しんだためか非常に旨い様に思ふた。

天津料理

而し品數澤山の珍料理満足の處にお粥やあんころもちを強いらるには閉口した、山本の健啖大に氣勢をあげて支那人を喜ばしてゐた、支那料理に北京料理、天津料理、山東料理、上海料理、寧波料理、廣東料理等數へられ各々料理の特色あるこのこゝ、支那人の食道樂には今更ながら驚いた。學生時代に北京官話を學んで教科書に飲食の用語の多いのにウンザリしたが成程これでは言葉も多い筈だ。

夜の町を暫く散歩して日本人俱樂部に開演の奈良丸を聴いた、日本駐屯の軍人が三分一を占め其他は日本居留民で大入滿員連夜盛況らしい、大阪に居ても浪花節を聴かないのに天津で奈良丸の喉で白頭宰相の凶刃の場を聴いた。

四月七日 北 京

天津滞在中に北京見物を済ます事として今朝一番の汽車で出發した、沿線の風景は極めて平凡なもので楊村郎房黃村等の驛站があるが、何れも其名の示す通りで樹木は殆ど楊柳ばかり、それも枯木の如くまだ新緑がない民家の貧弱、一面の黃圃土民の弊衣垢顔殺風景なもので京濱間や阪神間と比ぶると世界が違ふ様に思はれる、三時間餘で北京の都に着く、京奉線の極點北京正陽門車站に下車して旅館の番頭に案内されて扶桑館といふに投じた。

第一印象

上海の第一印象は砂塵の多い事や支那人の不潔なこゝであつたが北京もそふである、内城外城の城門や磚壁は偉觀を呈してゐるが、町家の貧弱砂塵の多き人間の不潔、自動車の窓から見た印象は上海と同様で之れでも支那の首都かと思はれ豫想期待が外れたが之れ矢張赤毛布の偏感だらふ、裏通を走つて居て表玄関や座敷は分らぬ、北京は廣い東京に譲らない銀座もあれば猫穴もあらふ表も裏も辨へずに大きな事はいふまい。

名所

北京では商賣は抜きにして見物だけすればよい、多くの名所舊跡が数へ切れぬ程ある、先づ指を屈すれば宮城諸門の結構紫禁城輪弁の美觀である、武英殿大和殿中和殿景山大液池等内裏宮殿や離宮が觀覽料も公使館の證明で自由に觀覽せらるゝのである。

城内市街では中央公園、觀象臺、隆福寺、孔子廟、雍和宮、國子監、鼓樓、鐘樓、積水灘、淨業寺、護國寺、天壇、先農壇、陶然亭、火神廟、臥佛寺、法源寺、法塔寺等がある。

城外には日壇、月壇、倒影寺、白雲觀、天寧寺、南宛東嶽廟、鐵塔寺、地壇、黃寺、黑寺、大鐘寺、五塔寺、萬壽寺、萬壽山玉泉山、八大處、香山碧雲寺等が案内記に列べてある。

之れを悉く歴訪すれば少くも四五日はかゝる、吾々は一泊の豫定だから主な處丈けを見る事にして、宿で極めて能率的なプログラムを作つて貰つて早速日本人ガイドを伴れて自動車で乗り出した。

大液池

宮城内殿の參觀は時間の都合で明朝にして今日は城外數哩の北京第一の景勝萬壽山の見物を先にした、途中で夏の離宮もいふべき大液池近傍の堂宇景勝を見た、北海中海南海と三つに別れた湖水を大液池といふ。艶麗なる瓊華島は其湖中に在つて一段の風致を添へてゐる、殿堂塔宇の佳麗はいふまでもない、放鳥や養魚や無數である、市中の真中に湖水

を造つて樹木綠蔭を深くし天然の幽邃を造つて在る處さすがは大國の離宮と思はしむる、而し今は清帝蟄居民國の世となり殆ど廢宮となつて旅人の感慨を深からしむるばかりである。

城内の南東より斜に北西に向つて市中の大路を自動車で駆けぬけるに車窓に展開する市中の習俗風物は珍奇にして注目應接に遑なしである。

城門を出ずれば郷關の春色未だ若し、雖坦々たる道路を疾走する自動車上の展望は實に爽快いはん方なしである。盛裝した鄙美人もチラホラ通つてゐる、漢人が満人が知らないが髪化粧の具合南方には餘程色彩を異にしてゐるのが芝居に出る牛若丸のようだ。

花はなれし柳の下に通ふ美人の厚化粧

都大路に自動車驅れば滿漢蜀の美人草

なごみ口から出まかせに駄ぐる。

萬壽山

總て萬壽山に達する、乾隆以來の離宮所在地である、小高い丘陵地に大小無數の殿堂樓廊が結構莊麗を極めてゐる、雲表に聳立する煌輝燦爛たる佛香閣を中心として多くの堂宇樓門紅牆廻廊の佳美艶麗なる實に驚くばかりである、之れに昆明湖といふ海の如き湖水が

陸の景勝を相和して山水の美を調へて居る。一瞥直に畫にある龍宮城を見る様だ、我日光の結構を知る身にも此莊麗には驚かざるを得ない。日光の勝は天然幽邃の山水に人工の粹美を盡して居るから慥に天下に冠たる譯だが此處萬壽山は天然山水の景勝はない、坦々たる平野に昆明の湖水を穿ち山陵を築き、凡て人工を以て此景致を築造したものである。

昆明湖の水は三哩の玉泉山より運河を以て導いてゐるに、此點からいふに徳川の日光經營より清朝の萬壽山建築が遙に偉大なるものと思はる、無論日光は徳川家の寺廟であり一方は支那皇室の離宮であるから、其結構用途も自ら異なつて居るが今日になつては孰れも名所舊蹟の數に入つて景勝地として觀覽に供せらるゝに至つた、即ち一家の私より一般社會の共有に變つたといへる、自然にデモクラチックになつたのである、權力でも財力でも一家一人の永久に占有私用せられ得るものでないことが學ばれる、國家も個人も此點は少しも異りはない、今や清帝は蟄居同様の境遇、其權力は奪はれ其宮城離宮は一般觀衆に曝されてゐる、一三年前の歳末には財政に窮するの餘り此萬壽山を抵當にして五十萬金を借らんこせられたといふ、五百萬も五千萬も評價の出来ない支那第一の景勝地を五十萬圓で質に入れるのだ、此頃の成金の末路より尙淺ましい、歴史は繰り返す榮枯盛衰

榮枯盛衰

は天下の鐵則洋の東西、國の大小を問はないのである。萬壽山の莊麗を見て座ろに感を深うした。

往年英佛聯合軍侵入の際其蹂躪を受けて慘害を蒙つたそふだが西太后の時めくに至つて大修築を加へたのである、陵上の中央に在る佛香閣といふ丹青の彩美燦爛たる高塔が雲表に聳へて他の多くの樓宇殿堂を率ゐてゐる。

前には清冽の水を漾ふる昆明湖が此等陵上の樓閣畫廊を映じて山水の調和を完ふしてゐる、殿堂の主なるものは仁壽殿、玉欄堂、樂壽堂、養雲軒、中雲殿、蟠官殿、十丈亭、延清堂樓、宿雲簷、智慧海。萬佛殿、琉璃塔等であつて一高一低參差して或は丘により或は溪を踰へて起伏し各内荒麗華美を競ふて居る、其他諧趣園、徳和園、頤樂園等の歡興遊樂の場所も備つてゐる。湖畔十七空橋といふ風雅な橋が湖中の小島に通じて龍王廟の幽趣を相結んで景致畫の如しである、巨大な銅製の寐牛が宮樓に面して横はつてゐる、異變凶事に際すれば此銅牛が豫兆の聲を發したと案内人が笑つて話す、銅の獅子や龍や燈爐が樓門前庭に澤山に見らるる。

尙銅御殿ともいふべき堂宇がある、人の起臥する所ではない一種の佛堂であるが梁柱屋

根等悉く銅を用ひ少しの材木石材其他の材料を用ひず全く赤無垢銅塊の御堂である。「赤城霞起」といふ長額があつて此山を赤城といふらしいが成程能く名附けたもの、門牆樓門屋根瓦の色彩殆んど赤ならざるはない、青や紫や黄があつても赤に制せられて一見赤城になつてしまふ、赤を好む支那人の習性には之が大に喜ばれるのだらふ。

尙一つ珍らしいのは大理石で造つた石舫で湖邊に横付けした大船の形である、無論石造の船だから運行は出来ない、遊興酒食の場所である、船体始め主な用材は大理石の美を盡してゐる、船中二層樓になつて例により支那式の無数の丹青扁額の裝飾を施して艶麗眩きばかりである。

春花秋月歡樂榮華を極めし此莊麗燦爛たる清朝の離宮も時去りて今は全く空屋同様である、廣き境内に觀覽人の點々するあたり樓門や廻廊の處には低級な支那人の物賣が茶菓を歡め圖面を鬻いでゐるのは一段の淋しみを添ゆるのである、陽春四月春花將に至るの時なりと雖も猶蕭條落寞の氣分に襲はれざるを得ない。

順次觀覽を擅にして高樓の欄干に凭りて宿より携へた辨當を開いて展覧しながら中食を認めた、西方西山々系の横はる方を除いては廣茫千里直隸の平野が連つてゐる、北京の市

城は數里の東に煙つて見へる、西山の楚には有名なる玉泉山の勝地がある、玉峯塔といふ七層の古塔が遙に見へる、此處は金朝の行宮芙蓉殿のありし遺址である。此境内にある龍王廟の邊岩石の間より清泉潺々として噴出するといふ、此清泉萬壽山の昆明湖となり東流して北京宮城の大液池の湖を作り後運河となり白河に入るのである、「天下第一泉」の五字が其水源岸頭に刻してあるといふ。

孔子廟

見物を了へて北京に歸つたのは四時頃まだ時間があるから安定門の東南にある孔子廟を詣でた、千秋の古柏森々として境内に繁茂して自ら塵外の思あらしむる。樓門殿堂壯麗を極めてゐる、南京や蘇洲の孔子廟とは大分面目を異にして修飾管理等も行き届いて見へる大成殿といふ本堂には至聖先師孔子の神位を奉安して左右に四聖十哲をも配祀してある、序に記せば顔子。子思子。曾子。孟子が四聖で閔子。冉子。端木子。仲子。有子。冉子求。言子。卜子。冉子雍。顓孫子が十哲である。清朝歴代皇帝の勅猷に係る扁額や幾多の碑亭である、元朝以來の幾多の進士顯名碑周代の遺物なる石鼓が珍らしい。石鼓は石の形狀が鼓に似たるを以て名づけたもので周の宣王群臣を率ゐて崎陽に獵せし時騎射に勝れる者の功を後世に傳ふる爲に其名を録したものでいふ、今を距る二千八百年前の古物であつて風

四聖十哲

鑽雨蝕幾千の星霜を語るものがある。

國子監

西隣にある國子監といふのは支那の舊大學であつて元明以來數百年の最高學府として天下の俊秀の淵藪たりし處であるが、今は唯歴史的博物館として保存されてゐる。

十三經

此處に乾隆帝の勅建に係る十三經がある、石碑に十三經を刻したもので石經といふ、十三經といふのは三經(周易、尙書、毛詩)三禮(周禮、儀禮、禮記)三傳(春秋左氏傳、公羊傳、穀梁傳)及論語、爾雅、孝經、孟子である。

此等の史的遺物を見れば如何に支那の歴史が古く又往時の盛華今日と相距る遠きを思ふのである、世界最大の書物として舊新聖書を有する猶太民族が國亡びて世界に離散し佛教寶典の本源たる印度の國は之れ英國の屬領地と化し去り、聖賢儀禮の經書に富む支那大陸今や國家あつてなきが如く國の亂れ止む時なく堯舜の世は既に夢の昔となり去つた。

儒教、佛教、基督教、回教悉く其發源地を去つて其國に止らない、遙か後進の英吉利は榮へ日本は興隆し米國は世界に覇をなしつゝある、トルストイを出したる露西亞は亡びルイテルを生みし獨逸は敗類に歸しつゝある、之れ實に吾等國民にして大に學ぶべき点であり人間として深く鑑むべき眞理が存するのである。古往今來混沌として回轉停止する所な

き萬國興亡の歴史の裡に人類の錯誤と罪惡が鮮かに失敗に終り反對に正義と眞理が照々として輝いて勝利を得てゐるのである。

鐘鼓樓

元の世祖忽必烈の建設せりといふ鼓樓鐘樓は共に北京名所の一であるが登つて見る時間がない、之は國家事變の際急を城外に告げ平時は城内夜警の司令塔となせるものであつて當時の大鐘や大鼓が遺物として残るのみである、尤も今は太鼓を打つて夜警の合圖となしてゐるといふ、何れも規模宏大な高樓であるから城内の景致を添ゆるに足るのである。

雍和宮

雍和宮と稱する著名な喇嘛寺が孔子廟の近くに在る、之れは清の世宗雍正帝が喇嘛教に歸依して其邸第を喜捨し喇嘛教の本山靈場となした所である。昭泰門や雍和門があつて境内は随分廣い、雍和宮、永佐殿、法輪殿等を始め十數棟の殿堂があつて各西藏蒙古式の佛像や羅漢や觀音が無數に配祀してある、佛を祭つてあるといふより佛像の展覽會か博覽會といつた方が適當かも知れぬ、喇嘛僧が三百も籠つて勤經の聲殊勝に聞へるが政府の扶持料充分ならず賽錢の上りも少ないと見へて一山頽廢、佛像の修飾、寺寶の管理且は殿堂の掃除等に至るまで極めて不行届き如何にも衰頽の淋さを呈してゐる、而し千態萬様の佛像の豊富なる事花器や香爐や其他一切の供物什器に珍品の饒多なる事參詣者の等しく一驚を

陰陽佛

喫するところである、此處に日本なごでも観られぬ珍物什寶があるが其中に陰陽佛の尊像といふか醜体といふか實に眞面目に見て居られぬものが陳列してある、仁王像の如き荒佛の男体、觀音像の如き女体、相抱擁して陰陽合体の表情を示してゐる、女人に牡牛を配し象体に牡馬を合せ女の肉體を割いて馬上に鞍こしたる荒佛等實に人獸の性的放縱、混亂の有様が數個の等身大の佛像や人間や獸身にて完全に描出されてゐる、之は無論風俗壞亂の最たるものさすがに支那でも布を被ふて此殿堂の佛像は一般公示を禁じてあるらしい而し番人に若干のチップをやれば開帳が出来る、公然の秘密である。吾々も前後して支那の女學生の一團が教師に卒ゐられてゐた、まさかチップも出されまいと餘計な心配までする之れ而し如何なる由來か色慾戒の目的か性的教育の意味か或は賽錢取入の爲か喇嘛教本來の意味が吾々にはわからぬ案内人も知らぬ、支那には大抵陰陽佛は到る處にあるといふが日本にも其流れを汲みしものがあるそうだが、生駒山の聖天様は失張此種の尊像といふ話だ、靈驗いやちこにましますか色町花柳の信心者で大繁昌といふ、こんな由來因縁の詮議立にも及ぶまい考へて見るに支那人日本人西洋人凡て人間といふ人間悉く色慾の偶像を古往今來拜み來つて種々なる喜劇や悲劇を演じつゝある。此堂内の佛像は色界の有のまいを

描き出して且つ戒め且つ教ふる爲に善男善女の賽を待つたのである、日本で拜まれぬ尊像の記事を序に記した、此觀覽を済まして宿に歸つた、六七時間走つて大分見物が出來た。晩食後夜の北京を見る積りであつたが通辯人が居ないので止めにした、繪葉書や手紙書きに夜を費して早く休んだ。

四月八日 北京

扶桑館
飯店

扶桑館は北京では日本旅館の一等旅館で萬事整頓して氣持がよい、茶代なごも廢して居る他に二三軒あるが此等は少し落ちる、歐風旅館には大きなものがある、六國飯店、北京飯店、長安飯店等がそれである、飯店といふに如何にも貧弱に聞へるが、横文字でいへばグラントホテルスワガンスリツツ、グランドホテルデベキン、アスターハウスホテルである。

今日は朝から宮城内部參觀、天壇等の見物をなしたが少し北京の大觀を記して見よう。

北京城

北京市街所謂北京城は内城西城に別れて内城は東西に長き方形をし外城は其南面に矢張東西に長方形を造つて何れも堅固なる城壁で繞らしてある、内城は明の永樂十五年に起工して三年半を費して竣成したといふ、周圍は四十一支里高さ三丈五尺五寸幅五六丈あつて九つの城門が聳へてゐる。

城門

| | |
|---------|----------|
| 正陽門（前門） | 南側の中央にある |
| 崇文門（哈達） | 南側の東方にある |
| 宣武門（順治） | 南側の西方にある |
| 安定門 | 北側の東方にある |
| 德勝門 | 北側の西方にある |
| 東直門 | 東側の北方にある |
| 朝陽門（齊北） | 東側の南方にある |
| 西直門 | 西側の北方にある |
| 阜成門 | 西側の南方にある |

内城

四隅には角樓を設けて城壁の周囲には護城河即ち外堀がある。
 内城街は舊皇城を中心として街路井然碁盤の様である、正陽門大街崇文門大街宣武門大街等城門の名を冠した大街路や小路が縦横に交叉してゐる、東單牌樓、東四牌樓に對して西單牌樓西四牌樓があり西交民巷に對して東交民巷がある、此等は市街の一區域の名である、東交民巷には諸國の公使館や兵營が集まつてゐる、公使館區域といふ、レゲーシヨック

オーターといふは此處である。

内城は概していへば商業區域でない、諸官衙寺廟邸宅の莊大なものが多い、旗本八萬騎の居住地であつた所で東京の番町か丸の内の如き場所である。

中城

中城即ち舊城は内城の中央に位して周圍十八支里の長方形をなして高一丈八尺の壁を繞らし南に天安北に地安（後門）東に東安西に西安門がある、天安門の外に中華門があつて正陽門と相對してゐる、天安門を入るに端門を通り午門に達する之を大内正門といふ、大内は紫禁城といつて其中に大和殿中和殿保和殿文華殿武英殿乾清宮等の金殿玉樓臺を並べて清朝三百年の榮華を物語つてゐるのである、大内は北に神武門東に東華門西に西華門があつて神武門の外には有名な景山がある、西の方は西苑の地であつて北海中海南海（大液池）の湖が連つて瓊華島や寶月樓等があつて山水の雅致房屋の莊麗御苑の名に恥ぢぬ。

紫禁城

外城は内城に築造に後るる事百三十二年明の嘉靖三十二年の建築なりといふ、内城の周圍内面を繞らす計畫なりしものが經費不足の爲他の三面を残して南方のみに止めたものといふ、此周圍二十八支里高二丈頂上の廣さ壹丈四尺、七つの城門を有する。

外城

正南を永定門と稱す

城門

正南を永定門と稱す

東を左安門に稱す

西を右安門に稱す

東側に廣渠門がある

西側に廣安門(彰義門)がある

北側に東便門と西便門がある

外城は古より各地より入り来る商民の爲に開放したる所であるから商業區域になつて北京の下町ともいへる、前門大街崇文門大街順治門大街を南北に直通し東西には廣渠門と廣安門に通ずる大街が東西に貫通してゐる。

正南の永定門を入るに東に天壇西に先農壇がある、前門大街一体の市街は北京商業の中心地であつて大小店舗の櫛比車馬往來織るが如しである、旅館料理屋劇場吳服店藥品店首飾店雜貨店等は皆此處に集まつてゐる。書籍骨蒸商の本場琉璃廠は此處にある、北京の粹美殷賑は殆んど此處前門大街を中心とする小區域に集中してゐるこいへよう。

北京の商工業として特筆すべきものはない、此處は首府都城で消費地である爲大工業は見られぬ、七寶燒織通刺繡造花玉器瓦器彫刻家具銅器文具紙等の手藝的産物がある。

交通機關 鐵道

交通機關としては自動車、馬車、人力車、轎車、駱駝、驢馬等である。

鐵道は京奉鐵道が天津を経て北奉天に通じ、南は同じく天津を経て濟南上海に至る津浦線がある。中部支那を南北に貫通する漢口に至る京漢線鐵道は將來廣東迄延長するのである、京綏鐵道は張家口大同府に通じ環城鐵道は北京内城の東北壁に沿ふて城外を廻つて、我城東線の如きものである。

運河

運河は鐵道開通以來漸次衰退してゐる。

陸路

陸路は古來東南天津に至るもの、東通洲に至るもの、西南保定に至るもの、東北密雲を経て承德に至るもの、西北張家口に至るもの等四通八達首府城の面目ありしも今は鐵路に依るもの多く唯東直門を出でて承德赤峰に到るもの、み舊時と異ならずといふ。

娛樂機關

娛樂機關は古い都だけに行き届いてゐる、劇場、書館、妓館、活動寫真館諸俱樂部等澤山流行つてゐる、同文といへ其名前が日本と飛び放れて變つてゐる。劇場は舞臺ともいふが茶園といふのが多い、書館は寄席の事である、活動の事を電影といふ、第一舞臺、歌舞臺、廣德樓、慶樂茶園、中和茶園、丹桂茶園、春仙茶園、電影公司、平安電影、昇平電影等三十以上も數へらる。百萬近くの人口を有する都市多きに過ぐることもなからふ。

茶書園 電館園

市 場

學校病院教會寺廟等の多いのは勿論だが勸商場が十五六ヶ所もあり、市場が十ヶ所以上あるのが一寸變つてゐる、市場に銀錢市、珠寶市、玉器市、米市、肉市、魚市、果物市、估衣市、皮衣市、棉花市等專業市があるのは大阪の商店の地理的集中に比べられる。久寶寺町の化粧品道修町の藥品安堂寺町の金物本町の木綿鞆の海產物堂島の相場屋北濱村の株屋に並ぶ事が出来るのは面白い。

今日は北京の第二日午後三時過迄見物に費して天津に歸る筈である、見物先から停車場に出るのが近いから宿の勘定を済まして、田中といふ氣の利いた支那語の巧妙なガイドと共に自動車を驅つた、先づ宮城即ち紫禁城の拜觀である、日本の宮城は拜觀出来ない、出來ても一寸小口を通り抜けるだけ、支那の宮城は外國人の吾々赤毛布が公使館の證明を觀覽料一弗餘りで自由に觀らるゝ一寸變に思はれるがそうでない、支那の宮城は既に宮城といへない建物である遺物である、建物や遺物を一般に觀せ得らるゝのは當然である。

宮 城

東華門より城内に入つて午門を通りぬける中に大和門がある門前に内金水橋がある、大和門の中に大和殿がある、此處には元旦や萬壽節、大朝會等の際に皇上親しく出御あつて群臣に調を賜ふ所といふ、その北に中和殿がある、祭祀式典に當り祝詞奏聞の處とせられ

る、其奥に保和殿がある毎年除夜に内外の使臣を饗せられし處、その後乾清門の中に乾清宮がある、此處は親王方や大臣連に宴を賜ひ引見せられし處といふ、寶璽を藏する文泰殿、皇帝、西太后の便殿たりし養心殿や坤寧宮等がある、其他文華殿、武英殿、傳心殿等の殿堂を並べて結構莊麗實に華美燦然たるものである。

武英殿

武英殿は文華殿は國寶陳列の場所である、周代三千年の昔から各朝各時代の古珍重寶が夥しく蒐集陳列されてある。各種の銅器、陶器、漆器、寶玉、黄金細工、佛像佛具等千趣萬態其質の卓絶、其數の饒多なる見るからに眩惑茫然たるばかりである。無數の寶器中の只一品として千金萬金に價せざるものなしで低徊感嘆實にこれはこれにばかり寶御殿かなである。

御重
物寶

殿堂樓門の艶美は支那建築の特長であつて、屋根は黄や青や瑠璃の色瓦を用ひ、門柱や軒桁や垂木天井等は漆や朱泥を用ひ、丹青の彩色繪畫の艶美目を眩せんばかりである。礎石敷石階段玉垣等は殆ど大理石を用ひて贅を盡して、殆んど一枚石は思へぬ程の廣大な石材に綿密なる、登龍降龍の彫刻を施したる飾石が大和殿の階段に敷いてある。大阪城の巨石に比べて如何にも珍らしきものと思はれる、今一つ驚いたのは數十種の草花盆栽

が鉢植にして堂内に陳列してある、無論造花であるが色彩が鮮かでないから一見餘り美しく見へないので、重寶雲の如き中にこんなつまらぬものを、何故列べてあるか不思議に思つたので近よつて能く見るに驚くべし、之れ悉く寶玉珠石を以て造つたものである。有ゆる寶玉、珠石を集めて造花の花弁、葉、枝果實等を細工したものである。例へば瑪瑙、珊瑚、白玉、翡翠、水晶等の如き珠玉を以て青、黄、赤、白の色に應じて細工を凝らして造つてある。容器の鉢や土を被ふ小石迄が悉く珍石寶玉を用ひてある。王家の權勢も此處に至つて極まれりこまで思ふた。此處宮城、萬壽山、雍和宮は北京の三大名所、否見物拜觀に値する所である。北京に行く人必ず此三ヶ所は見逃すべからずと思ふ。

三大名所

天壇

宮城拜觀を済まして天壇に自動車を飛ばした、外城永定門を入るに正陽門大街を隔て、東に天壇西に先農壇がある。今より五百年前明の永樂十八年の創設である。周圍約三哩の墻壁を繞らし齊宮、圓丘、皇乾殿、祈年殿等の建物がある。此處は天子親しく皇天上帝を奉祀さるゝ、目的にて建造せられた祭壇である。規模の宏大結構の莊麗隨に北京の一偉觀である。

齊宮は二重の高墻を繞らして墻に沿ふて一六三〇尺もある廻廊がある。中央に東面せる

殿堂が齊宮であつてその正殿に玉座がある。祭祀の日には、夜陰に宮城を發し皇帝親しく駕を任せられ、文武百官、扈從して此處に集まり其位階によりて席次を定め、嚴かに祭典が行はるゝので禁衛兵の警戒民衆の參觀盛なる年中行事に想像さるゝ。圓丘といふのが天壇の主體即ち天を祀る壇であつて、天に象れる圓形の祭壇である。上中下三層に白色大理石を以て疊み、各層の周圍や階段の兩側には之れ又白色大理石の彫刻せる欄干を以て飾られてある。其下層圓壇の直徑二百十尺、高さ五尺中層は直徑百五十尺、高さ五尺、上層は直徑が九十尺、高さ五尺五寸あつて最上層の中央に、皇穹牢といふ圓塔形の堂宇がある。毎年冬至の日出前に皇帝親ら三拜九拜祭文を唱へて親祭を行はるゝといふ、其時上下百官祭壇に満ちて謹嚴齊戒此祭事に與る様は、必ずや一種の靈感を起し美觀を呈する事であらう。

皇乾宮は天壇の北門外にある瑠璃色瓦を以て蔽はれ、殿側には四十七間の長廊下を繞らして美しき御堂である。正殿に皇天上帝歴代皇帝の神位天地の神、風雷の神、雲雨の神を奉安してある。天壇親祭の時は此等の神位を此處から壇上の皇穹宇に遷さるゝのである。此處は諸神位の奉安ある爲外人の參觀を禁じてある。

祈年殿は皇乾殿の南に聳ゆる高殿で三級の段上に築かれたる高莊なる大殿堂である。其美觀が天壇の全景を率ゐてゐる。祭神は天壇と同じく、皇天上帝であつて兼ねて歴代皇帝を合祀してある歴代皇帝が五穀豊穰を祈られし處である。

此莊大なる祭壇も今は用をなさないのである。清帝祭を廢されて以來。大總統が一度祭祀を行ひし事ありといふ。皇帝に代はりて祭事を行ふことも今は意味をなさぬのである。先農壇は既に民國四年公園地に指定し、其施設中であるといふ。萬壽山といひ、天壇といひ今は民衆に開放せられ去つて莊麗の殿堂、廣濶たる境内徒に清朝の末路落日寂寥を語るのである。因に天壇、地壇(兵營所)日壇、月壇、先農壇が北京の五壇といふのである。

正午過ぐる頃見物を終りて賑かな町に出て一料亭で晝食を認めた、時間がないので北京料理の粹を味ふ事は出来ない。簡単に済まして土産物を漁りかけたが自動車で乗り廻はしてゐてはこても思ふ様に買物が出来ぬ。寧ろ買物より市中の珍奇な雜觀が面白い、一時間餘り走り廻つて停車場に出た。三時何分の汽車で快通辯田中君に別れて天津に向つた。

奉直戰爭

汽車は北京と天津を結ぶ京奉線さすがに乗客が多い、一等室が殆んど満員の有様聞けば奉直戰爭の迫れる爲に避難やら歸郷を急ぐ客が大分あるこのこゝ。席を得て山本と二人腰

を叩してゐるこゝに日本人の白髪白髯の老紳士がニコ／＼しながら吾々の前の席に着かれた、支那人や外國人の中に日本人只三人である。日本人は日本人の傍がよろしいといふ譯で此老紳士極めて、愛想好く話しかけらる。名刺を見るこゝ有名なシャツ大商店大和屋の支配人高橋幸次郎氏である。北京で十日餘り滞在して商用を済まして天津に歸らるゝのである。極めて快活な交際家であつて、始終世界を廻つて居らる様子語學も達者らしい、乗り合せの佛國の軍人を相手に佛語で流暢に饒舌つてゐらるゝ。話上手の話好き北京から天津に着く迄殆んど一人で饒舌り續けて疲勞も屈托も見へないには驚いた。其白髪、白髯の美しい事殆んど黒い毛は一本も認めないのだから、老紳士と見たは失禮だが決して無理はない。談笑を續くる間に意外にお若いのに再び驚かされた。

初めて一瞥した時は七十近い老翁に見へたが聞いて見るこゝ實にまだ四十六歳!!全く其白髪、白髯に魅せられたのである。互に好意を交換して天津車站でお別れした。人の行衛水の流れ次には何處で邂逅ふこゝやら。

宿の番頭が迎ひに見へて居たので自動車で常盤館に歸り着いた。不在中二三名の知人が訪れたらしい、通辯なしには夜の外出は不如意である手紙二三本書いて寢に就く。

今日も好天気支那に來てからまだ一度も雨に逢はない。水の變りや食物風土の障りもない元氣に満ちて奔走が出来る、之も平素の健康の賜物ありがたい。

北京行不在中に支那人を用ひて天津の業界の調査をさしておいたが、今朝は其報告を聞いた。化粧石鹼、洗濯石鹼製造等の工場三十軒ばかりあるが一流工場は二三軒で其他は小規模のものや家内工業的のものばかりである。

支那製品

歌洲大戦争の末期日貨排斥を機として工場勃發し短年月の間に相當の業績を擧げてゐる品質體裁は無論日本の製品に比べものにならぬが値段が安いのが生命で、支那人の需要にはそれで適合するのである、民度の低い且つ販路の廣大な支那には強ち品質主義で押し通すことは不策である。値段を安くすることが第一義であつて品質は第二とする方が得策であらう。第一に於ては舶來品に劣り、第二に於ては支那製品に競走に堪へない日本輸出品は、日貨排斥の聲と共に漸次衰退に歸すべき危機に頻してゐるのである。進んで原料工賃の低廉な支那に工場を持ち出すか退いて舶來品を凌ぐ良質製品にかを集約するかは我が輸出石鹼業者の大に考察すべき處であらう。

これは商標關係もあらうが尼ヶ崎のリバーブラザー會社の製品が、支那に大販路を有するここは大に参考すべき點である。

今朝天平洋行永安氏が來訪されて、天津で能く賣れる石鹼の見本を提供され石鹼業界や香料商買の事情等有益なる説を聞かされて好都合であつた、同洋行は天津で早くより香料を取扱つてゐる、店で、從來時々取引上の照會を受けた事もある。同業大阪小川商店の取引先岡田洋行と共に天津に於ける香料業の老舗である。而し天津でも上海でも香料專業で店舗を營む事は出来ない、工業藥品も染料も薬種もいふものも共營でない、經濟が保てまい、需要範圍が狭い關係上已むを得ないのである。

今日は二三の大石鹼工場を參觀し商談に出掛ける積りであつたがまだ日貨排斥の聲に懼れて先方が吾々日本商人に對談する事を好まない。支那人の通辯兼仲買の手を以て見本を提供し商談を進むる事にしたが、通辯商では徹底的の商戦が出来ない。が而し空鐵砲でないから相當手答はある。

午後は手が隙いたから三好君の案内を受けて見物に出掛けた。

此處は大阪見た様な商業都市で見物すべき名所に乏しい。市中に河や運河が多く、塵砂

名 所

李公詞

河北公園
工業
展覽會

支那風俗

の多き事能く大阪に似て居る。名所としては李公祠、河北公園、孫家花園、種植園、新河桃林等を數へらるゝが北京を見た者には殆ど目に止まるものはない。北洋大臣李鴻章を祀る李公祠の如き天津名所の第一に唱へらるゝが行つて見るにそれ程の事はない。勅建にかゝるもので殿堂は支那式に宏壯に且輪奐の美も備れりといへようが砂塵の捲き揚る平凡な市巷の真中に修築も掃除も出來ずいはゞ荒廢に任してあるのだから殺風景極まる有様で汚ない支那人が五錢か十錢で門扉を守つてゐて、參詣の人も見かけず寂寥たるものである。砂塵の町を自動車で河北公園に走つた。貧弱な公園であるが此處は一名勸業場といつて園内に陳列館がある。丁度直隸省工業展覽會といふのが開催中で觀客雜鬧を呈してゐる。老若男女、純支那風俗の色こりゝで名所舊跡の見物より此生きた人間様を見物する方が餘程面白い。遠い西洋人の風俗習慣は却て能く見たり聞たりしてゐるが、お隣りの支那の方は餘り知らない。神戸や大阪に居る支那人は純支那風俗を示すには少々物足りないが支那の都でこんな人出の中に交つて見るに老人でも子供でも男も女も群集の一人ゝが珍らしく、吾々には此上もない見物事である。それに傍で聞いてゐるにチーパーく話してゐる言葉が珍妙至極である。目色髪の色少しも變らぬ同族の人種でありながら、さうしてあ

支那美人

な音色が出るか不思議千萬、義理人情に東西なく、風俗習慣までも大同小異といへるのに言葉だけがさうしこんな變るものか。日本で奥州人、薩摩人とは話しが出来ない様に上海、天津は言葉が違ふ。支那大陸殆んど到る處言葉が變る、之を思ふに世界の方言千態萬様無理もなからう。人種や國土や風俗を混一して世界兄弟主義の實現は恐らく夢であらうがせめて言葉だけでも世界共通で行ける様にありたいものだ。エスベラントが只一部の道樂でなく世界人の自覺によりて廣く實用に語らるゝ時代があり得ないだらうか、これも夢か。講に見る様な妙齡の支那美人が粉袋の粧い美しく綾羅の衣優かに三々五々に玉歩を移してござる。玉歩といへば纏足の習俗尙止まず婦人は大抵足が小さい、大人であつて足ばかりは丸で五六歳の子供の様だ。飛び廻り走り歩く事も出來そうになく痛々しげに運んでゐる、足の小さいのは美人の資格といふ、顔がまついせめて足でも小さくしようといふ奇習、いふて日本人は足の大小なまおかまいなしだが焉んぞ知らん、西洋人の男共は女の足をやかましく、珍重する良い格好の足を見るにたまらないのだそう。西洋の女が靴や靴下に凝つて足を擧げてダンスをやるのも意味あるかなで、此足を重んずる點は支那人の方が西洋文明さかいふものに近い譯だ。獨逸通信の新聞記事にこんなのが一す面白いの

で書いておく『女の美の生命の一つとして珍重する女の足はラインランドの女のそれが最たるものだ。ラインランドの女の足の標準美で獨逸で甘い蜜の様な戀愛を耳語かんする若者はラインの河邊に行かねばならぬ。

二度こやるまいラインの畔

いとし我が子が歸らない』

西洋人が足の自然美を愛するは賛成も出来るが支那人の纏足は如何にも破壊的で、見ても氣の毒な様、尤も今では禁じてあるそうで女學生なさには殆んど見受けない。

纏足の由来因縁を列ねて見る

漢人ニ滿人の區別

美人の一要件

婦人淫奔の豫防

性慾の人爲的助長

話に聞いた事を並べて見たが成程何れにも理由があつて、互に因こなり果をなしたものでらう。工業展覽會に生きた纏足の展覽會のお添物があつたので一寸無駄を列べて見た。

顔が不の字でよい婚取れぬ

せめて足でもまこひましよう

こんな俚諺があるかないか詠む人知らず。

場内には各種の工業製産品が手広く集めて陳列してあるので、此地方の産業状態が能く伺ひ知らるゝ、日本で展覽會や博覽會を見ても素通りが多いが吾々は此處ではそうでない、工業は幼稚でも製品は低級でも陳列品の凡てが、非常に興味を以て見らるゝ殊に石鹼化粧品等の關係事業の一般を知ることが出来て好き参考であつた。

外國租界
 此處を辭して南の外國租界を見るべく市中を自動車で走る。奥國、意國、俄國の租界が市街の東部を南北に貫流する、白河に沿ふて區劃をなしてゐる。日本租界の次に法租界、英租界が白河水運に便なる地域を占めてゐる。此河岸地が一帶に紫竹林バンドミいつて各汽船會社の碼頭や税關、倉庫、船舶業者の店舗が連つてゐる。英國租界ヴェイクトリヤや路歐風街路の美觀をさすがに大英國の居留地らしく見へる。各國公館、貿易商、銀行、諸會社の大廈高樓が楡比人車の往來繁き處である。

紫竹林

銀行

麥加利銀行や滙豐銀行や華比銀行、華俄道勝銀行等變つた支那譯の名前の外國銀行が此

邊に集つてゐる。横文字で並べる。

一二六

Chartered Bank of India Australia & China, Hongkong Shanghai Banking Corporation, Langue Pelge Pour L' Etranger, Russo-Asiatic Bank である

日本の銀行は横濱正金銀行支店がある。金を引出しに行つたが支那人の客の多いのこ、支那人の行員の多いには驚いた。

支那銀行の種別や業務が一変つてゐるから序に記して見るこ左の通りである。

銀行 一、泰西式銀行

北洋保商銀行、中國銀行、交通銀行等であつて官廳の出納及資金の融通、其他一般の銀行業を兼營する。

官銀號 二、官銀號

裕源銀號、裕豐銀號で共に官營であつて北洋元銀、香港弗銀及公砵平兩銀に對して一覽拂約束手形を發行する。

爐房 三、爐房

萬豐號、中裕厚、永康號、慶源號、滙大號、公信號、であつて自家の資金を以て銀

滙票莊

四、滙、票、莊

塊を購入し、之を天津元寶に改鑄して市場に賣る、又銀號や錢舖に之を供給して兼て此等の業務をも兼營する。

支那内地の爲替取組及一般銀行業務をなす、一名票莊ともいふ、その主なるものは協成乾、蔚泰厚、裕源永、蔚豐厚等である。

銀行及錢舖

五、銀號及錢舖

共に貨幣の賣買及兩替を業とする瑞生祥、瑞林祥、瑞蚨祥は銀號であつて大資本を以て弗、兩の賣買をなす。

恒裕厚、永利號、德承義、敦慶長等は錢舖であつて小額貨幣の取扱をなす。

當舖 六、當舖

日本の質屋營業であつて大小多數の店舖が市内にある、當、典、押等の甲板が見當るのは之である。

通貨の繁雜と共に金融機關の發達といふか、繁盛といふか、之れは支那名物の一つである、夕景見物を終つて宿へ歸つたが國旗を交叉して幔幕を張り廻し敬意を表してある、之れ

一二七

は日本より待從武官某大佐が駐屯軍の爲に慰問使として派遣されたのである。居留民の有志や小學生徒は停車場に御使節を奉迎する事になつてゐるさうだ、沿道にもかなり人が集まる、毎年一度此事があるらしい、異國に居ては一入にお國の有難さが感じられることだらう。

奈良丸一行が泊つて居るやら、待從武官一行が御止宿といふので、常盤ホテルは満員の有様、お負けに名古屋市會議員視察團の乗込み、前觸れが大きいので宿では大層に準備してゐる。上海で別れて長江を溯り漢口を見て京漢線で北京に出て今日明日に天津に着く七人の連中、豫定より三日ばかり遅れてござる。何やかやで三度も座敷を換へさせられた。最上等の室は待從様にお次の座敷は奈良丸君に最後の分は例の御連中であつたかも知れぬ。流行る旅館は之れで困るが吾々無官の大夫一現客だ、別に意地張るにも當るまい。茶代でも割引して敵打つてやらうと女中を笑はしてやつた。

四月十日 天津

今日は天津を立つので早朝起き出て用事にかゝる、岡田洋行、小林洋行等二三を訪問し中昌行に史君に挨拶に行つた、相變らず快く應接を受けて又中食の御馳走になつた。吾々

日本人は動もするミチャンコロ扱ひにして、支那人を一段低い人間の様に考へたりするが之れは非常な間違ひである。大阪や神戸に居る支那人に對しても其通りで賣にせよ、買にせよ、支那人との商談なごにせうしても支那人を下手に見たり、信用を重んじない傾向がありはせぬか。言葉が分らず土地に慣れぬのを見くびるさいふのならば、西洋人に對してはさうか言葉が通ぜぬのも異國人たる事は同じわけだ、それに英語や獨語を話す洋服着た目色の變つた人間には一目も二目もおいて自ら卑下して、彼等に乘ぜらるゝ、朝鮮人や支那人を泣かせて西洋人に叩かれてゐる様な始末である。反對に西洋人が支那人や朝鮮人を毒するのを日本人が助けてやらねばなるまい。

商買でも政治でも朝鮮人を泣かしたり、支那人をいぢめては日本の立場が危くなる。日支親善が鞏固でないミ東洋の天地、興隆開發の實は擧るまい。西洋人なごさうでもよい支那人との堅い握手が最大急務、大阪商人の注意すべきは此點である。

午後は史君の案内で市中散歩土産物を買ひに出掛けた。絹綯や繻子や毛皮なき安價で買物が出来た。通辨案内なしには何一つ買物は出来ぬ錢の勘定が出来ぬのがおかし事だ。

序に天津の通貨に就て少し記す

硬貨

元寶銀一之は爐房の鑄造する馬蹄銀であつて白寶銀と化寶銀と二稱ある。
 圓銀一之は大洋銀と稱する、黒西哥弗銀之に準じて造られた北洋銀がある、尙日本
 圓銀も之に準じて造られたもので同一單位貨(一元)として通用する。
 小銀貨一之は小洋銀といふ補助貨であつて五角、二角、一角、半角の四種ある、一角
 は十仙に相當するが其交換率は大洋銀一元に對し十一角乃至十二角位であるから市場
 の都合で常に變動がある。
 銅貨一銅元又銅子兒と稱し二分(二仙)一分(一仙)の二種ある、其交換率は小洋銀十角
 即ち百仙に對し一分貨百八個内外である。

兌換券

銀票一之は麥加利銀行、露亞銀行等で發行さるゝ兩銀票である、大口取引に用ひらる
 票子一圓銀に代用せらるゝ兌換券であつて正金、香港、上海、麥加利、露亞の諸外國
 銀行を首め、支那交通銀行、中國銀行等よりも發行せらるゝ、其種類は一弗、五弗、
 十弗、五十弗、百弗等である。

金融機關の複雑と幣制の不統一斯くの如しであるから赤毛布の吾々には錢勘定の出來な
 いのは無理もない、況して偽造や鷹造の見分けの出來ないのは當り前、兩替屋でも物買ひ
 でも獨り歩きの出來ないのはこのためである。

大和公園の遊覽を最後に史君に厚き御世話を謝して別れを告げた。法租界の三好君の店
 を訪問して歸りに外國商店で二三の雜貨品を求めた。帽子でも靴でも日本より餘程安い。
 若い別嬪賣子の居る立派な外國商店で純粹の舶來品たること間違ひない。何處へ行つても
 日本の物價の高さが思ひ知らるゝ情けなさ。

宿に歸つて出立の荷物に手がかゝる、日が重なるに伴れて土産物や手廻りが殖へるばか
 りで始末にこまる。安いとか珍らしいとかいつて買ひ集めてもウツカリするに日本に持つ
 て行つて高いものになる。此邊の呼吸がなかく六つかしい。

宿の勘定荷造萬端を終へて十一時四十五分の夜行寢臺車で奉天に出發する事になつた。

名古屋
觀光團

名古屋觀光團と出發前に顔合せ、お互に無事を祝して別れを告げた、青島に出て汽船で大
 連に行く一行と、今夜陸行奉天に向ふ吾々が又大連で逢ふ事になるだらう。後になつたり
 先になつたり此一行とは能く縁があるを見へる。

三好君や宿の番頭に送られて汽車に乗り込む、急行寢臺車であるから大分乗客が乗り込んでゐる。車窓に凭つて居るに突然番頭がポケット氣をつけなさいと叫ぶ、掏兎が逃げたこか乗つたこかいつてゐる。昨夜は吉田奈良丸天津を打ち上げて、北京に乗り込む汽車中で千弗程やられたそうだ。天津の大當りも純益ペケになつたらう。原白頭の凶刃の擗を實演する氣でもなかつたらうに、物騒なこゝだ。

幸ひ寢室も山本二人で占有、内から完全にロックして、澤山な荷物が皆同室に仕舞ひ込まれる、有難さ、日本の寢臺車の危険性が座ろに思ひ出される。

四月十一日 京奉線

京奉鐵道は北京を起點として五百二十二哩餘の延長で、南滿鐵道奉天驛に達する民國官營鐵道である。沿線通州にて通州支線を出し豐臺驛にて京漢、京綏の二鐵道に接続する、天津にては津浦線と相通じ滬寧鐵道によりて奉天、上海間一二六三哩五十五時間の行程である。湯河にて秦皇島支線を出し、溝帮子より營口支線を發してゐる。奉天にては南滿鐵道と連結して北方長春哈爾濱に通じ南方遼東半島を走りて大連に至る。東南は安奉線と連絡して朝鮮に南下するのであつて、支那鐵道中日本と最も交渉深き主要の鐵道である。

通州支線
京漢線
京綏線
滬寧線

開平炭
灤洲
昌黎

山海關

天下第一關

天津を夜行で發して寢臺に眠り、炭礦で有名な開平や奉直戰爭で名を知られた灤洲や唐宋八大文豪の一人韓退之を出した昌黎等は夢の間に過ぎて、眼を開けば汽車は既に山海關に近づきつゝあり。西北は巍峨たる山脈が重疊して相連つて南東は勃海灣の海波近く車窓より望まる。山海關に達するに山脈は愈海邊に迫つて自然に東西の關門を作して、其處に榆關城と稱する關城が築かれてゐる。要害堅固にして古來歷朝最勝の要塞として重んじた處である。關門の樓上に額して「天下第一關」とあるそうだが、玉泉山の「天下第一泉」と面白き對稱である。北京天津を京大阪と見れば、奉天は東京に相當して此處山海關は恰も箱根の天嶮に似てゐる様に思ふ。清朝は奉天が發祥の地で後に西行北京に遷都されたのであるが我朝にては西京より東京に遷都あつたのが違つてゐる。

萬里長城

世界稀有の大建造物として支那歷史上最も著名なる萬里之長城は此處に起點を發し、北方の連山亂峰の脊背を縫ふて長驅甘肅省の遠きに及ぶのである。恰も東天の旭光を受けて金蛇の如く、蜿蜒たるを眺めて座ろに二千年の昔秦始皇帝の雄圖を偲ぶのである。

守備兵

此邊に来るに停車場には日本の守備兵が居て何さなく懐かしさを覺へる。日本に居てはカーキ服の兵隊さんがあまり目にも止まらぬが、物騒な支那内地では非常に有難い思ひが

する。武装した我軍人が車内を臨検して呉れるのが氣持ちがよい。警戒保護の爲なるは言ふ迄もない。用事はないが何もなく言葉をかけて御苦勞様一言でも挨拶がして見たい様に思ふ。

此線路は今張作霖の軍隊輸送で汽車は延着勝ちで行違ふ汽車は兵隊や軍需品の満載で戰爭氣分がみなぎつてゐる。

北に進むに従つて日本人の乗客も増して次第に日本の勢力範圍の感が加はつてくる。

京奉線では時々支那兵の横暴に旅客が苦しめらるゝこゝを聞いてゐたが、幸に吾々の近くには支那兵も見當らず平穩無事に愉快な汽車旅行が出来た。沿線は津浦線や山東線と違ひ勃海灣の海岸線を走つてゐるから海景色の展望が珍らしく見られ、又山河平野の風光千變萬化應接に遑なして能く車中の無聊を慰する。地圖を擴げて展轉し行く風致に接して、愉快此上なし、時の經つのも忘れるのである。

沿線 綏中、興城、錦州、溝帮子等の都府城を経て新民府に達する頃は夜に入つて奉天驛着は豫定時間より二時間の延着で午後十時頃着いた。

延着の爲め大連行の急行に乗替が出来なかつたので此處で一泊する事にした。瀋陽館に

日本料理

いふ日本旅館の番頭に迎へられて、馬車で四五丁離れた宿に着いた。

風呂に入つて疲れを休め食膳についたが久振で新しい鯛の刺身が旨かつた。鯛の味噌漬に鰹の鹽辛、赤味噌汁に赤貝の酢の物、鮑子竹の子の煮込等皆口に合ふ料理ばかりでうれしい。

夜目ながら奉天停車場の宏莊附近街路の大建築、道路の廣潤整美なるには少からず驚かされた。空腹に日本料理の旨かつた事此夜景の美觀は奉天の第一印象を期待以上にして仕舞つた。日本人の按摩を招んで奉天の時事を開きながら寢に就いた。

四月十二日 奉 天

昨夜電話で同窓の舊友大久保君に着奉を通知して置いたので今朝早くから訪問を受けた十三四年振に面會して互に健在を祝し年を拾つたり、子寶の殖へた事を切り出しに快談を交へた。同君は數年前より此地に食料品店を獨立經營して堅實に地歩を進めつゝある、學校時代は随分腕白な方であつたが今は非常に眞面目になつて全く別人の如き感をなした。今日は吾々の奉天見物につきあつて、案内役を引受けるこのこゝに到る處同窓舊友の好意温情を受けて、游學時代の餘澤がしみじみ嬉しく思はれる。

今日の行程は一日名所見物に費し夜行にて大連に向ふのである。此處では少しも商用はないので肩が軽い。自動車で親友の案内を受けて名所舊跡の歴訪が出来る。旅行の愉快は此處にあるので何時までも楽しき思出として残るであらう。

沿革

留京

奉天は瀋陽といふのが本名で元朝に瀋陽路と稱したのに始まり明時代には瀋陽衛府を置いたのである。今を距る約三百年前清の太祖帝業を肇むるに當り遼陽より此地に帝都を遷して盛京と稱し。其後二十年を経て更に北京に都を遷して此處に留守將軍を留め留京と稱したのである。其後滿洲を奉天、吉林、黒龍江の三省に分ちて此處に奉天府を置いて奉天省の行政中心となつた。清帝發祥の當時は其領域は今の南滿洲の一部に止まり西には明あり、北に蒙古あり、東南朝鮮國と隣接してゐたので瀋陽の地は地帶上帝都として最も好適の位置であつたらう。現今中華民國督軍たる張作霖が此地に據つて、軍政統治の樞軸を擁して東三省に覇を唱へてゐる。西に直隸軍と對峙し北に西比利亞と隣し東南我朝鮮と相接せる狀勢恰も清國興勃の時代に彷彿たるものがある。尙我關東洲及滿鐵沿線租借地との接衝ありて東三省督軍の威望責任一層重きを加ふるのである。而しながら其内面の實狀に於ては大に異なるものがある。露西亞既に南下の力なく日本に於て領土的野心なく滿洲保安

張作霖

統治に就ては殆んご共同の利害に立つのであつて、外冠に對しては滿洲に於て假裝敵國を認めない、只馬賊の棟梁、直隸派其他の督軍との軋轢内憂が頻發して平和を脅かされるであるが、夫にしても地勢が山海關の天嶮以北全く別天地を劃して居るから中央の政争變亂にも超然たるこゝが出来やう。奥州の伊達、薩洲の島津が天下を取れなかつた如く張將軍の勇武を以ても中央に號命する事は出来なからふ。

中央に野心なく滿洲に割據して内治富強に努め其重望を全うするに於ては張作霖萬歳で帝王の如き威望を維持するこゝが出来るのである。歐洲戰爭以來列國平和の待望深く國際聯盟軍備縮少の高潮せらるゝ時、日本の諒解を空頼み部下軍隊の精銳を誇りて奉直開戦を敢てせる張作霖は見事に失敗を演じたのである。天の時と人の和を無視し、地の利さへも進んでは不利なるを知らずして、無謀の戰爭を起したこゝは責めておく。

奉天に於ける張作霖の聲望榮譽の偉大なるを見聞して印象が深かつたので一寸餘計な法螺を吹いて見た。

市街

奉天市街は三區界に劃然分つ事が出来る。滿鐵附屬地と開埠地と城内とである。先づ奉天車站に下車するに滿鐵附屬地市街の整頓に驚くのであるが、大滿鐵社が其偉大なる實力

うごんや

を以て經營せる都市計畫が實現せるもので雜然たる支那街の面目を異にせるは勿論である。停車場を起點として照徳大街瀋陽大街が基幹となつて大小の街路が縦横に配列して大街道には人道と車馬道を分ち、處々に廣場を配し公園を設けてある、公設市場の設立上水下水道の完備實に文明的新市街の好模範である。主要建物は奉天停車場に次ぐに南滿醫學堂、滿鐵奉天醫院、共同事務所、大旅館等である。一寸此處で滑稽に思はれたのは煉瓦造五六階建の大ビルディングの一部に白いペンキ塗にうごんや大書した大きな看板が掲げてあつたのである。停車場であればうごんやの必要もあらうが、二十幾間もあらうといふ大通堂々たる大建築が列つてゐる奉天驛頭にうごんやの大看板が仰々しく目に入るのは餘り感心しない、外に看板がないから餘計に目立つて見える。新市街外觀の整美は備つてゐても内容の貧弱さを暗に物語る一端もならう。最近戸數四千餘、人口一萬八九千を算するといふ、住民悉く此うごんやを知らぬものはなからう、上下の汽車乘客殆ど此看板の目に止まらぬものはなからう。廣告として此うごん屋君大成功である。

次に開埠地は城市の西邊に附屬地と連結せる十間房、大西關、小西關、一帶の地を總稱するのであつて此處は各國人の雜居地である。日本總領事館を始め英、佛、米等の諸外國

域内市街

の領事館、支那交渉局等がある、内外人の商店、會社の集まれるも十間房と小西關に至る大街道であつて戸數約一萬、人口六萬餘其内日本人は約二千餘といふ。

域内市街は奉天驛より東方一里餘に位する、お附物の城壁城門は堂々たるものである。壁上の幅員厚くして野砲放列を布くに足るといふことである。清帝發祥の舊都其必要もあつたらう、城壁の周圍一里半高三丈餘城門は四方に八門を有する。市街は八門に通ずる井桁形の大街道に更に大小の街路が交叉してゐる。此處で變つてゐるのは街路の名である、四方八門を通ずる街路は皆門名を附してあるから至つて簡單である。東方に大東門と小東門西方に大西門と小西門、南方は大南門と小南門、北方に大北門と小北門とあつて此門に通ずる街路に各門名を附して大東門街、大西門街といふのである。大東門と大西門を相通じ大南門と大北門と貫通し、小東門と小西門とは一直線になつて當外城市街に通ずる名稱と共通である。外城は内城を楕圓形に包圍して土城壁の周圍約四里に達し其間に八邊門を開いてゐる。内城の門街と通じて内城門の名前に共通である、例へば大東邊門、大北邊門、小西邊門、小南邊門といひ内城門と外城門と通ずる中間を別名、關を附して小西關、大東關とも稱ふるそうである。此四通八達の大街道の外に雜然たる小街路の縦横に連れるは勿

胡同

論であるが、此小街路は胡同といふのである、此名稱は北京天津にもあるが奉天は殆んど大街路の外は悉く何々胡同といふのである。奉天の市街區名の整然簡單なるは隨に一特徴である。奉天の城内は略圖にすれば楕圓形な外城の中央に四角な内城が劃されてゐるから丁度天保通寶に酷似して見へる。

内城の中央に黃臺朱壁相映する殿堂樓閣が清朝の古宮殿である。今は全く空殿で何等見べきものもなく、只昔日の盛事を偲ぶのみである。此邊一帶の群屋は督軍署始め省内主要官憲の政廳軍衙に充てられてゐる。鼓樓鐘樓あり、各門に望樓あり四隅に角樓を備へて王城の景致を存するといへるが、名物の土砂卷塵の濛々たる一望千里の平野は山紫水明の我が京都の如き到底比ぶべくもあらず、砂塵に覆はれたる市街の連臺は美觀に佳趣を與へない。過ぐる日露の大戦に此處奉天平野の快戦に西南の強風濛々たる砂塵を吹き布きて風下に陣せる露軍を腦まし我軍に大捷の一因をなせりといひ聞いた。天祐我に加はれりといへるが、此地西南の風強くして天地晦冥咫尺を辨せざる事は珍らしい事ではない。地の理を知るといふは此事であらふ。

城内の戸数は約二萬四五千、人口は十七八萬と算せらる。諸官衙、學校、教會寺廟等多

商工業

く數へらる。商工業としては特筆すべきものはない。製糖會社、毛織會社等日本人の手にて經營されてゐるが、大發展は未知數であらう。滿洲第一の都市といへ軍政省治の中心で消費地であつて、生産地とはいへない。南に營口大連の商工業地を控へてゐるので商工業の興らないのは自然の勢であらう。

名所としては宮殿、北陵、東陵、法輪寺、小河沿、奉天公園、奉天大會戰忠魂碑等である。最初に宮殿を拜觀すべく領事館へ行つて拜觀許可證の交付を受けた、何人も住所姓名を記して無料で許可さるゝのである。

宮殿

宮殿は城内四平街の中央にあつて金鑾城と稱する、今より約二百八十年前清の崇徳二年の建造で清の太宗高皇帝徳太宗文皇帝の宮居せし所である。東西三十三丈南北八十九丈繞らずに牆壁を以てし南面の宮門三つある、中央門を大清門、東にあるを文徳門、西にあるを武功門と稱する。門内の兩側に二層樓二つあつて、東を飛龍閣といひ西を翔鳳閣といふ、往時文武百官の進謁する際此處を溜所としたのである。其後此兩殿は寶物倉庫に充てられ金銀珠玉寶劍書畫等を納め太宗の兜、金剛石作りの小刀、黄金作りの黄鏡、珠玉の首飾等光彩陸離として人目を眩せしめしもの今は北京へ移送されて一物も觀るべきものはない。

大清門を入れば彫龍の玉階ある崇政殿を見る、當時天子自ら政を聽かせられし正殿といふ、其後に巍然として聳ゆる高閣は鳳凰樓と稱して裡には歴代の聖像を奉安してある。大奥の清寧宮は當年の便殿たりし所である。以上三殿樓の兩側には王子、皇妃等の宮居たりし日華樓、霞綺樓、師善齋、脇中齋、永福宮、行慶宮、關雎殿、麟趾殿が正して相對列して往時の盛大を語る、王公百官政務の官衙は大政殿と共に宮殿の東隣に列んでゐる。西隣には文溯閣といふのがあつて國庫全書六千七百五十二函を蔵せりといふ。今は之を北京の武英殿に移してある。

此處では萬壽山の佳麗北京紫禁城の莊美は見るべくもない。清朝發祥の故宮今や漸く荒廢の色深く愛親覺羅の社稷亡びて、嗜昔白馬銀鞍の馳交せし廣庭も今は空しく雜草離々轉々寂寥の感に迫るのみである。

寂しさや三百年の夢の跡。

金殿の榮華の庭や草青み。

樓門に鐘の音すみて月白し。

東陵

奉天で名所として最も價值あるのは東陵と北陵である。東陵は奉天城外三里の渾河右岸

北陵

にある、天柱山の邊り風水明媚なる處に位し福陵と稱し、太祖高皇帝の神靈を奉安したものである、大体に於て結構北陵と變らず山水の景趣が北陵を凌ぐといふことである。見物は時間がないので北陵のみに止めた。

北陵は昭陵と稱して、其丘陵地を隆業山と名づくる城外一里餘の所にある。太宗文皇帝を葬れる山陵で今より二百六十年前の築造で、境内周圍九百餘間陵外の森林は周圍二里に及ぶといふ。入口には一大碑樓即ち我華表の如きものが建つてゐる。悉く大理石を用ひ石材の彫刻奇巧鮮麗には一驚を喫する、石門を入れれば前山門がある、老松參差たる所磚道を進めば左右に豹、獅子、駱駝、象等の石像が相並んでゐる。大白、小白の二石馬は太宗在世の頃乘御せられし龍馬に擬して彫刻せしものといふ。

碑殿の内に聖德碑が建つて其後に隆恩門がある。兩側に殿堂四棟相並んで其奥正面に隆恩殿がある。次に明樓といふのがあつて其内に石碑が建つてゐる。最後に圓狀山形の築土が太宗の寢陵である。境内松柏の積翠連なる所高樓殿堂樹間に聳へ、朱壁綠瓦參差して相映するの景致は恰も我日光を睹る様で黃塵濛々たる奉天市巷の唯一の清涼地と謂はれてゐる。百里の黃土打續けりと思はる、瀋陽の平野かくも松柏老杉の鬱蒼たるを見て人工の

奉天
大會戰場

美と共に自然の景趣を作せる王者の偉力を深く思はせられた。觀賞を終へて歸路に就いた山陵を出るに奉天城が砂塵の中に曇る。此邊奉天の郊外數里の圏内は總て日露大會戰の修羅場たけい處で「夏草や兵さの夢の跡」の句が思ひ出される。

今走つて居る北陵と奉天との間は、乃木軍の苦戰せし彼我決勝の地點である。東方福陵（東陵）より奉天東關に至る間は野津軍の進出した所で興隆嶺より輝山に至るの間は黒木軍の迂回せし山路である。渾河鐵橋より大石橋に至る間は奥軍の激戰を續けた修羅場である。砲煙彈雨の中に數萬の勇士が陣没せし夢の痕ならざるはない。日露最後の會戰の地點皇國興隆の大因をなせし我軍大捷の戰跡に立ちて轉々感慨に堪へない。兄二人共に出征して黒木軍に参加せしも最後決勝の時に至らず病を得て後送せらる。若し一人にても敵彈に墜れて此處に戰死を遂げたならば長へに骨を埋むるの地を弔ふて骨肉の感慨如何ならん。座ろに懷舊の情に迫るのである。

忠魂碑

祖國の爲めに忠死せる幾萬將卒の雄魂を慰むべく、日露兩國の忠魂碑が他所に在るものより一入光つて見へる。我忠魂碑は鐵道附屬地の東南部にある。小銃彈形の碑標直徑二尺八寸高さ二十三尺餘、其題字は大山元帥の揮毫である。納骨堂には二萬二千八百四十八名

の遺骨を納め毎年三月十日壯麗なる祭典が行はれて其英魂を慰むることになつてゐる。尙滿洲戰跡保友會に依りて建設せられた明治三十七八年戰役記念碑が附屬地中央の大廣場にある、碑銘は山縣公の筆といふ、高さ六十尺巍然として聳へ新市街の一偉觀である。

時間の都合で他の名所見物を打ち切つて城内大北門街の取引先寺庄洋行を訪問して、市中を暫く走り廻つて宿に歸つた。夜は同窓山縣君も訪ねて見へた。同君は滿鐵に長く居たが今は辭して奉天で何か事業を目論んで居るらしい。立派な滿洲通で法螺交りの快談を聞きたかつたが出發が迫るので時間が無い。十一時半の夜行で大連に向つた。

寢臺車の整美、日本の汽車の遠く及ばぬ所此沿線は我勢力範圍、何等の不安なく寢に就いた。

四月十三日 大連

奉天大連間は所謂南滿洲鐵道幹線南半部で二四六哩餘約十一時間の行程である（奉天長春間一八九哩餘約十時間である）此沿線は日露大戰の戰蹟地に富み記すべきものが多い。而し再び此線を奉天に歸るから其時に讓る。昨夜十一時三十二分に奉天を發して今朝八時大連に安着遼東ホテルの番頭に迎へられて旅館に落ち着いた。遼東ホテルは信濃町の繁華

大連

遼東ホテル
日本旅館

な處にある。滿鐵經營の大和ホテルを除いては第一等の旅館らしい。和洋兩様の設備があつて萬事行届いて能く流行つてゐる。其他花屋ホテル、春田旅館、吾妻旅館、大連ホテル、鎮西館、桑名館、長崎屋旅館、富士屋旅館、大阪屋旅館、初音旅館、鹿兒島旅館、山岡旅館等お好み次第に各等の旅館がある。滿洲の支那だけに日本人旅館が多い、汽車が着く多くの客引が列をなして客を迎へてゐる。

馬車や人力は皆支那人であるが此處では此連中に腦まされる憂もない。支那の領土で支那人は多いが凡て日本人の勢力が熾烈で支那人は小さくなつてゐる程で此處へ來るに全く日本へ歸つた様に思はるゝ。上海、青島、大連に並べて其特徴が鮮かに見へる。上海の西洋化、大連の日本化が南北の好き對象である。而して青島は其中間に位する。之は外觀の比較でなく其勢力の點、いふのは勿論である。

風呂へ入つて朝食を済まし疲れを休むる間もなく方々に電話や電信や繪葉書を送つたり正金銀行に信用狀の金を引出しに行つたり、なか／＼ゆつくり出來ぬ。

午後は馬車を驅つて市中を奔走した。先づ伏見臺の大賀一郎氏を訪ねた。多年親戀の間柄であるが久し振に會ふのである。生憎不在で留守居の人から大阪から來てる書信五通を

受取つた。旅行先から毎日の様に通信してゐるが大阪の手紙は青島で見たばかりで留守宅を案じてゐるが、幸に何の異變もなく子供達一同達者であるのことで何より喜ばしい。若い病人や變事が出來てゐても幾百里の海外何ぞ致方もない。考へて見るに實に互の無事は難い事だ。同窓の長野君が昨年米國漫遊中に親父の永逝に災せられて畢生の恨事を嘆じてゐるがさこそ思はれる。父母在す間は遠く遊ばず戒めてゐるが、吾々日本人はまだ之れに超然たるだけの白人化してゐない。

大連有数の成功者同窓濱崎氏の商店や滿洲貿易會社の松本氏を訪れ取引先の滿玉洋行其他數ヶ所に挨拶に廻つた。残る時間を大連埠頭の見物に費し夕景宿に歸つた。

沿革

茲で大連の概觀を記す。此處は初め青泥窪といへる一漁村であつたのが一八九〇年露國の租借地となつて東方經營の策源地として一大商港の建設を始めたのである。其後ダルニーを命名して鐵道敷設築港工事、諸官衙、兵營の建築より公園、道路修築等萬般の企圖漸く緒に就き一大新都市の現出を見んごする時日露戰爭となり、遂に我軍の占領する所となり、一時軍政を布き軍政委員の手に經營されつゝ、ありしが、三十八年九月ポーツマス條約成立の結果長春以南の鐵道沿線及關東半島一帶の租借權が我國に歸するに至つた。爾來關

東民政署を置き半島行政の中心地となして鋭意拮据經營の効成り、關東都督府を設けられて行政軍治に一生命を開くと共に南滿鐵道會社の設立さるゝや、産業經濟の方面に一大發展開發の實績擧りて今日の如き文明大都市を成したのである。

若し夫れ露國の革命赤化の事なく西比利亞鐵道にして東西交通の機能を全うするこゝが出来らば、上下旅客の來往出入貨物の輻輳實に此處大連の地は東洋一の要衝となつて殆き想像し能はざる大發展をなすであらふ。單に日本の福利に止まらず、世界交通經濟上から見て西比利亞鐵道の不通は如何にも惜しき限りである。露國の赤化色褪するの時來らば此理想達せられ、東西世界交通路の短縮を見る事であらう。

市 街

大連市街は南に南山の丘陵を負ひ北は大連灣を隔て、大黒山と相對し西は稍平崗となつて東方一路黃海に向つて展開してゐる。市區は中央に直徑百餘間の圓形の大廣場を設けて、夫より四方に放射狀に大街路を通じて多くの中路、小路を縱横に布いてある。要所には適當に廣場を設け大街路には車道と歩道の區別を付けてある。路面は特種の方法で築造して、コールターを塗布してあるから平々垣々雨天にも泥濘の虞がない、路傍にはアカシヤ、白楊などの街路樹が美しくて色づつゐる、凡て統一計劃によつて建設せられたもので

官衙區域

商業區域

工業區域

社寺教會

あるから大阪や東京の様な自然膨脹の市街とは面目を異にしてゐる。大廣場より北に走る大山通は此處の名所日本橋に依つて南北に分たれてゐる。日本橋は其北畔の近くにある大連停車場より埠頭に通ずる構内線の上に架せられた鐵筋混凝土の一大跨線橋であつて東京の日本橋や大阪の浪速橋を凌ぐ堂々たるもので、街路の廣濶と共に旅行者の一驚に價するところである。大山通の東の方へ奥町、敷島町、山縣通、東公園町、薩摩町、播磨町、越後町、西通、駿河町と相次で中央大廣場より放射狀を展開してゐる。信濃町、監部通、紀伊町等半圓狀に周圍して此等の放射狀の市街と交叉し、電車は主要街路に走つて各方面に連なり、交通の便間然する所なしである。大廣場の南一帯の地は官衙區域と見らるべき所で陸軍用地、滿鐵本社、民政署、市役所、各領事館、滿鐵社宅、諸學校、病院寺廟等が散在してゐる。大廣場の北部一帯は諸會社、銀行、市場、旅館、大小各種の店舗櫛比して自ら商業區域をなしてゐる。埠頭近傍の東廣場界限は豆油、豆粕製造等の工場油房があつて工業區域とも目すべき所である。一定の計畫によりて建設せられたる市街であるから交通衛生、娛樂、教養等凡て充分に行届いてゐる。大連神社、出雲神社、皇道會本部、東西本願寺が南丘陵地に隣接してゐる上に曹洞宗、淨土宗、眞言宗、宮地嶽教會、御嶽教會等の寺

や教會が多いのも面白く見らる、日連宗布教所が逢阪町遊廓の部落に通ずる要路に店を張つてゐるのも振るつてる。病院にお寺遊廓火葬場南山手に縦列をなしてゐるのが便利に出来てゐる。笑はせるが、大阪でもその通り天王寺飛田部落阿部野墓地が隣り合つてゐる。只大阪は病院の代りに學校が集つてゐるのがお恥かしい。此一事大阪の都市の面目丸潰れといつても差支へない。

住宅地

市街の西郊伏見臺は元營兵のあつた所、今は中央試験所、満鐵社宅、民政署の宿舍等があつて一帯の山陵地で好個の住宅地である。

支那人町

伏見臺の西北に連なる一市區は小崗子といふ支那市街で純然たる支那人町であつて、町名等も凡て支那名で全然特殊部落の形をなしてゐる。

大連附近一帯の人口約十三萬五千人其内約七割は支那人であるといふ。

大連の代表的の名所は人工的には埠頭の偉觀、天然的には星が浦の景勝であらふ。

大連埠頭

大連港は市街の中央より北東に面する一帯の海面をいふので總延長一萬二千五百尺の防波堤に抱擁されて其水面の廣さ約百萬坪といふのである。埠頭繫船岸は第一第二第三三つの岸壁があつて其延長一萬三千尺餘に達し、同時に三十四隻の巨船を繫留する事が出来る、尙不足を告ぐるため更に第四埠頭の計畫中である。北方露西亞町海岸にはチャンク埠頭が設けてある。第一埠頭の東方に石油棧橋や危險物倉庫がある、埠頭構内の倉庫は四十七棟、五萬坪の倉庫があつて二十四五萬噸の貨物を收容するこゝが出来た。外に野積場が二十三萬五千坪に上り約二十萬噸の貨物を積留し得るのである。凡て此等は満鐵の經營であつて規模の宏大實に驚くばかりですが大満鐵の國家的事業たるを肯くに足るのである。満鐵の埠頭事務所があつて船舶の着離及輸出入貨物の荷役保管貨物の保險事務等を營むのである。貿易貨物は輸入品に於ては綿絲布が第一位を占め金物及金屬類、煙草、砂糖、穀類等である、輸出品は豆粕、大豆、豆油等である。

輸出品
輸入品
海航距離
港路距離

| |
|------------|
| 30哩 |
| 順天 249 " |
| 津川 285 " |
| 島海 285 " |
| 崎司 530 " |
| 大阪 580 " |
| 香港 614 " |
| 嘉坡 859 " |
| 新嘉坡 1269 " |
| 桑港 2615 " |
| 5494 " |

海運航路は大阪商船、日本郵船、滿鐵會社、大連汽船會社等によりて定期又は臨時の船舶が諸外港との運輸に當つて大正七八年頃は一ヶ年の出入船舶五千隻近くに達せりといふ。序に大連と各港との海上距離を記せば左の通りである。